始

536
165

早稲田高等學院長　中島半次郎先生序

奥村鐵男著

# 修養訓話 偉人の言行

東京　聚英閣

大正
14.12.12
内交

536-165



# 序

英國のタマス・カーライルは『英雄崇拜論』を著して、其の中に「歴史は畢竟するに、英雄の傳記である」と云つて居る。此の考から『英雄崇拜論』は書かれたものである。

歴史が英雄の傳記であるといふことは、英雄に依つて其の時代々々の問題が解釋され、國家社會の新しき運命が開拓されるといふ上から云へば眞であるけれども、又一面から見れば、如何なる英雄でも畢竟は「時代の子」たるに外ならぬとも見られる。時代が英雄を作り、英雄が又時代を作るので、此の兩者の交渉如何は歴史の上から見ても、社會活動の現狀から見ても非常に意義の深きものであつて、人間生活の妙味はこゝに存するとも見られなければならぬ。

從つて英雄なり、偉人なりは其の國民の生み出した代表的な、模範的な人物である。假令、自身の好惡から見て、或は職業の相異から見て、己が理想とするまでには至らぬにしても、何等かの教訓を其の傳記から得ないといふことはない。或方面に於ての英雄であり、偉人であつた人は同時に孰れの方面から見ても、其の時代の代表者であり、指導者であるだけの大きな人格者であつたと見なければならぬ。カーライルは「英雄の特質は誠實を有する點である。」と云つて居る。吾等は如何なる英雄なり、偉人なりの傳記を調べて見ても、其の根柢に流るゝ人格の誠實さに打たれなければならぬ。

此の英雄なり、偉人なりの誠實に刺戟されて、吾等も亦自己の誠實を育んで行かなければならぬ。英雄の如く、偉人の如く世に大いなる誠實を有するに至らぬまでも、一點自己を欺かず、人を欺かず、又世



を欺かず、天をも欺かざる誠實さを有する點に於ては、何等是等の英雄なり、偉人なりに劣らぬものを有するだけの覺悟は持たなければならぬ。

奥村鐵男君著せるところの『修養訓話偉人の言行』は我國の過去に於ける英雄なり、偉人なりを各方面に亘つて網羅して居る。宗教の方面、政治の方面、學問、藝術の方面等に於ける偉人の跡が歴々と示されて居る。是等の偉人が如何に時代から作られ、又如何に時代を導いたかもよく記されて居る。而して其の歴史上の大人物として行動せる精神の根柢は、等しく一條の誠實さに依つて貫かれて居る。青少年諸子の修養書として、家庭に於ける好伴侶として、又は課外の讀物として誠に適當な著述である。奥村君は平常偉人の心事を追ふて修養に努めつゝある人で、君が此の書を著したことは、自己修養の體驗を廣く

世の若き人々に頒たんとするものであることが、君の日常を知れる上から、世に向つて推稱することを余は躊躇せぬものである。

これを讀む人々は唯是等の英雄なり、偉人なりを崇拜するだけに止まつてはならぬ。其の精神に觸れて自己の誠實さを增し、是等の英雄なり、偉人なりに於て眞の自己を見出し、其の精神を我精神の中に採り入れて、向上、活躍に資する修養をしなければならぬ。其の修養の結果、自己も亦是等の歷史的大人物中に伍せんとする熱烈な努力を試みなければならぬ。それがやがて是等の先哲の感化に對する吾等の報恩的の心境でなくてはならない。

大正十四年十一月十一日

中島半次郎



# 序

一時盛に行はれてゐた史傳小說も、近頃では大衆文藝といふやうな方面に一新生面を開いて來た。併しこれは飽くまでも所謂 Dichtung（作爲）であつて、決して Wahrheit（眞實）ではないことは云ふまでもない。

私は此の貧しい小著に於て、史料をばかなり自由に取扱つたが、併し其の解釋に於ては、なるべく獨斷に陷ることを避けた。それで多少考證めいたことを書いたが、併しこれは決して衒つたわけではない。唯只正確な根據を示して、從來の誤解をも解きたいといふ老婆心に外ならない。此の小冊子を公けにするに方り、一方ならぬ學恩を蒙つた我師西村眞次先生を始め、其他の先人に對して深厚なる感謝の意を表す

る。尙ほ序文を賜つた恩師中島半次郎先生や、本書の出版に就いて御盡力下された聚英閣主後藤誠雄氏夫妻並に井上勇氏の御好意に對しても洵に感謝の言葉もないほどである。又、執筆中溫かい援助を吝まれなかつた知友の方々に對しても、涙ぐましいほどの感激を感ずる。こんなに多くの人々の御後援を享けたにも拘らず、殆ど價値のないものを作つた自分自身の無能を愧ぢずにはゐられない。

大正十四年十一月十日

著者識す

# 目次


聖徳太子……一
傳教大師……一一
弘法大師……一九
菅原道眞……二八
清少納言……三九
紫式部……四八
親鸞聖人……六〇
日蓮上人……七一
北條泰時……八〇
楠木正成……八九
織田信長……一〇一

豐臣秀吉……一一三
德川家康……一三九
中江藤樹……一四一
德川光圀……一五一
山鹿素行……一六三
松尾芭蕉……一七〇
新井白石……一八一
本居宣長……一九七
塙保己一……二〇七
大鹽平八郎……二一九
伊能忠敬……二二八
吉田松陰……二三六
西郷南洲……二四七

# 聖徳太子

ほの〴〵と明け行く日本文化の曙のうちに、一際耀かしい光を放つてゐるのは、我が聖徳太子である。太子は用明天皇の第一皇子にましまし、御生母は穴穂部間人皇后と申し奉る。太子の御誕生年月に就いては、異說が洵に多く、紛然として定かにはわからない。日本書紀に據れば、御母君が或日、宮中をお巡りになつてゐると、俄かに厩の前で御産氣づかれ、御心に些かも患はせ給ふことなく、やす〴〵と御安産遊ばされた。それで、御名を厩戸皇子と申し上げた。皇子は生れながらにして言葉を解し給ひ、凡てに優れた天分を持つてゐる、聰明な方であつた。太子が五歳かの時のことであつた。或日、皇居の中で他の皇子達と遊び戯れてゐられた。皆同じ位な年恰好であつたから、勢ひ何やかと喧しい口爭ひが起り、其の騷々しさが餘りにひどいので、日頃お優しい天皇も、思はずカッとなされ、握太の笞を持つて御座所から荒々しい御勢ひで、其の場にお立ち出で遊ばされた。たゞならぬ陛下の御顏の色を見るより早く、皇子達

は太子一人を殘して、先を爭ふて一散に遁げ去つてしまつた。天皇は微苦笑しながら、其の光景を眺めてゐられた。すると、太子はしづ〳〵と父君の前に進み出で、其の場に跪いて頻りに頭を下げ、御答を受けたいと少しも悪びれや申し上げられた。父帝は些か拍子抜けのした御有樣であつたが、不思議に思され、其の譯をお聞きになつた。太子はやをら小さい頭を上げ、

『御父君、皇子等が如何に遁れようといたしましても、天には階をかけて登ることは出來ません。又、大地に穴を掘つて身を隱さうと焦つても、それはなか〳〵むづかしいことで御座います。ですから、皇子は父君の御答をお受けしようと存じます。』と、如何にも大人びた口調で申された。これからは、帝の御寵愛が愈々厚かつたといふことである。

御成人なさるにつれ、太子の聰明さは唯只人を驚歎させるばかりであつた。まだ若い時分、一時に十人の訴訟を聽いて、少しも混雜せずにお裁きになり、又、非常に雄辯な方で、兼て正確な豫言をなされたと傳へられてゐるから、餘程天才的な御方であつたと想像される。宮殿の南の方の上殿が御居間になつてゐたので、世人は御名を上宮厩戸豐聰耳太子と申し上げた。

太子は非常に好學の方で、晝も夜も一心不亂に勉强なされたので、まだ二十におなりなさらない時ですら、既に漢學の御造詣が深く、其の上、佛敎を熱心に研究遊ばされた。太子の少年時代で最も顯著な事蹟は、太子が孝道に深く御心を注ぎ給ふたことであつた。太子が十六歲の時、御父用明天皇は篤い病の床に臥し給ふた。此の時の御看護振は

衣帶を解かず、日夜病に侍し給ひ、天皇一飯、太子一飯、天皇再飯、太子再飯し給ふ。香爐を手ゆて祈請し給ふ音響を絕たず云々。（太子傳曆、扶桑略記）

これに依つて觀ても、如何に御孝心が厚かつたかは、よく知ることが出來るのである。かの法隆寺の金堂に安置せられてある藥師佛の尊像は、實に此の時祈禱のため、太子自ら彫り刻まれたものだといはれてゐる。

當時、大連を代々勤めてゐた物部氏と、大臣を世襲としてゐた蘇我氏との間に激しい政權爭奪の爭ひがあつた。それは、外面上は佛敎派と排佛派との抗爭のやうに見えてはゐたが、實は氏族制度の盛な此の時代に附き物の、醜い利己主義の衝突であつた。唯だそれが佛敎傳來を動機として起つたまでである。用明天皇の崩じ給ふや、物部守屋は屢々兵を動かして殯宮を騷がし、穴穗部皇子を擁して諸の皇子達を除かうと企てたので、皇后は大いに驚かれ、皇太后の兄蘇我馬

子に命じて守屋を討伐せしめ給ふた。戰ひ利あらずして穴穗部皇子も亦誅に伏して、二大氏族の確執は一先づ段落を告げた。爾來、馬子は獨り政權を握ることとなつて、蘇我氏の威權は朝野を傾け、果ては不臣の振舞さへ多くなつて來た。

用明天皇の御次には皇弟崇峻天皇が立ち給ひ、續いて皇妹推古天皇が即位し給ふた。そこで女帝は、即位元年に太子を皇太子に立て、萬機を攝行せしめられた。太子は博學多識で、儒學、佛教に通じてゐられたが、夙に御心を國政に注がせられ、我が國古來の習慣を基として、それに三韓、支那等の先進國の長所を加味して種々新政を施し、國運の隆興に力を傾注せられた。曆を制定して、始めて天下に分たれたのも太子の事業の一であつた。

太子は政治の革新を以て國運發展の要素であると考へてゐられた。從來、我が國の政治組織は極端な氏族制度であつたから、如何に聰明であつても、名門の出身でない限りは、官途に於ては重く用ひられなかつた。人材登用の進路を阻碍する不合理極まる此の制度の弊害を、聰敏な太子は早くから痛感してゐられた。それで、何とかして此の世襲の制度を打破して、廣く天下に高材逸足の士を求めようと日夜御心を碎かれた。併し、如何にせん、當時は蘇我氏の驕暴を



極めてゐる際であるから、流石の太子も、急激に自己の理想を實行することが出來ないのを、甚だ遺憾に思はれ、徐に策を運らして、此の改新の萠芽を育成することに全力を盡された。此の太子の計畫は、後年、我が國史上の一大革新である大化の新政を生み出す母胎となつたのである。太子は先づ、政治理想實現の第一歩として、十二階の冠位、服色を制定された。この冠位の名稱を、上の位から順にあげると次の通りである。

大德、小德、大仁、小仁、大禮、小禮、大信、小信、大義、小義、大智、小智。

階級の順序を道德的名稱に據られたのは、普通の爲政家と大いに其の趣を異にしてゐる點であるといふべきである。後、また有名な、かの十七條の憲法を制定して、施政の方針を示し、儒教の道德主義に基いて、官吏の公務上の規範並に一般國民の守るべき心得を與へられた。

此の憲法の重なる箇條をあげると、

一、利を以て貴しとなし、忤(さか)ふことなきを宗(むね)とせよ。

二、篤く三寶（佛、法、僧）を敬へ。

三、詔を承けては必ず謹め。

四、群臣、百官は禮を以て本とせよ。

七、人各〻任あり、よろしく濫りなるべからず。

九、位はこれ義の本なり、事ごとに位あるべし。

十、忿を絶ち、人の違ふを怒るなかれ。

十一、功過を明らかに察し、賞罰は必ず當てよ。

十二、國司、國造は百姓より歛めとることなかれ。國に二君なく、民に兩主なし。國民は國を以て主とすべし。

十三、諸の官吏は皆責任を重んぜよ。

十七、大事は獨り斷むべからず、必ず衆と與に論ずべし。

この憲法は道德上の訓誡であつて、今日の憲法とは名稱は同じでも、其の意味の異つてゐることに注意を要する。

太子は其の後、蘇我馬子と議して國史を編纂せられた。『天皇紀』及び『國記本紀』が卽ちこれで、我が國に於ける歷史撰修の始めであるが、惜しいかな、此の書は後年蘇我氏が誅せら



れた時に燒失してしまつた。

世には太子の事業等を曲解して、外國文化の陶醉者であるとし、或はまた、佛敎に耽溺して、何事も一切、因果の理法を以て說き、自己の責任をも廻避しようとする軟弱者である、などと妄評を下すものもないではない。これは實に妄斷も甚だしいもので、一を知つて他を知らざる痴者の囈語である。太子は決して所謂、江戸時代の一部の儒者の如く、或は現代の海外文化心醉者のそれの如きものではなかつた。實に溫柔の中に嚴正にして犯すべからざる毅然たる氣象を備へてゐられたのである。これは太子の外交政策の上によく現れてゐる。

推古天皇の十五年、太子は大禮小野妹子を正使として支那に遣はされ、始めて彼と國交を開始せられた。これより遙か以前から、九州地方の豪族の中には支那と交通してゐる者もあり、朝廷でも使を出して、彼の地から職工を求められたことも度々あつた。併し、それは非公式的なものであつたから、兩國間に公けに直接の交渉の開かれたのは、此の時が初めである。從來移入されてゐた外國文化は、主として朝鮮のそれであつたが、太子は三韓を經ずして、直ちに其の發源地に溯つて、彼の文物を輸入しようと企てられたのである。當時、支那は隋朝の隆盛

期で、國威は輝き、文化が大いに進んでゐた。太子が其の時遣られた國書には

日出處天子、致二書日沒處天子一、無レ恙云々。（通鑑綱目集覽）

と記されてあつた。支那は昔から、自國を中華、或は中國などと稱して、他の國々を南蠻、北狄、東夷、西戎などと呼び、凡てを屬國視して尊大振つてゐた。然るに、太子はそれにも屈せず、斯く對等の禮をとられたことは、我が國威の發揚に大いに與つて力があつた。妹子の歸朝に際し、隋の煬帝は裴世清といふものを隨はせて我が國に送つた。世清は國書を恭しく捧呈した。太子が其の國書を御覽になると、それは天子が諸侯王に賜ふ形式で書いてあつたから、大いに憤られ、禮に違つてゐることを痛擊せられた。そして其の返書には

東天皇敬白二西皇帝一云々。（太子傳曆）

と書かれ、彼の驕慢な態度を挫じかれたのであつた。斯くの如く、太子の外交政策は極めて強硬で、其の應對は實に痛快なものがあつた。

太子は篤く佛教を信仰せられ、馬子と共に其の興隆に力を盡されたので、これより佛教は隆盛に赴き、多くの寺院が建立せられ、佛像も頻りに作られた。それにつれて、建築、彫刻、繪



畫、刺繍等の藝術が著しく進歩し、頗る精妙の域に達した。大阪の四天王寺、大和の法隆寺は太子の建立にかゝるものである。殊に法隆寺は、我が國最古の建築を今日まで傳へ、其の中には、この時代に於て最も勝れた巨匠佛師鞍作鳥の作品、及びこの頃の美術、工藝品を種々保存してゐる。

太子はたゞに才氣煥發、新進氣鋭の才子であつたばかりでなく、仁慈の心が非常に深い方であつた。だから社會事業のために、種々力を盡されたのであつた。即ち諸國に池、溝等を掘つて農耕等の便益を計つたり、或は施藥院、療病院、悲田院、敬田院の四箇の院を開いて貧民の救濟や、老幼病弱の憫れな人々の收容のために全力を傾注せられた。また學問を大いに奬勵せられ、寺院を開放して學問研究の所とし、秀才を選拔して、留學生及び學問僧として支那に留學せしめられた。中でも、高向玄理、僧旻、南淵請安等が最も著れてゐる。

このやうに太子は我が邦の政治上、宗教上、將た文學、工藝等の上に非常に偉大な功績と、影響とを多く遺されたが、不幸にも、即位せずして皇太子の儘、終に推古天皇の三十年の春、大和の斑鳩の宮で薨ぜられた。此の時、御年四十九、天下の人々の悲しみ惜しみ奉る有樣は、

恰も父母を喪つたやうであつた。



# 傳教大師

最澄の幼い時のことに就いては、殆ど何も分つてはゐない。傳說に依れば、魏の曹丕が漢の孝獻帝に迫つて天位を簒つた時、王族の一人の登萬貴といふ人が、其の時の亂を避け、危難を免れて我國に渡つて來た。それは應神天皇の三十年のことである。彼は近江の湖水の畔、志賀郡三津濱に永住することとなつた。そして朝廷から畏くも三津首(みつのおびと)の姓を賜つた。最澄は實に、此の人の子孫であるといはれてゐる。

最澄は十二歳で始めて佛學を修めた。大安寺といふ寺の住職を勤めてゐた行表といふ人が、彼の師匠として熱心に指導したのであつた。彼は二十歳頃迄、鄉里で大、小乘の典籍を讀み、佛陀の法音を貪るやうに味はつた。多分彼は、唯識の書籍に限らず、當時、奈良で盛に行はれてゐた三論、法相、律、華嚴、倶舍、成實の學問にも研究の手を延ばしてゐたであらう。以上の如く、彼の少年時代に就いては、傳へられてゐるところは非常に少いが、後年、比叡山に立

て籠つて、雄々しくも既成宗教に對して挑戰し、これを叱咤し去つた其の英風から察するに、一少年時代に於ても、定めし英俊な神童であつたらう。

奈良朝時代の佛教は、唐から直接に、或は三韓の手を經て我が國に傳はつたので、當時の僧侶は啻に佛教といふ新宗教を傳へたばかりでなく、實に支那四千載を通じて、恐らくは空前絶後ともいふべき盛觀を呈した唐朝の文化を輸入した先鋒であつた。隨つて僧侶は新文明の宣傳者であり、新思想の輸入者であつた。こゝに於て、彼等僧侶が、時代の先覺者として、靈肉の兩界に亘つて勢力を得て來るのは、洵に自然の勢ひである。加之、當時の佛教は、鎌倉時代の新宗教が專ら來世の福祉を說いたのに比べると、實に現世的な祈禱教に墮してゐたのである。

凡そ何事にもせよ、殷盛となれば、必ず弊害を伴ふものである。當時の佛教は、實に政治の一部分となり、國家の安寧、福祉は一に三寶の力に依ると狂信せられるやうになつたので、有名な僧侶は大臣、公卿以上の尊崇と威權とを其の一身に鍾めるに至り、終には緇衣圓頂の身にして政治に容喙する不逞の徒を出し、佛教の神聖な方面は、こゝに少からざる汚點を印せられるに至つた。かの玄昉や道鏡の事件は、實に其の尤なるものである。併し、此の醜惡の限りを盡した僧徒と貪慾な藤原氏との權勢の爭奪は、こゝに時代を政教分離の曙に向つて押し進めたのである。光仁天皇に亞いで英明な桓武天皇が即位せられるに及び、舊來の政策は全く放棄せられ、政道一新の新國策が講ぜられた。隨つて佛教も、自から刷新せられねばならない機運に接した。



最澄は鄕里を立つて、帝都に遊學することゝなつた。都に出た彼は、堂塔伽藍の莊嚴なのに驚歎の叫を揚げた。更に、利權を取り圍んで渦を卷いてゐる僧徒の跳梁、跋扈と、其の陋劣極まる醜態とに啞然として一驚を喫した。帝都は佛教の大道場ではあるが、而も眞の道場ではない。精神のない形骸ばかりを飾り立てた虛僞の宗教の繁榮は、最澄の最も惡むところである。自ら先頭に立つて、一代の民衆を指導し、一世の道德を左右すべき僧綱、僧官の輩が、徒に紫衣を身に纏ひ、錦冠を誇らし氣に戴いて、三公、九卿等と其の外觀の美を競ひ、其の身の榮達を爭ふに至つては、佛教も亦衰へたりといふべきである。純眞な心を懷いて、眞の佛道に精進してゐた彼は、當時の佛教を觀て、大いに憤激するところがあつたであらう。

彼は凱然として、紅塵萬丈の裡にある七堂伽藍を棄てゝ、山紫に水明らかな比叡の奥の清淨境に入つた。時は延曆四年、春秋は正に十九。

彼は果して、當時の佛敎を改革しようとする一大決心を抱いて此の山に登つたのであらうか、或は又、獨り自ら潔い生活を送らうとして隱れたのであらうか。此の問に答へるものは、彼が叡山の草庵中でものした願文である。此の願文に徵するに、彼は獨り道を得て滿足する聲聞の徒ではないのである。上は菩提を求め、下は衆生を救はうとする菩薩行の人であることを知ることが出來る。隨つて、彼が好んで山に入つたのは、他日山を出でて、大いに道を野に說かうとする準備であつた。彼は山中に隱れて、徒に一時の苟安を偷んだのではない。彼の胸中には、堅くして然も深い決心があつたのである。彼は旣に舊都の六宗に大きな不滿を感じ、更に新しい眞の道を求めて、衆生を救濟しようと、密かに心に期してゐたのである。

彼は樹立の繁つた峽間に、さゝやかな草の庵を結んで、誦經三昧に日を送つた。斯くして、始めは法華經、金光明經、或は般若經等の經典を一心に讀み、佛陀、聖王の尊い道を尋ねた。それから華嚴の五敎章や起信論、或は天台の三大部（文句、玄義、止觀）等を繙いた。彼は斯くの如く諸の大乘經典を披いて、深遠な法味を味つて行くと、愈ゝ天台大師が慕はしくなつて來た。彼は大師を敬慕する餘り、其の尊い姿を幻の中に見ることが屢ゝであつた。天台大師は



唐朝の高僧で、法華經を深く究めて其の奧旨に徹し、上述の三大部の註釋を書いた偉人で、實に法華一乘の妙旨を永く後昆に知らしめた大宗師である。

延曆七年、二十二歳の時、彼は山中に倒れてゐる木を削つて、自ら一體の藥師佛を刻み

阿耨多良三藐三菩提の佛達
我が立つ杣に冥加あらせ給へ

と詠じて、これを恭しく草庵に安置し奉り、この庵をば比叡寺と名づけたといふことである。實に此の比叡寺こそは、爾後數百年間、平安朝時代の佛敎の覇權を握つた北嶺の第一堂、卽ち根本中堂の基礎となつたのである。最澄は其の後も尙ほ山に留まつて、佛學の研鑽を怠らなかつた。彼の名聲は漸次高まつて、大德、善知識の譽が益ゝ昂かつた。

延曆十三年九月、比叡山は未曾有の人出のために賑はつた。それは、此の山で初めて法會が修せられたからである。辱くも桓武天皇は、親しく龍駕を峻嶺に枉げさせ給ひ、群臣百僚の綺

羅美やかな行列は、谿間の紅葉と相映じて、其の盛觀は洵に前代未聞のことであつた。興福寺、藥師寺、元興寺、東大寺、法隆寺、大安寺等の高僧、知識悉く一堂に會し、梵唄の聲は綏やかに松柏の間を流れ、幢幡は翩翻として青嵐にひるがへつた。洵に曠古の一大盛觀であつた。最澄は此の時、名譽ある導師を勤め、諸大寺の高僧達も彼の下風に立たねばならなかつた。

彼は此の時、まだ二十八歳の青年であつた。彼は斯くして自らの地位を築き上げた。不斷の努力と眞摯な求道心とが彼をして遂に今日あらしめたのである。彼は既に自己の運命を開拓し、自ら動いて三諦圓融の妙諦を究め、桓武天皇と六宗の高僧達とを動かした。而して、叡岳は王城の鬼門に當るといふので、天皇はこゝに於て詔して、こゝを國家鎭護の大道場となし、天下の泰平と寶祚の萬歳とを祈らしめ給ふた。

天皇は斯く、優遇を彼に賜はつたのみならず、引き續いて益ゝ優渥な恩命を下し給ふた。越えて延曆十六年、彼を內供奉に補し、近江の國より朝廷に上る租稅を、一山の費用に充て給ふたのである。最澄は天恩の優渥なるに感泣し、顧みて、自己の志願が漸く其の歩を進めて來たことを喜んだであらう。併し、彼の事業は大にして、前途はまだ〳〵遠い。彼は小成に安んじ、



世俗の榮華を貪る凡庸ではなかつた。彼には、佛敎改革といふ大願が起されてゐるのである。

傳說に依れば、桓武天皇は諸宗に優れた一乘の妙法を興隆せんと覺す念が、御心の中で切に動いてゐたので、遂に內勅を最澄に下し給ふた。こゝに於て、彼は深く天台の奧儀を探り、聖慮に答へ奉らうと考へ、終に遠く異域に道を求めようと思ひ立つに至つた。そして延曆二十二年、空海等と共に萬里の波濤を凌ぎ、翌年漸く彼の土に着くことを得た。

一路直ちに天台山を志した彼は、幸にも道邃和尙の摩訶止觀の講筵に列する機會を得た。後又、行滿和尙の一心三觀の法筵にも列つた。燃えるやうな彼の求道の志は、遂に天台の妙趣を究めるに至り、尙ほ其の他、因明の學を修め、律や禪に就いても研鑽するところがあつた。

最澄は既に天台の奧義を究め、大乘律を修め、今や密敎の玄旨をも受け、こゝに多くの宗敎を打つて一丸となし、新機軸を出さうと考へた。そこで彼は、更に天台山の僧儵然から禪を承け、所謂日本天台の組織が愈ゝ其の緖に就くこととなつた。翌年五月、杜鵑血を吐いて雨に鳴く頃、明州を解纜して同年八月、海路恙なく長門に着くことが出來た。

遙々萬里の波濤を越えて、當時未だ詳にすることが出來なかつた天台一乘の妙法を傳へ來つ

た彼の威望は、隆々として遠く六宗の耆宿を抽んで、皇室の優遇はいふも更なり、到る處に其の幽玄な深理を說いて、一代の尊崇と渴仰とを一身に鍾めた。

嵯峨天皇の弘仁五年、朝廷からの御招きに依つて、諸宗の高僧等と殿上に對論し、翌年、南都に於て、再び法論をたゝかはせ、著々として、天台弘通の計畫と一乘妙法の宣揚とを實行した。彼の鋭鋒の向ふ所は、忽ち既成宗派の反抗を惹き起さずにはをかないやうになり、權實の爭論から戒律の問題に至つて、各宗よりは激烈な攻擊を加へて來た。彼は正々堂々として破邪顯正の大劍を執つて起ち、彼等を駁擊して殆ど完膚なきに至らしめた。

宮廷、權門に阿諛迎合する墮俗的佛教を排擊し、自ら靈峯に據つて、力を盡して大乘戒の確立を圖つた最澄も、遂に病床に臥する身となり、弘仁十三年、波瀾多き五十六年の生涯を閉ぢた。最澄が示寂した月、官符を以て大乘戒を許し、翌年、延曆寺の勅額をさへ賜はつた。こゝに於て、天台宗は全く獨立の一宗派となるに至つたのである。



# 弘法大師

煙波うち烟り、寄せては返す波の音もいと穩かな瀨戸內海に臨んだ多度津の濱は、我が大師の生れ故鄉である。讃岐の國造、佐伯直田公の二男眞魚は、幼い頃から何處となく、おつとりした、氣立の優しい而も非常に賢い子であつた。父母を始め一家の人々の限りない愛情は、子供達の中でも一入深く彼に注がれてゐた。彼の家庭こそは、洵に祝福された家庭であつた。和氣は靄々として、其の圓滿、幸福さは、觀る目も誠に羨ましい位であつた。彼の一族は悉く榮えてゐた。母の近親に、阿刀大足といふ人があつた。大足は當時有名な碩學で、夙に伊豫親王の學士となつてゐて、盛名一世に隱れない博學宏識の士であつた。彼眞魚は父母の懷に暖い夢を結びながら、何の苦もなく、煩悶もなく健かに成長した。彼は實に、生涯を通じて常に順境の人である。故に彼の人格は極めて圓滿、純潔で、いはゆる醇乎として醇なるものである。これをかの日蓮上人が、迫害の間に一生を送り、隨つてかの峻烈、勇猛なる人格を鍛へ上げたの

に比すれば、洵に好一對の對照といふべきである。空海の人格は、固より其の天稟の資質と後天の修養とに因るものではあるが、而も其の家庭の高風と圓滿とが、與つて大いに力となり、以て此の偉大なる人格を錬磨したのである。

十五歳の俊秀佐伯眞魚は、幼名心に燃え立つて、遙々海を渡つて王城の地京都を指して上つた。旅途恙なく阿刀大足の邸に着いた彼は、其の儘そこに寓して研學することとなつた。彼は日夜漢籍に親しみ、聖賢の道を聽いて修養に努める身となつた。阿刀大足は此の好學な少年を我が子の如く愛して、熱心に儒學を教授し、其の上、當時、善知識の譽高かつた大安寺の勤操僧都の法筵に列せしめて、佛陀の教へを聞かしめた。知識慾に飢えてゐた眞魚は、當時の信仰に從つて、師の僧都から虛空藏菩薩求聞持の法を受けた。この求聞持の法といふのは、虛空藏菩薩の眞言を一定の規法に從つて百萬遍唱ふれば、あらゆる教義、經文を誦んずることが出來るといはれてゐる妙法である。

彼は斯の如く、朝には先王、周公、孔子の道にいそしみ、夕には佛陀、正覺の法音に心耳を澄まし、孜々として努めて少しも倦むところがなかつた。だから、此の間に彼の學問は長足の



進歩をなしたのである。

明けて十八歳を迎へた春、彼は師阿刀氏の勸めに依つて、大學に學ぶこととなつた。當時、一大學は藤原氏の繁榮と共に榮え、幾多英俊の登龍門となつてゐた。彼は此の處に於て、直講味酒淨成に就いて、毛詩、尙書等を修め、岡田博士には左傳、春秋の講義を受け、經史を繙いて花の散り行くのも知らず、一心に勉學を怠らなつた。

彼が斯く學窓に研鑽の功を積んでゐる間に、時代は益ゝ多時になつて來た。彼が十五歳で鄕里を出た時は、絕代の風雲兒傑僧最澄が、始めて比叡山上に宗教革命の大旆を翻して、一心三觀の法皷を洛陽の風に轟かしてゐる時であつた。寄丹によし奈良の時代は、我が國史上最も濃厚な佛教文化の時代であつた。極言すれば、上は十善の君より下は賤しい仙人に至るまで、時代の人々は悉く狂信に身を委ねてゐたのである。國家のうちに又國家が建てられた。而も宗教的國家が、政治的國家にとつて代らんとする形勢さへ見えた。僧侶の擅權、横暴は其の極に達し、南都の大寺の威權は帝王のそれを凌がんとするに至り、放恣淫蕩な氣風は天下を風靡し、宗教界の墮落、腐敗は其の頂點に達してゐた。然るに、英主桓武天皇の遷都に依り、南都の六

宗はこゝに動搖を起し、宗教改革の氣運は澎湃として、北嶺から京畿を席捲し掃蕩せんとする形勢を示してゐた。

併し、社會的方面に於ても、或は知識的方面に於ても、佛教は深く當時の青年の心を捉へてゐた。彼等は佛教を以て彼等の理想として殆ど偶像的崇拜を捧げ、高僧は彼等の仰いで其の儀表とするところであつた。斯る時代思潮の雰圍氣のうちにあつて、英氣勃々たる眞魚が、出家の志を起し、儒門を脱しようとの考を抱くに至つたのも、洵に無理からぬことである。敢て富貴榮達といふ功利的な方面からばかりでなく、知識を求むること恰も渴者の水を想ふが如き青年時代の熱望は、彼を此の方面に驅り立てるに與つて大いに力あつたに違ひない。併し、彼のこの熱烈なる希望は、障碍に依つて其の進行を妨げられた。それは阿刀氏の反對であつた。眞魚の熱誠の籠つた言葉には、流石の大足も動かされないではなかつたが、併し、やすゝと青年の乞ひを容れることを躊躇した。大足は「佛教は忠孝の大道を無視する」といふ大きな道德上の批難を以て、青年の反省を促した。惑ひやすい青年の心は、恩師のこの一言に依つて、麻のやうに亂れた。當時の佛教は、寧樂朝時代の盛觀を經て、唯だ形骸の榮にのみ誇り、精神は既に枯渴し



て、名僧知識は時としてはないではないが、佛教の盛榮は財に飢え、名に渴した一種の野心ある卑陋の徒の乘ずるところとなつてゐた。故に道德は頽廢し、戒律は亂れ、あはれ清き佛陀の聖教も、今や恰も腐肉の如く、蛆蛾簇生して、臭氣鼻を衝くの醜狀を呈してゐた。阿刀氏が眞魚の切なる願ひを拒んだのも、此の邊の消息が大いに原因となつてゐることは、殆ど疑を容れる餘地はない。

眞理の光を幾多の雲霧の間を通して微かに認めた十九歳の青年眞魚は、沈思默考の後、遂に一大決心をなし、筆を呵して『三教指歸』一篇を作つた。それは寓言に托して儒、老、佛の三道の得失を論じ、三道調和の意見と出家の本願とを述べたものである。其の文は甚だ難解なもので、博引、旁證、筆端火を發するの慨がある。彼は儒、老、佛の一致を認め、出家の忠孝に背かざることを確め、こゝに釋然として悟りを開き、其の嚮ふところを知つたのである。

大學を去つた彼は、飄然として旅途に上り、江海を渡つて鄕里に歸つた。それより南海の各地を遍歷し、四方の深山幽溪を跋涉して、不平や煩悶の氣を掃はうとした。彼は阿波の大瀧嶽に攀ぢ、土州の室戸崎に勤念して英氣を養ひ、以て他日の用意を整へた。翌年、愈ゝ素志を遂げ

て、和泉の國槇尾山寺の勤操僧都の室に入り、落飾して沙彌式を受けた。彼は此の稀代の名僧を師として、三論の研究に心血を濺いだ。彼の學識は日々に進み、延曆十七年、二十五歳の時、阿波に赴いて大瀧寺の創立に與り、幾多の佛像を刻んだと傳へられてゐる。

彼は一方、大日經の探求に腐心すると共に、他方に於ては、靜に彫刻、繪畫等の藝術に心を澄ませてゐた。彼が書に於ても、繪に於ても、將た又、彫刻に於ても、曠世の靈腕を有するに至つたのは、この修養時代に其の根柢を築き上げたものであらう。十年の歳月は空しく逝つたが、ふと或機會から大和の久米寺に大日經の傳はつてゐることを聞いて同寺を訪れ、隈なく探し求めたが、更に見出すことが出來なかつた。そこで彼は、誠心を籠めて祈禱を凝らし、漸くにして東塔の大柱の下に於て、一部七卷を發見したと傳へられてゐる。時に年正に三十。

大日經を久米寺の塔下で得てからは、日夜熱誠を捧げて其の祕奥を究めようとしたが、誠に難解で透徹せぬところがあつたので、當時、支那に於ける密教の隆盛を聞いて、彼は遊心勃如として洵に禁ずることが出來なかつた。恰も遣唐使派遣の事があつたので、機逸すべからずとし、恩師勤操僧都の推擧に依りて、こゝに入唐求法の勅許を得て、道を萬里の外に求める好運に接した。



藤原葛野麿を大使とし、石川道益を副使とした遣唐使の一行は、留學生、學問僧を伴ふて、延曆二十二年四月、難波の浦を出帆した。この一行には文藝、宗教史上に忘れることの出來ない三人の俊才がゐた。卽ち、書道に於て著れた橘逸勢、日本天台の開祖最澄及び我が空海其人である。

途中幾度か暴風の襲ふところとなつたが、漸く唐土に到著することが出來た。斯くして彼は愈〻入唐の宿志を果した。而して當時、長安には密教が盛で、名僧知識もなか〳〵多かつたが、就中、慧果和尚の學德は全國にまで響いてゐた。こゝに於て、豫てより大日經に心を深く寄せてゐた彼は、青龍寺に赴いて、慧果和尚の門を叩いた。空海は和尚に就いて、眞言祕密の奥旨を探り、多年の疑問を解くことが出來た。和尚は空海の傑物であることを認め、蘊蓄を傾けてこの遠來の新弟子を導いた。當時、和尚の門下には俊才が雲の如くゐたが、空海の偉大なる人格と深邃なる學識とは、遠く彼等を踰え、嶄然として頭角をあらはしてゐた。

彼は又、繪畫、彫刻、書法、文章、詩律、音韻等の諸學をも、師を求めて修めたが、不幸にも一年有餘にして慧果の遷化にあつた。訪ふべき人は既に訪ひ、叩くべき門は既に叩いた。初め

彼は二十年の在唐を期してゐたが、今や歸つて先師の依囑を故國に施すべき時は來た。

歸朝後、彼は一年餘りして無事京師に著き、平城天皇に謁して密敎弘通の勅命を蒙り、槇尾山寺に住すべことを命ぜられた。時に大同二年、齡は漸く而立を過ぐる四歲であつた。十有餘年前の一沙彌は、今や一天萬乘の師と仰がれ、垢衣破笠の一學僧は今や、南都北嶺の碩德を集めて、佛陀の新法音を說くに至つた。空海の如きは、實に堅忍不拔の勉勵と不撓不屈の意志とを以て、自己の運命を切り拓いた偉人である。

嵯峨天皇の位に卽き給ふてより、皇室の優遇は益ゝ加はり、弘仁七年勅許を得て、紀北、幽邃の境、高野の山に金剛峯寺を創建して、密敎の根據をこゝに据ゑた。この高野山の經營に關して、逸すべからざる傳說がある。それは我が文化史上最も重要な問題の一である伊呂波歌の創作で、涅槃經の四句の偈文、卽ち『諸行無常、是生滅法、生滅生已、寂滅爲樂』を俗謠風に作つて、工作に從事した木匠達に歌はせたことである。

當時、南都北嶺の爭論は愈ゝ激しく、敎界は鼎の沸くが如き狀態であつた。彼は此の問題の渦中に投ずることを好まなかつた。そこで京洛の紛爭を避けて、名山大澤に遊び、弘く敎化を



邊土の民衆に下さうと考へてゐたので、彼は眞濟、幹海の二人を從へ、飄然として四方巡錫の旅に上つた。彼は斯くして諸國を遍歷してゐる間に、農民の便を計つて池、沼等を開鑿したり、或は其の他民利を興した事が頗る多く、又、一視同仁の慈愛から平民の子弟を敎育して、天下の高材を養はんとして綜藝種智院を設けるなど、社會事業に盡悴したところが甚だ多かつた。

彼は又、崇佛と敬神とは相反するものではないといふ、所謂本地垂迹の說をも立てた。

天長七年、朝廷より各宗に勅して其の宗要を上らしめられた時、彼は『十住心論』十卷を著して一代の佛敎に批判を加へ、密敎を以て其の極致であると宣言した。更に其の要を提げて『祕藏寶鑰』三卷を撰んで闕下に捧呈した。

承和二年三月二十一日、三寶鳥の聲幽かに寂莫を破つて胸に泌む時、彼は六十二歲を以つて生死を超脫した定(じやう)に入つたのである。

# 菅原道眞

道眞が、明けて十一歳の新春を迎へた時のことであつた。父の是善は、其の學才を試さうと思つてか、傅役の島田忠臣といふ人に命じて、道眞に題を課して、詩を作らせたことがあつた。其の題といふのは、『月夜に梅花を見る』といふのであつた。道眞は立ち所に五言絶句一首を賦した。其の詩といふのは、

月耀如二晴雪一。梅花似二昭星一。
可レ憐金鏡轉。庭上玉房馨。

着想といひ、措辭といひ、とても、十一や十二の少年の作とは思へない程、立派なものである。是善の喜悅は、何物にも譬へ難いほどであつた。



「蘭は其の芽生から香氣の高いものであり、梅檀は二葉より芳ばしいと聞いてゐる。此の子は將來、必ずや文學を以て名を成し、我が家の名聲を揚げるであらう。」

と彼の父は誇らかに他人に語つたといふことである。

このやうに、神童だとか、天才だとかいつて、早くからもてはやされると、如何なる者も自然、驕慢な心を懷くようになり易いものであるから、父はこれを案じて、如何にもして立派な人物に大成させようと、日夜心を碎くのであつた。それで、一方では、島田忠臣を我が家に留めて嚴格な家庭教育を施し、他方では、當時の碩學者で、而も一代の文豪として、文名嘖々たる都良香に就いて學ばせた。

元來、菅原氏は代々、學問を以て朝廷に仕へてゐたのであつた。祖先は遠く野見宿禰から出てゐて、聖武天皇の御代、其の十四世の孫にあたる古人といふ人が、始めて菅原の姓を稱し、梅鉢を家の紋所と定めた。

古人は學才拔群の秀才であつたので、若くして文章博士に擧げられ、大學頭に任ぜられて、長く文敎の府を司つて居た。

古人の子清公も亦、親に讓らぬ英才であつた。彼は青年時代唐に留學して、其の學問、制度等を究めて歸朝し、父の職を繼いで家名を墜さなかつた。

其の子是善は又、父祖に劣らぬ頴才達識の人であつた。彼は文學を以て、文德、淸和、陽成の三朝に歷仕し、累進して從三位參議刑部卿となり、勘解由長官の要職をも兼ねてゐた。これは實に、儒者出身としては、當時誠に異數の昇進であつたのである。其の著書中、『貞觀格式』、『文德實錄』は殊に著れてゐる。道眞は實に是善の嫡男で、早くから文學に親んだことは、殆ど疑のないことである。是善が十一歲の幼齡で、嵯峨天皇の御前に於て詩を賦したと傳へられてゐる如く、道眞も亦、父と同年に始めて詩を作つて人々を驚歎せしめたことは、洵に奇遇といふべきである。

道眞が十五歲の時、文德天皇崩御あらせられ、世は諒闇の悲しみに蔽ひ包まれてゐたから、彼の加冠の儀式も自然、翌年に延期されたのであつた。元服の式に臨んで、母君は愛し子の行末を祝福し、且つ我家の名を揚げるようにと、



**久方の月の桂も折るばかり**
**家の風をば吹かせてしがな**

**の一首を詠んで贈つた。**

彼は幼名を阿呼と呼ばれてゐたのであるが、こゝで父は名を選んで、道眞と命名した。道眞の名は、彼の一生の性格を洵によく現はしてゐる。卽ち眞理の大道を歩んで些も憚らず、直情徑行の天才的手腕の發揮をよく暗示してゐるのである。

貞觀四年の春、十八歲の時、對策に應じ、拔群の成績で及第した彼は、文章生に補せられた。これが卽ち、彼が試問を受けて、其の學才を切磋琢磨された始めであつた。

此の頃から、父の命に依つて、五條の山陰亭に寄宿することとなつた。こゝは菅原氏に屬してゐる學生の寮のやうなものに、圖書館を兼ねたものであつた。菅原氏は代々、文學を以て朝廷に仕へてゐたから、この寮からは、年々進士を出すことが多く、其の時は旣に累計百人に垂んとしてゐたから、世人はこれを呼んで龍門といつてゐたといふことである。

貞觀九年大學寮を卒へた彼は、文章得業生となり、下野權少椽に任ぜられた。此の時、彼はまた二十三歳の青年に過ぎなかつた。これから三年を經て、式部省の對策に應試し、優等を以て登第した。彼の成績が餘りに素晴らしいので、問頭博士（試驗委員長）の都良香も、舌を捲いたといはれてゐる。

翌年、玄蕃助に任ぜられ、又少內記となつた。

氣霽風梳二新柳髮一。
氷消浪洗二奮苔鬚一。

恩師都良香が、鬼神の靈感に依つて、有名な此の詩句を作つたことを、道眞は直覺的に感じて、痛切な批評をしたといふ傳說があることだけでも、如何に彼の學才が非凡であつたかは、よく想像し得るのである。

貞觀十四年、存問渤海客使を命ぜられ、渤海國人と接觸して見聞を廣め、得るところが少く



なかつた。處が此の年、彼は不幸にも母の死にあひ、喪に服するため、一時官途を退かねばならないこととなつた。併し、間もなく再び擧げられて數職に轉じ、其の後、式部少輔に補せられ、遂に文章博士を兼ねることを命ぜられた。此の時、彼はまだ而立を過ぐること僅かに三歳であつた。實に菅原家は四代相繼いで文章博士となつたのである。一門の榮譽これに過ぎるものはない。賀客は門前に市を爲した。併し、獨り父是善は悅ばないで、却て驚いてゐるやうな風が見えるのであつた。父が驚いたのは、來賀の訪問客が多いからではなかつた。道眞が一人子で、兄弟などのやうに、眞にたよりとする者がなく、若し、一朝人望を失ふやうな場合に遭遇すれば、必ずや他から嫉妬、猜疑を免れ得ないであらうといふことを慮つたからである。そこで父は、懇に戒めていふやう、

「博士の官は決して賤しいものではないし、又、博士の俸祿は必ずしも輕い譯でもない。父は既に、久しく此の職を拜してゐるから、よくこれを知つてゐる。只管愼んで、人情を畏れなくてはいけない。」と。

父の是善は性格的に弱い人で、妥協性に富んでゐたから、比較的安穩な生涯を終へた。併し、

道眞は當時、少壯氣鋭、必ずしも自ら謙虛抑制しなかつた。功名心に燃え立つた壯年の胸裡には、鬱勃たる覇氣が充ち溢れてゐた。

彼が三十八歳の時、始めて大學寮で諸生を教授することとなり、まだ數日も經ちないうちに、意外にも彼を中傷し、誹謗する聲が四方から起り、彼の教授を妨害しようとする者が出て來た。これは正しく學才が乏しいため失脚した輩の所爲であつたであらう。もう斯うなつては如何ともせんすべもない。彼は此の時始めて、父の訓誡の有難さを痛切に感じたのであつた。彼は甚だ不愉快な日を送らねばならなかつたので、『博士難』といふ古詩一篇を作つて、自ら纔かに慰めてゐた。

父の死後、彼は全く四面楚歌のうちに陷つてしまつた。閥族の横暴は、容赦なく秀才の身に迫つて來るのであつた。

元慶七年、渤海の使節の饗應を命ぜられた彼は、師島田忠臣及び門弟の紀長谷雄等と共に、外賓の接待に努めた。鴻臚館に於て其の送別の席上、彼は醉中自ら衣を脱いで大使裴頲に贈り、且つ一篇の詩を餞とした。



吳花越鳥織初成。　本自同衣堂淺情。
座客皆爲二君後進一。　任將領袖屬　裴生一。

裴頲は頗る道眞の才學に敬服し、其の詩を以て、白樂天の體を得てゐるとさへ激稱した。

今や彼の詩は、唐の詩宗白居易のそれと比せられるに至つた。天下擧つて彼の風を翹望し、讃歎の聲を放つと同時に、極端にまで彼を嘲罵する者が現れた。それは、彼の詩は技巧よりも寧ろ外客に阿諛したものだといつて擯斥し、延いては國辱であるとまで呼ぶに至り、彼の人格を非難、攻擊したのである。さらでだに、彼は四方に對して不滿を懷いてゐたので、悶々の情やるかたなく、終に『詩情怨』といふ長篇を書いて、窃かに其の誹る者を嘲笑してゐた。

仁和二年、讃岐守の閑職に左遷せられた。併し親しく任地に下つて、土地の風俗等を視ることになつたのは、濟世の術を實地に應用する機會を彼に與へたもので、後年、廟堂に立つて活躍する素地を築く便宜を得たことは、定めし少くなかつたであらう。

此の時恰も、所謂阿衡事件が起つて、攝政藤原基經の專横は其の極に達してゐた。道眞は憤激の餘り、任國から書を基經に送つて、其の反省を促した。道眞の條理ある强硬な忠告には、流石のタイラントも、理義の前には如何ともすることが出來ず、阿衡の紛議は斯くして、彼の力に依つて纔かに解決せられたのである。當時、左大臣源融は、宇多天皇の外叔父にあたる尊貴な身分であつたにも拘らず、これを調停することが出來なかつたのに、一介の儒士道眞は、斯くの如き大手腕を示したのを、天皇は大いに賴もしく感ぜられたのであらう。これが卽ち後年道眞を拔擢して、深厚な御信任を寄せ給ふた所以である。

任期滿ちて京師に歸つた翌年、横暴を極めたかの基經が薨じた。彼のために窘しめられた天皇は、こゝに於て藤原氏を抑壓しようと企て給ひ、道眞を擢んでて藏人頭に任じ給ふた。彼が此の恩命に接したのは、實に前例のない異常なことであつて、天下の人は擧つて目を睜つた。次いで官位を頻りに進められた彼は、聖恩の渥きに感泣し、一層政務に勵精して、夙夜忠勤を怠らなかつた。彼は大化の改新以來、唐風摸倣の弊害の甚だしいのを慨いて、遣唐使の廢止を建議し、又、稅制を論じて、立國の大策を樹てて輿論を動かすに至つた。



醍醐天皇の卽位し給ふや、宇多法皇は道眞を以て右大臣の重職に任じ、大政に參與せしめ給ふた。古來、儒者で大臣に上つた者は、吉備眞備以外、唯だ獨り道眞あるのみである。廷臣の嫉妬は愈〻激しくなつた。彼は再三上表して辭職を乞ふたが、如何しても聽されなかつた。基經の子時平は左大臣ではあつたが、道眞は年も長け、學德共に勝れ、且つ政務にも精しく、隨つて御信任も厚かつたから、政治上の實權は自から道眞の手に歸した。時平等はこれを挽回するには、後宮政策に依る外はないと考へ、凡ゆる陰險な手段、奸策を運らして天皇に讒した。そのため道眞は俄に官職を停められ、太宰權帥に貶謫せられた。法皇はこれを救はうと努められたが、藤原氏の妨害に依つて果し給ふことが出來なかつた。斯くて道眞は筑紫に居ること三年、五十九歲を以て薨去せられた。

やがて、無實の罪であつたことが明らかになり、正一位太政大臣を贈られ、天滿天神として祀られるに至つた。

道眞は左遷せられて悲しみに堪へず、西下するに臨み、日頃愛してゐた庭の梅を見て、

東風ふかば香おこせよ梅の花
あるじなしとて春な忘れそ

と詠じたことや、九月十日の夜、恩賜の御衣を捧持して、そゞろに天恩の涯なきに感泣した話は、讀者のよく知悉してゐるところである。

道眞は太宰府にあつて、怨もせず憤りもせず、常に行を愼んで、門外へは一歩も出でず、一室にのみ日を送つてゐた。或月の明るい夜、

海ならずたゞよふ水の底までも
清き心は月ぞ照らさん

と己が眞心を歌つた。



# 清少納言

少納言は清原元輔の一人娘であつた。清原家の祖先は、『日本書紀』の撰者舍人親王から出てゐる。親王の四世の孫通雄の時に至つて、始めて清原の姓を賜はつたのである。通雄の再從兄弟に夏野といふ人があつた。學識才藝一世に傑出した人で、官は左大臣にまで進んだ。彼は參議南淵弘貞、文章博士菅原清公等と熟議討論して、『令義解』十卷を著はした程の大學者であつた。通雄の孫の房則は夏野の養子となつた。房則の次男深養父は卽ち少納言の曾祖父であるが、古今集時代に於て名を知られた歌人で、彼の詠じた

夏の夜はまだよひながらあけぬるを
雲のいづこに月やどるらん

の一首は、最も人口に膾炙してゐる。

少納言の父元輔は從五位下肥後守で、大した役人ではなかつたが、村上天皇の天曆年中、昭陽舍(一に梨壺)に創設された御歌所に出仕して、萬葉集の研究に從事し、傍ら『後撰集』を勅命に依て撰進した所謂梨壺の五歌仙の重立つた一人であつた。

少納言はいつ生れて、いかなる教育を受けたか分らないが、かうした血をうけた家庭に成長したのである。

彼女の筆になる『枕草紙』は、紫式部の作つた源氏物語と共に、王朝文學の双璧であるばかりでなく、古今を通じて隨筆文學の最大傑作であることは疑ふべくもない。一篇もとより零細な小品文の集合とて、勿論、何等の纒つた大思想も大信念もあるとは見えぬが、當代の俤が髣髴として偲ばれる中に、作者の性格が一層鮮かに描き出されてゐる。

『枕草紙』がどういふ動機で書かれたかは、この草紙の末段に、少納言自身で記した跋のやうな一文章が之を物語つてゐる。

或時、內大臣伊周から中宮定子に草紙を奉つた。中宮が「これに何か書かまし」と仰せにな



つたのを、少納言が「枕にこそし侍らめ」と申したので、「さば得よ」とて、中宮からその草紙を賜はつたのである。かくて少納言は「目に見え心に思ふ事を、人やは見んとすると思ひて、つれ〴〵なる里居のほど」に書きあつめたのである。枕草紙といふ名も、この末段の文によつたものと見えるが、それは後人がつけたもので、もとは定まつた名もなかつた。古書には「清少納言記」とも、又、單に「清少納言」とも標記したのもある。

少納言が初めて宮中に召出されて、中宮定子に仕へたのはいつの頃であつたか、これも正確には分らない。恐らくは、正曆三年から五年までの間であつたらうとの考證家の說であるから、彼女が三十歲前後の年頃であつたらしい。

かくて兎に角、少納言は當時の人々の憧憬の的となつてゐた宮仕へをすることとなつた。その非凡な才華と機敏さとは、程なく彼女をして、宮中一の流行つ兒とならしめた。上は一條天皇中宮を始め奉り、下は六位の藏人に至るまで、朝夕禁裡に出入する程の者は、皆その機智を愛し、その才藝を稱へたが、わけても少納言が深く交際を結んだ人々は、當時世に四納言と稱せられた源俊賢、藤原公任、同行成、同齊信等であつた。花晨月夕機さへあれば、彼等はその才

華をたゝかはした。而して、少納言の應答は、圓轉滑脫、常に相手を感歎、敬服せしめずには措かなかつた。

或日のことである。夕闇が靜に淸凉殿の上に垂れこめてゐる。臺盤所（御料理場）のあたりで藏人達がガヤ〳〵忙しさうに立ち動いてゐるのは、陪膳仰せつけられた人達が、御膳部を下げさせるために呼んでゐるからであらう。程なく、主上は上の御局へ入らせられた。麗はしく、滿面に微笑を湛へさせ給ふて、靜に仰せられた。

「御硯の墨を磨れ。」

仰せのまゝに墨は磨るものの、主上の御立派な御樣子に、墨磨る手許も夢中である。唯だ一途に主上の御姿ばかりに見とれて、今まではこんな美しい方は外にはないと思つて、遠くから大納言の伊周卿（中宮定子の兄）に注いでゐた目も、うつかりすると見放してしまふやうである。

主上は白い色紙を一同に下し賜ふて、

「これに、そなた達が今記憶してゐる古歌を一首づつ書いて見なさい。」

と仰せ給ふた。



私は、御簾の外に居ずまゐを正してゐられる大納言樣に

「これは如何致しませう。」

と御尋ねすると、大納言樣は

「ともかくも書いてお上げなさい。こんな場合には、男は助言すべき筋合のものでもありませんからね。」

といはれて見ると、さあどうも困つたことになつた。一番たよりにしてゐた人に突放されてしまつた。御硯に筆はつけたものの、なか〳〵いゝ歌や文句も浮びさうにもない。顏はほてり、心臟の鼓動は愈〻昂まつて、殆ど無我夢中である。

「さあ〳〵、難波津（難波津にさくや此花冬ごもり、今を春べと咲くやこの花）でも何でも、ふと記憶してゐることをお書きなさい。別に思案などせずに」

と大納言樣がお責めなさる。どうしてそんなに氣おくれしたのか、女官達一同皆耳朶まで赤くして、とつおいつ思ひみだれてゐる。

身分の高い一人の女官が、春の歌や、花の心を詠んだ歌などを二三首書いて、

「これにお書き下さい。」

と廻して來たので、せつぱつまつて

年ふればよはひは老いぬしかはあれど
君をし見れば物おもひもなし

と書いてさし上げた。下の句の初の「君をし見れば」といふのは、もと「花をし見れば」といふのを即席に作り直したのである。

此の歌は、昔染殿の后のお前で、皇后の御父君藤原良房公が詠まれたのである。

主上は御覧なされて

「たゞこの心意氣が知りたかつたぞよ。」

と仰せられて、天機殊の外麗はしく嘉納あらせられた。（枕草紙第二十段）

又或夜のこと、庚申待（昔は庚申の夜に寢ると、三尸といふ惡い蟲が、人の體内に入つて害をなすと



いひ傳へて、この夜は寢ないで夜を明かす風習があつた。）をなさるといふので、内大臣の伊周公が色々大層其の用意をしてゐられた。

夜も漸く更けて來た時分に、題を出して女官達に歌を詠ませなさると、皆よい歌を詠んで御感に預らうと、色めき立つて懸命になつて歌を絞り出してゐた。妾一人は中宮様のお側近くに祗候して、四方山の話ばかりして一向歌の方の仲間へ加はらうとはせずにゐた。伊周公は

「どうして少納言は歌を詠まないで一人だけ離れてゐるんだ。題を選んで詠んだら如何です？」

とヂロ〳〵眺めながら仰しやる。

「妾、實は中宮様から或るお許しを承りまして、歌は一切詠まないやうになつてゐるので御座いますから、詠まうなどとは全く思ひもかけませんのです。」

「をかしな事をいふね。本當にそんなことが御座いますか。なんでそんなことをお許しなさるんです？　そんなことといつたつて駄目ですよ。まあ、外の時はいざ知らず、今宵はお詠みなさい。あなたがお詠みにならないと一座が白けていけませんよ。」

何だ彼だと色々責めなさるけれど、きつぱりとお斷りしてゐますのに、他の人達が歌を詠み

出して、そのよしあしの批評をしてゐるうちに、中宮様からちよいとした御文を書いて下された。あけて見ますと、

もとすけが後といはるゝきみしもや
こよひのうたにはづれてはをる

とあるのを見るにつけ、面白くなつて來て、たうとう大笑ひをしましたから、

「おい、如何したんだ、何事だ。」

と内大臣殿も仰せられる。

その人の後といはれぬ身なりせば
こよひのうたはまづぞよままし



「妾が名家の後を辱かしめるのを虞れず、愼しまなくてもよいもので御座いましたら、百首でも千首でも、立ち所にお詠みいたしませう。」

と中宮様へ申上げた。（枕草紙第八十三段）

斯く明后と才媛とが相遇ふことは珍らしく、誠に千載の一遇ともいふべきで、君臣の交は水魚の如く、君寵は益ゝ加はつた。だから、中の關白派の勢が衰へて、伊周等が失脚してからも、彼女は轗軻落魄の間に苦しみながらも、確く貞節を持して二君に仕へなかつた。

『枕草紙』を通して少納言を見る人は、彼女は輕薄で高慢であるとか、才學だてをするとか、虚榮心が强いとか、衒氣に充ち滿ちてゐるとかいつて、よく非難の聲を放つ。いかにも興に乘じて書きなぐつた所や、有髯男子を手玉にとつて飜弄する所などは、一面傍若無人の毀を招くやうな點がないでもない。かの「香爐峯の雪は」と問はれて簾を捲き上げたことや、「蘭省花時錦帳下」といふ詩句の末を尋ねられて「草の庵を誰か訪ねん」と歌にして答へた如きは、いかにも彼女が觸れると同時に煥發する才氣を有してゐた事を知ることが出來ると共に、寧ろこの才氣の羨むべく、愛すべきものであつたことが偲ばれるではないか。

# 紫　式　部

釣殿の下の薄暗い水面にも陽炎がチラ〳〵して、緋鯉、眞鯉の鰭振る樣もまことにのびやかである。麗かな春の日ざしが、對の屋の廂を越して母屋にまで這ひ込んで、氣だるさが室内を立ちこめてゐる。當家の嫡男式部丞惟規は、先刻から讀み倦きたと見えて、微かな鼾を立てゝうと〳〵居眠りの體である。寢殿の障子の開いた音を聞きつけた紫は、兄の直衣の袖を二三度しやくつた。惟規のふやけたやうな顏を見た父爲時は、何だか胸が押しつけられるやうに感ぜられてならなかつた。

「惟規、汲黯列傳は覺えたであらうな。」

「父上、いま暫くお待ち下され。麿はきつと諳んじてお目にかけますから。」

と、惟規は面目なささうにさし俯いた。爲時の顏には一時險しい色が漂つたが、直ぐいつもの穩かさに變つてゐた。彼は物覺えの惡い惟規に對して、決して無理を強ひる氣は起らなかつた。



何だか自分自身が責められるやうな氣がしてならなかつた。長男として一家の寵愛は殆ど惟規一人に注がれ、爲時自身も、親としての愛を初めて惟規に感じただけに、思はずも甘やかし過ぎてゐたのであつた。

「お父う樣、お兄い樣は今お身體がお惡いんですから、今度だけは勘忍して上げて下さいね。お兄い樣、お兄い樣は此の次にはきつと覺えて下さるわね。あたし今日お兄い樣のお代りしてもよくつて？」

と六歳にしては、餘程ませた口調で、紫は父と兄とを等分に見ながら微笑んだ。

「覺えてゐる？　史記といふ本はむづかしいんだよ。お前みたいな子供が、如何して覺えられるものか。ハツハ、、、」

と惟規はたうとう高笑をしてしまつた。爲時も思はず釣り込まれて

「嘘だらう。え、。ちうでいへるつて本當かい？」

と、紫の點頭くのを見て些か呆れ氣味でいつた。

「汲黯字は長孺、濮陽の人なり。其先は古の衞君に寵あり云々。」

音吐朗々として諳誦する紫の顔を見詰めてゐた二人は、唯だ茫然として驚くばかりであつた。彼女は兄の音讀するのを傍で聞いてゐて、たつた一回で完全に記憶してしまつたのである。爲時夫妻は、紫が男に生れなかつたのが殘念でならなかつた。（紫式部日記に據る）

爲時は閑院左大臣冬嗣公の六世の孫であつた。家は代々歌道を以て著れ、伯父爲賴は勅撰に入つた名譽をさへ有してゐた。爲時はどちらかといへば、寧ろ詩人肌の人で、御堂關白道長とは詩友であつた。式部が後年中宮彰子に仕へるやうになつたのは、かの才女淸少納言が老歌仙元輔の交遊の一人に召出されて、中の關白派の椒房に奉仕したのと同一轍である。

紫女が學んだ學課は和、漢、梵に渉り、彼女は天資聰明で、博覽、强記であつたことは、幼時の逸話に於てよく知られる。

爲時が越前守を拜命して越路に下つた時、式部も父に伴はれて任地に赴いたらしい。家集に、

近江の湖水にて三尾が崎といふ所に網をひくを見て、

三尾の海に網ひく民の隙もなく



たちゐにつけて都こひしも

磯の濱に鶴の聲々に鳴くを、

磯がくれ同じ心に鶴ぞなく

ながら思ひ出づる人は誰ぞも

などあるは、その時旅路での詠歌であらう。

湖にて伊吹山の雪いと白く見ゆる。

名に高き越の白山ゆきなれて

伊吹の嶽を何とこそ見ね

とあるのは、歸り路の歌と思はれる。かく彼女が都塵を避けて田園の生活に親しんだことは、それがたとへ暫くであつたにしても、情味豐かな詩材を彼女に與へたであらう。

式部は縁あつて藤原宣孝に嫁いた。宣孝も亦、平安朝時代の紳縉として恥かしからぬ才學があつて、よくその妻を愛したであらう。又、内氣で貞節で謙讓な彼女は、よくその夫に仕へて、花晨月夜の樂みは如何ばかりであつたらう。長卿文若も羨むばかりのスイートな家庭が式部のそれで、此の點で、獨身のデカダンらしかつた清少納言のえ知らぬ情趣であらう。幾もなく、賢子といふ愛の結晶が生れた。大貳の三位といつて、『狹衣物語』を書いたのは、實に此の娘である。後又、一女を擧げた。辨局といふのはこれである。「あはれ白玉も黄金も玉も何せんに、子に增す寶あらめやも」と萬葉の詩人も詠んだ通りである。一家は和氣靄々として、至上最高の和樂を集めたやうであつたらうと思ふ。げに宣孝の一家は祝福に充ち滿ちてゐたのである。

嗚呼、天無情、盈つれば缺くる世の習ひとはいへ、最愛の良人宣孝は所謂才子多病の諺にもれず、遂に愛妻を殘して不歸の客となつてしまつた。一家は幸福の頂點より、絶望のどん底に投げ込まれた。家集に

見し人の烟となりし夕より
名もむつましき鹽釜の浦

とあるのは、蓋し彼女が當時の遺瀨ない悲痛を歌つた血涙である。併し、この切ない苦い現實は、遂に彼女をして國文學史上不朽の傑作『源氏物語』五十四帖の大篇を著作せしむるに至つたのである。

『源氏物語』には、種々雜多な人生の觀照と、情趣豐かな自然の姿とが如實に描き出されてゐる。夫の死は彼女に執筆の餘暇を與へ、反省の時間を供した。『源氏物語』はかくして世に公けにせられたのである。

式部が夫に死に別れてから、その才名を聞いて、心を寄せた好き者も少くはなかつた。或夜、門を叩きわづらつた男が、その翌朝

世にともに荒き風吹く西の海も
磯邊に波はよせずとやみむ

と恨んだ返しに、

返りては思ひしりぬや岩角に
浮きてよりける岸のあだ浪

といつてやつた。彼女の貞節は、冬枯の野に常盤の緑なす松のやうなものである。

我が國文の誇りなる『源氏物語』は、長保三年四月宣孝の卒去してから、寛弘三年十二月彼女が見出されて始めて參內し、上東門院に仕へるに至つた五年有餘の閑日月の間に其の大部分が成つたものであらうと傳へられてゐる。中宮定子の崩後は、道長の女彰子の獨舞臺となり、政權は全く御堂關白の手に歸して、中の關白派の勢力は地に墜ちてしまつた。併し道長はなほ安んぜないものがある。それは、中の關白派の清少納言に匹敵する才學秀いでた女性のないことである。後宮の和樂を增し、中宮を輔佐する才女を得るためには、御堂關白道長は如何なる犧牲を拂つても悔いないとさへ感ずるに至つた。時しもあれ、紫式部の處女作は夙に人口に膾炙



し、才媛の令名は嘖々として天下に高かつた。元來、式部の父爲時と道長とは詩友であつたから、彼女は懇望もだし難く、遂に出でて中宮に仕へることとなつたのである。

彼女は晩年に至るまで安穩な宮廷生活を送ることが出來て、時の帝の御覺えもめでたく、皇后の御信任はまことに深かつたのである。

されど、よそなりし御心惑のやうに、あながちなることはなきも、いかなることにかと見えたり。女（六條御息所）は、いと物をあまりなるまで思ししめたる御心ざまにて、齡のほども似げなく、人の漏り聞かむに、いとどかくつらき御よがれのねざめ〳〵思ししほるゝこと、いとさま〴〵なり。霧のいと深き朝、いたくそゝのかされ給ひて、ねぶたげなる氣色に、うち歎きつゝ出で給ふを、中將のおもと（六條御息所に仕へてゐる女房、おもとは婦人の敬稱）、御格子一間あけて、見奉り送り給へとおほしく、御几帳引きやりたれば、御髮もたげて見出し給へり。前栽のいろ〳〵亂れたるを、過ぎがてにやすらひ給へるさま、ゆにたぐひなし。廊のかたへおはするに、中將の君も御供に參る。紫苑色（表は蘇芳で裏は萌黃の色）の折にあひたる羅の裳、あざやかに引きゆひたる腰つき、たをやかになまめきたり。見かへり給ひて、隅の

間の勾欄に暫し引きする給へり。打ち解けたらぬもてなし、髪の下端（さがりは）、めざましくもと見給ふ

（源氏）「咲く花にうつるてふ名はつゝめども
　　折らで過ぎうきけさのあさがほ
いかゞすべき」とて、手をとらへ給へれば、いと馴れて、疾く、

（中將）「朝霧のはれまもまたぬけしきにて
　　花にこゝろをとめぬとぞ見る

とおほやけごとにて聞えなす。をかしげなる侍童（こざらわらは）（源氏の君の手許で使つてゐられる童子）の姿このましうことさらめきたる指貫の裾露けゞに、花のなかにまじりて、朝顏折りて參るほどなど、繪に書かまほしげなり。おほかたにうち見奉る人だに、心しめ奉らぬはなし。物*の情知らぬ山賤（やまがつ）も、花の影にはなほやすらはまほしきにや。この御光を見奉るあたりはほどほ



どにつけて、わがかなしと思ふむすめを、仕う奉らせばやと願ひ、若しは口惜しからずと思ふ妹などもたる人は、賤しきにても、なほこの御あたりに侍（はべ）はせむと思ひよらぬはなかりけり。ましてさりぬべきついでの御言の葉も、なつかしき御氣色を見奉る人の、少しものの心を思ひ知るは、いかゞはおろそかに思ひ聞えむ。旦暮（あけくれ）うち解けてしもおはせぬを、心もとなきことに思ふべかンめり。（源氏物語夕顏の卷の一節）

＊古今和歌集の序に紀貫之が、「大伴の黒主はその樣いやし、薪をおへる山人の花の蔭に休めるがごとし」といふ意か。

此の一節は、物語の主人公、光源氏の君（桐壺の帝の御子）が十六歳の時、六條御息所の許へ繁繁お通ひになつてゐた當時の出來事である。或時中宿（なかやど）にと家臣惟光の宅へ立ち寄られると、隣家の垣根に青々とした夕顏の蔓が心地よげにはひかゝつて、白い花がにこやかに咲き匂ふてゐるのをふと御覽になつた。源氏は「くちをしの花の契や。一房折りて參れ」とのたまはれたので、隨身が命を畏んで門を潜り、一枝折つて上つた。これが緣となつて、其の家の女が

心あてにそれかとぞ見る白露の
ひかりそへたる花の夕顔

と扇に書いて差上げるやうになり、源氏も亦御畳紙に

よりてこそそれかとも見めたそがれの
ほの〳〵見つるゆふがほの花

と書いて御返歌なされた。それから事件は發展して、源氏の君と夕顔とが深い交情を結ばれることとなつた。だから自然と、六條御息所(當時二十四歳)の許を訪問なさることが少くなつたので、御息所の嫉妬は愈〻募つて來、たまにお出でましになると、うらみつらみが一時に發して來る。年若い源氏の君も例の道には並々ならぬ苦心をされる。その續きが即ち此の拔萃した一節で、其の後源氏の君と夕顔との戀愛が遂に悲しい結末を見るに至るのである。



國文學史上、此の大作『源氏物語』の評論に就いては、古來種々の說がある。本居宣長翁は其の著『玉の小櫛』に於て「物のあはれ」を主としたものであると主張してゐる。尙ほ其の他にも諸說があるが、最も廣く行はれてゐるのは、やはりこの鈴廼屋大人の說である。そして近頃この物語が英譯され、海外に於て非常なセンセエションを惹き起してゐる。

# 親鸞聖人

平安朝時代の貴族文化が愈〻爛熟しきつて、廢頽的な氣風が京洛の隅々にまで充ち滿ちてゐた。藤原氏の傳統的な誇りも、實力の前には無殘にも踏み躙られてしまつた。新興の武士階級の擡頭は、粉黛に粧を凝らし、淫慾のまに〳〵に爛れきつた享樂的の生活を送り迎へてゐた平安公卿にとつては、正に青天の霹靂であつた。

この沈滯腐敗せる空氣を一掃して、根本的に一大刷新を施すべき新勢力の先驅として起つたものは卽ち平家であつた。平家は鎌倉幕府創建の魁として、その過渡期の役目を引き受けたのであつた。彼等は藤氏の轍に倣つて權勢に憧憬れ、古い因襲の下に敢えなくも頽づいて、優婉にしてしかも悲壯な末路を遂げてしまつた。

政界の事情は以上の如く、宗教界に於ても亦、不世出の偉人が出現しなければ、此の爛れたまるで腫物の破れたやうな精神界の覺醒は到底望み得べくもない。



眞言、天台の兩密教は往年の清新、潑溂さを失ひ、殊に叡岳の僧徒の如きは、戈器を帶して宮門に嗷訴する等、其の腐敗、墮落は極度に達してゐた。この重大な時機に現れて、教界革新の導火線を點じたのが、我が親鸞聖人の恩師法然上人その人であつた。次いで吾々は人間の一大同情者、平民階級の救濟者たる祖師聖人の出現を見る。如來でもなければ、菩薩でもない、たゞ一個の人間なる愚禿親鸞が出でたのである。

時は高倉天皇の承安三年四月朔日、我が聖人は普通の人間として、何等他と異つたところもなく、平安末期の貴族たる皇太后宮大進藤原有範を父とし、名將八幡太郎義家の嫡男對馬守義親の女吉光女を母として、洛外日野の里に呱々の聲をあげたのである。幼名は松若丸。

安元二年五月、松若丸は僅かに四歲で父に死に別れる不幸に遭つた。加之、治承四年又もや母君の喪に服さねばならないこととなつて、重ね〳〵の不幸のために、彼は八歲で孤兒の悲哀を痛切に味はねばならなかつた。古聖も云つてゐる如く、「天のこの人に大任を下さんとするや、先づその心志を苦しむ」と。實に聖人は十歲に滿たずして浮世の荒波にもまれ、數奇の渦中に投ぜらるゝ身とはなつたのである。

父の歿後、其の翌年伯父の前若狭守範綱の許に引き取られた。他日顯脱すべき聖人は固より幼時から凡才ではなかつたことは勿論ではあるが、かの御一代圖繪の傳へてゐるやうな、父の逝去後已に佛門に入る志があつたといふが如きことは、あまりに超人間的の解釋ではあるまいか。併しながら、八歳にして母を喪ふまでの彼の日常生活からは、それと具體的には感ぜぬまでも、孤兒として、伯父とはいへ、肉親の愛とは異つた家庭で過した生活は、何とはなしに一種物足らぬ、空虛、寂寥の感に沈んだものであつたことは想像し得る。

此の間の少年の心の寂しさは、父母に訣れてから唯何とはなく悲しく、日夕心を痛めてをつたといふが如き單純な見解のみよりして、この一人間たる聖人の當時を解決してしまひたくはないと思ふ。

時は、靡爛した藤氏の末路を一蹴して起つた新興階級の代表者平家の全盛期である。この時代思潮の勢力に壓せられて、寂しく殘された藤氏の一門内に、何處ともなく吹き入る隙間洩る冷たい風は、あるとしもないものであつても、この伯父の家にも吹き入つてをつたに違ひない。かういふ沈んだ空氣の中に、さなきだに佗しい孤兒として寄食してゐたのである。勿論、養父



範綱には、いたいけな甥を想ふ憐憫の情はあつても、旦に夕にこの少年の周圍に侍づく婢僕に至つては、恐らくはかゝる優しい心根に乏しかつたであらう。是等の女房達や侍女、召使等の表裏のある日常の擧動は、孤獨の苦悶のために鋭くさせられた少年の敏感な心に如何に感じたかは、如何に長い年月を隔てゐても、吾々の心には明かに想像し得られるのである。「浮世の無常」などといふ具體的な觀念はなくても、傷き易い少年の心は、當時表面的に盛であつた佛教の影響を受けて、稱名三昧の日を送つてゐたこともあつたであらう。兎に角、自ら發心して、出家を思ひ立つにはあまりに幼な過ぎる。かういふ沈みがちな少年、しかも兩親を失つた孤兒の當然送らねばならない處は、當時にあつては寺院であつた。廣大無邊な御佛の慈悲の下に生きるのが、不幸な者にとつては何よりの慰藉であつたのである。

茲に聖人は他動的に出家したと見るべきであらう。勿論、稱名三昧のこの少年が、これを拒否すべき道理は少しもない。彼は平常見慣れてゐる氣高い僧侶の姿を思ふて、自動的にも沙門の生涯を喜んだことと想像される。

兎に角、我が聖人は養和元年の春三月、粟田口の青蓮院に入つて出家、得度を受けたのであ

る。時に齡漸く九歳。師は月輪禪閤兼實公の兄、法性寺關白忠通の子、大僧正慈圓（慈鎭和尙）である。かくして彼は範宴少納言の君と號し、出家としての生活が愈〻始まつたのである。

當時、和歌の隆盛はその頂點に達し、俊成、定家等の名家輩出して、歌壇の賑しさは誠に古今の偉觀であつた。

我戀は松を時雨の染めかねて
眞葛が原に風さはぐなり

土御門天皇の御代、「戀歌」の勅題を賜つた時、これを詠進して、此の歌に勝るものなしとの勅諚を忝うしたのは範宴の師慈圓僧正であつた。この師の下で學び、且つ幼い時から養はれた三位範綱も、歌人として相當聞えた人であつたから、彼は敷島の道にはかなり秀いでてゐた。

七歳の頃から『萬葉集』を讀み覺え、古今集をも暗誦した位の彼であつたから、或時師の使として參內した時、「みよりの羽」といふ題を賜つた。彼は些かも躊躇ひ煩ふことなく、



箐鷹のみよりの羽風吹立てゝ
おのれと拂ふ袖の白雪

と詠み奉つた。叡感殊の外に深く、月卿雲客も流石は三位が養ひ子、慈圓が弟子であるわいと讃歎しないものはなかつた。其の上、聖上からは檜皮色の小袖をさへ拜領する光榮に浴して、大に面目を施したと傳へられてゐる。

次いで彼はその年叡山に登つて、東塔の無動寺なる大乘院に移り、十歳に滿たぬこの皺僧は玆に登壇受戒をしたのである。

かくして彼は十八歳に至るまで北嶺に籠つて、或は圓教義を讀み、或は句讀を受けた。圓教義、小止觀、三大部を讀破し、白氏文集を繙いた彼は、俱舍唯識百法を讀み習ひ、華嚴を聞き、法相、三論をさへ學んだ。また密學の探奧を探つて廣く顯密の奧儀を究めるなど、研學に只管餘念がなかつた。併し彼はこれ等の諸教派の祕奧を探つて、徒に漫然これを受入れて、顯密二教

等の一學徒として一生を終るには、あまりに敏感であつた。行くところ一として可ならざるところのない明敏な頭腦の所有者たる彼が、手當り次第に攝取したこれ等の哲理は、人間としての實生活に如何なる交渉をもつであらうか。日ねもす經卷に眼を曝して、飽くことを知らない知識を滿たしてゐる間はそれでもいゝが、獨り孤燈の下に端座した時、うづくやうな人間的な欲求、人間的な寂しみが、何處ともなく聖人を襲ひはしなかつたであらうか。時には比叡の山を下つて、まざ〳〵と糜爛した人間の世界を露骨に見せつけられた時、哲理の探求に敏感な頭腦に何等の感銘をも與へなかつたであらうか。自らの心、自らの肉體に起りつゝある人間的な欲求、頽廢せる周圍の僧侶等の生活、功利名聞に渦卷いてゐる山下の生活……これ等を親しく體驗し、目睹した聖人は果して如何なる態度を執つたであらうか。

聖人は今や十九歳、青春の血汐に燃える惱ましい日が續く。何事にもあれ、絶對に妥協を許さぬ青年の澄澈さをもつてゐる。

『方丈記』の作者鴨長明の言をかりていへば、「京の習何わざにつけても、みなもとは田舍をこそ賴めるに、絶えてのぼる者なければ、さのみやは操も作りあへん」と。養和年間は飢饉に、



加ふるに、天災地變頻りに起つて、民衆の生活は極度にまで脅かされるに至つたから、衣食足りてこそ禮節もあれ、餓しては「さのみやは操も作りあへん」の嘆聲の洩れるのも當然である。今や世は亂れ、人は飢えて、世を擧げて野獸の群と化し、骨肉相食まんとする悲慘な情勢に立ち至つたのである。

かゝる現實世界を目に見、耳に聞いた幼い聖人の胸には何と響いたであらうか。赤裸々な淺ましい葛藤を眺めながら、聖人は一人山に登つたのである。この山は果して如何なる境であつたらうか。形式的信仰に囚はれて、腐敗墮落の底に沈淪した南都の都市佛教に對抗して、圓頓の戒壇を山上に築いた北嶺の山岳佛教は、果して古のまゝの聖教であつたらうか。根本中堂の奥深きあたりには昔ながらの法燈は閃いてゐるが、これを護る幾百の圓頭顱は、また昔日の嚴肅な戒律の下に心の清淨を保つてゐる僧侶ではなかつた。否、寧ろ衆俗よりも甚だしい醜穢な塊であつた。淺ましい人間性は、下俗ばかりのものではなかつた。彼等幾百の僧侶も亦弱い人の子であつた。

淨かるべき山上は、却つて汚穢の巢窟である。かゝる山上、かゝる道場を聖人は如何に見たで

あらうか。反抗か、同情か、聖人の執るべき途は二つしかない。飽くまでもこの醜團に反抗して、これ等の汚穢を一蹴し去るべきか、將た又、あはれむべき人間性のいたましい發露を柔かい愛の手を以て撫でようと思ひ立つたであらうか。

人間に對する同情こそは、聖人が愚禿生活に入る道程であつたのである。僧侶の肉食妻帶を認めたことに於て、吾々は聖人の溫い人間愛を覗ふことが出來る。これは一見、當時の佛教――禁慾生活の强制に對する挑戰であり、反抗であるかの如く見える。併し、少くとも聖人の場合に於ては、何等の反抗や挑戰的な動機や態度が認められないのである。禁慾生活――淸教徒的生活の美名の下に、あらゆる俗醜を蔽ひ隱すほど大なる害毒はない筈である。飽くまで人間的であつた聖人は、こゝに始めて其の高邁な心眼を見開いたのである。罪深きものなるが故に同情もし、自らも苦しんだのである。柔かい而も溫い慈悲の衣を以て、すべての人間を一包みにして、一視同仁的態度を以て育まうとしたところに、聖人の美しさと偉大さとがある。親鸞教こそは、偉大なる愛の宗教である。聖人の態度は、すべての人間の罪惡を肯定するところから出發したのであつた。尊き體驗よ、彼も亦自己の靑春のうづきの中に、すべての人々の犯すとこ



ろの罪惡がやはり等しく存することを痛切に體驗したのであつた。山上に於て、吾獨り高しとせる在來の宗教は、一般の人々にとつては近づき難いものであつた。今や人々は痛切に、彼等の救濟主の出現を要求し始めた。貴族の要求も、武家の欲求も、而してその間にあつて虐げつくされた民衆の要求も、卽ちそれであつた。僧侶は意識しなくとも、佛教は已に山を下りつゝある。山上の墮落はそれである。僧徒自らその種を蒔いたのである。彼等の好むと好まざるとに關せず、彼等は自らその收穫に從はねばならない。

聖人は正に二十九歳、內部より溢れ出づる若い生命の力は、眞理を求めて喘ぎに喘いでゐる。十年の苦惱、煩悶を解決すべき時期は遂に到來した。十九歳の春、山を下つてあらゆる苦悶に徹し、道を求むる一念に寢食をも忘れてゐた彼は、二十九歳の秋、遂に計らずも吉水の禪室に於て、我が歸依すべき眞實の敎を法然上人の人格の上に見たのであつた。

「親鸞に於ては、唯念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なき也」と、立ちどころに他力攝生の旨趣を體得した。深奥な佛敎の哲理と、吾人の人間慾とに交涉をもち來たらしめたところに、我が聖人の偉大さと、愚禿生活の博大さと

を瞻仰せずにはゐられない。

承安元年の春まだ淺い頃、聖人は世俗の讒謗を受けて師と共に遠流の身となり、五星霜の間越路の野に雪になやみ、それより關東、北陸二十五ケ年間の教化を終へて歸洛の後、八十有餘歳にして『御和讃』及び『愚禿鈔』を著した。

稀世の偉人親鸞も、今や寄る年波に堪へることが出來ず、弘長二年仲冬、頽齡九十歳を以て遂に示寂した。遺骨は洛東鳥邊野のほとりなる大谷の廟に納められてある。



# 日蓮上人

建長五年四月二十八日の朝まだきのことであつた。太平洋岸に屹立する安房の國清澄山の巓に程近い旭の森の東の端れ、青苔の蒸した斷崖の尖端に立つて、今しも明け放れようとする東の空をぢつと見詰めながら、一心不亂に南無妙法蓮華經と聲高らかに誦する年若い一人の僧があつた。彼は念珠を揉みながら、元氣のいゝ聲で十たびばかり題目を繰り返し唱へてゐた。彼の顏には感激の光が充ち滿ちてゐた。彼は微かに上氣した顏を冷かな朝風に吹かれながら、足どり勇ましく山路を下りかゝつてゐた。彼は一七日の三昧から起つて、こゝに雄々しくも己の所信を廣く天地の精靈に向つて宣言したのである。

清澄山の麓、小湊に住まつて漁を業として細々と生計を立てゝゐた貫名次郎重忠の一子、善日麿は子供の時から同情の深い子であつた。千光山清澄寺に登つて、住職の道善坊について得度を受けた彼は、蓮長といふ名でこれから呼ばれてゐた。今しも、清澄山の頂に立つて、妙宗

開宣の大獅子吼をした若僧こそは、かの善日麿の蓮長であつたのである。

これよりさき、蓮長は師の坊や兩親の許を得て、學問修業のために住みなれた安房の山を立つたのは、彼が十九歳の時のことであつた。彼が目的地として目指してゐる所は鎌倉であることは、いふまでもない。右大將頼朝の開府以來、京都の繁榮は自然と鎌倉に移り、天下の學者名僧知識は悉く當地に集つて、文教の盛なことは前代稀に見るところであつた。建長、圓覺等の堂塔伽藍甍を競ひ、露坐の大佛はいふもさらなり、郊外の遠く金澤の地に於てすら文庫は開かれ、經學、教理の中心としての鎌倉は正に殷盛の頂點に達してゐた。

上總から下總にかゝり、紫匂ふ武藏野を過ぎて帷子の里といふ所に來、一夜を木樵の生垣した家で過した。其の家の子供が玩んでゐる數多くの張子の人形のなかに、勿體なくも、釋迦牟尼佛の立像が一體交つてゐるのを、彼は目ざとく見つけた。金箔も所々剝げ落ちて、おまけにいたはしや、鼻さへも缺けてゐた。

「これは又何としたことで御座る。」

と蓮長は言葉忙しく宿の主人を詰つた。彼はあまりの勿體なさに、語氣に怒をさへ含むのを如



何ともすることが出來なかつた。

主人はカラ〳〵と打笑つて、圍爐裡火に榾を折り燻べながら、言葉靜かに

「いや、お若い旅の方、御不審は尤も千萬。やつがれ、近頃所用あつて鎌倉表に參つたるに、」念佛宗の高德で大阿上人と申す生佛の譽高い聖がおはす。就いて戒を受け申して御座る。」

と語つた。蓮長は憧憬の目を以て主人を見ながら、

「定めし立派な聖で御座らう。御主人は好い佛果を得られて幸福ぢやのう！」

主人はなほも言葉を續けて、

「師の仰せらるゝには、一代の聖經は凡そ八萬四千といふ大數なれど、我等が修行は念佛三昧に優るものは御座らぬ。釋迦や藥師を拜むは、禮拜雜行といつて修行の穢となるのぢや。それでは念佛修行を如何にいたしても、千に一つ極樂往生は遂げ難い。諸佛諸神を振り棄て、唯一向に念佛するが肝要の式と法然上人の『選擇集』を講じての有難い說教で御座つた。して見れば、持佛の釋迦も捨つるに更に惜しくはないといふもの。圍爐裡火に燻べて煙とするよりか、子供のもて遊びの物とするが、結局まだ增しでがな御座らう。」

これを聞き終へた彼は只管呆れ果て、鎌倉へ着いたならば、何はさておき先づ大阿上人の許を訪ねて見ようと決心した。

聞きしにまさる鎌倉の繁榮も、法の外に何ものもない蓮長にとつては、空吹く風と何等異るところはなかつた。旅の草鞋解く間ももどかしく、彼は大阿の許に馳せ參じて、飛花落葉の夢の浮世に、唯頼むべきは念佛稱名の聲であるといふ教義を聽いた。又左輔ケ谷に草庵を結んでゐた法然上人の法孫然阿良忠上人の許へも往き通ふた。

然るに、霧ケ澤好見に法莚を開いてゐた大阿上人は稀有の惡疾を患つて、晝夜の苦しみに庵の中を泣き叫び轉び〳〵息が絶えた。

其の遷化の姿は、淺ましくも身體縮まつて小兒の如く、色は黑ずんで恰も墨を塗つたやうであつた。蓮長はつく〴〵思つた。これは正しく地獄の相を現したものであり、畢竟佛意に協はないからであると。こゝで彼は、念佛宗の救ひのないみじめさを心潛に嘲るに至つた。

念佛宗に慊らなさを感じた彼は、此の上は叡山に登つて、我が立つ杣の台密の奥儀を究めようと自ら決心した。そして此の鎌倉で心安くなつた北嶺の學僧尊海と打連れ立つて、海道を京



に上つた。旅途恙なく四明ケ嶽に分け入つて三塔の學衆と親しみ、法華經を我が分と深く心に定めて、日夜講學に怠るところがなかつた。

一日、講堂に數百千の大衆綺羅星の如く居並んだ中で、講主は聲嚴かに法華經と大日經との差別如何にと問を發した。滿座水を打つたやうに靜まり返つて、些の音もない。蓮長はやをら席を進めて、

「法華經は醍醐味の極說、大日經は生蘇味の權敎。之を平たく譬へて申さば、力士と小兒との力競べにも似てゐるといふもの、此の二經の優劣は愚僧如きの批論の餘地は御座らぬ。抑〻當山は慈覺大師に立つて、空海の眞言に泥み、理同義勝の義を立てて、開基傳敎大師の法水忽ち濁つて、叡岳の宗脈此に至つて汚れたりと覺えますする。」

と、臆する所なく、辯舌爽かに申述べた。居並ぶ衆徒の面々は、彼の此の傍若無人の批評には何れも興ざめ顏であつた。

彼は横川の草芳谷淨光院と東塔の圓頓坊とに兼ね住んで、暫く錫を此の地に留めてゐた。彼の學識は間もなく一山に鳴り渡り、覇氣ある青年學僧として前途を囑望せられてゐたのである。

やがて鴻の海のほとりなる三井寺に登つて智證大師の宗風を究め、臨濟宗の圓爾和尚、曹洞宗の大德道元禪師にも親しく教を受け、當時洛外の泉涌寺內の來迎院に來朝中の宋の名僧道隆禪師を訪ねて、見性成佛の工夫を凝らすにまで至つた。

それから彼は奈良の舊都に出で立ち、元興寺に入つて三論を修め、興福寺を訪ふて法相、倶舍の教義を探り、東大寺に赴いて華嚴の奧儀を悟り、唐招提寺に遊んで戒行、律宗の妙趣をも味ひ、藥師寺に入つては一切經を繙き、法隆寺では法相の諸書を涉獵し、其の上、成實宗をさへも修めて、南都の六宗を殘る所なく研學し終つた。

次いで彼は紀の國高野山に登らんと、路を花坂にとつて眞言祕密の淨域に入つた。佛法僧の啼く音淋しい三鈷の松のあたり、金剛峯寺に滯留して彼は經卷に眼をさらした。やがて再び京都に歸つて、かねてより舊知の間柄の書肆の紹介を得て、大學三郎能本といふ儒者に就て儒學を修めた。更に又、敷島の道をも尋ねようと冷泉爲家卿の教を請ひ、東寺、仁和寺の學室に入つて書道を學んだ。斯く彼は凡ゆる方面に對して、熱心に修養を怠らなかつた。

其の後、叡山に歸つて淨光院に籠り、專ら天台の摩訶止觀を讀んで想を深くこれに潛めた。



「八萬四千の聖經中、法華經は唯一にして不二、如來出世の本懷は此の一經に留る。法華經の第七に云はずや、我滅度の後の後の五百歲中に廣宣流布し云々と。

又云ふ、如來滅後に於て閻浮提の內に於て廣く流布せしめ斷絕せざらしむと。天台大師も傳教大師も、後の五百歲は必ず妙法に沾はんと宣はれた。今は末法第五期、鬪諍堅固の五百歲に中り、上行菩薩の出現し給ふべき時期である。

彌勒菩薩宣はく、東方に小邦あり、唯大機のみあり云々と。慧心僧都の『一乘要訣』にも日本一州圓機純一等と說いてある。妙法開宣の地は我日本を措いて將た何れの處ぞ。あゝら有難や、嬉しやな、上行菩薩出現の日は正に目睫のうちに近づきたるぞ。」

蓮長自らは、妙法弘布の上行菩薩たることを期したのである。斯くて彼は十數年の久しきを經て、懷かしい故鄕へ歸ることとなり、途を伊勢にとつて五十鈴の淸流に嗽いで皇太神宮を伏し拜み、長汀曲浦の旅枕を重ねて遂に小湊の濱に辿り着いた。

翌朝、旭のまだ上らない前に起きて、淸澄山に登つて師の道善坊と絕えて久しい對面をした。師の坊は寄る年波のため今は起居さへ不自由な身となつてゐた。蓮長は師の老衰した樣を眺め

ると、唯只暗涙に咽ばずにはゐられなかつた。彼は師弟の情誼と佛道とのヂレンマに陷つて惱み續けた。師は學識二つながら秀いでた彼を法統の跡目とすべく、幾度も說き且つ懇ろに賴んだのであるが、彼は深く心に決するところあつて遂に師を失望せしめてしまつた。法のためには、親をも師をも捨てねばならぬ。

清澄寺境內の一庵室に閉ぢ籠つて、卯月末の二日よりの大禪定滿願の曉、東天に向つて妙宗弘法の大獅子吼をなしたのである。此の時年僅かに三十有二。

『念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊の邪宗に迷はゞ、其の身は未來永劫地獄の苛責を受くるを知らざるか。此の蓮長は如來の御使、末法澆季の世に妙宗の正法を流布せんがために生れたる者なるぞ。』と、左手に高く法華經を捧げ、右手を以て敎壇を叩きながら叫ぶ彼の姿は、實に深山の月に嘯く猛虎の雄叫の如き慨があつた。

慈愛深い兩親の健氣なる激勵に依つて、彼はこゝに於て名を改めて日蓮と稱し、迫害と呪詛の渦中に身を投じた。いつの世でも、新宗敎の創唱者等は常に殘忍酷薄な壓迫の魔の手と戰はなければならない。我が敎界の英傑日蓮の場合に於ては、殊に其の激烈なるものであることを吾



人は見るのである。

鎌倉は名越松葉ケ谷にさゝやかな草庵を結んだ彼は、洽く諸宗に挑戰する第一歩として、小町ケ辻に路傍傳道を行つた。瓦礫は飛んで雨と降り霰と散つた。併し彼は泰然自若として動かざること大磐石の如く、高らかに唱ふる南無妙法蓮華經の叫はやがて鎌倉全市を動かし、遂には全國津々浦々までも鳴り響かした。

文應元年、執權最明寺入道時賴に上つた『立正安國論』には、耿々たる憂國の至情が充ち溢れ、火の如き彼の性格が如實に現はされてゐた。

當局の忌諱に觸れて或は伊豆に流され、或は瀧ノ口に奇蹟的に危難を免れ、文永八年佐渡が島根に又もや配流の憂き目を見るに至つた。併し其の後赦されて歸り、五十三歳の時遂に甲州身延の山中に入つて妙宗の大本山を開くことが出來た。彼の一生は眞に奮鬪の生涯であり、惡戰苦鬪の連續であつた。

# 北條泰時

夜が明けてからかなり時間が經つたらしいが、家の中はまるで闇の夜のやうに暗い。空一面には墨を流したやうな黑雲が、低く蔽つかぶさつてゐる。いやにムシ〳〵して、氣持の惡いことは夥しい。さきほどまで吹いてゐたそよ風も、今では全く感ぜられない。氣味惡い靜けさが一時支配してゐる。人々は何か知ら、今にも起りさうな不安の豫感に戰いてゐた。忽ち凄じい勢で豪雨が降り瀉いで來た。谷々から瀧のやうに泡を噛んで落ちる水勢は、滔々として逆捲きながら河に流れ込んだ。暫くすると、淵にも瀨にも一面の白波が濁流の上に躍り狂つた。暫く間に諸所の堤は決潰して、野も山も見渡す限り泥海と化してしまつた。それに加ふるに、午の刻頃から俄に暴風さへ吹き起つて、樹木を根こぎにし、家々を悉く倒壞してしまつた。海邊にあつた船は、或は顚覆し、或は破損して其の慘狀目もあてられぬほどであつた。鎌倉鶴岡八幡宮の廻廊、八足の門はいふに及ばず、其の外諸所の神社佛閣、堂塔伽藍一として滿足に殘つたもの



はなかつた。下總國葛西郡の海岸では、大海嘯が襲來して、農民や漁夫の家などを引き浚ひ、一千餘人は潮に捲き込まれて死んでしまつた。これが建仁元年八月十一日のことであつた。

然るに、同月二十三日關東地方は又もや暴風雨に襲はれた。其の被害は、去る十一日の時にも劣らぬ位甚だしかつた。此の二度の大風水害のため、五穀の收穫は殆んど皆無となり、おまけに倉庫まで破壞されたので、民衆の困窮は其の極に達し、餓死する者が巷に充ち滿ちてゐた。强盜が諸所に出沒した。時には思ひもよらぬ家へ押し入つて、財寶を奪ひ、米穀を偷んだ。昨日までは富み榮えてゐた者も、或は洪水のために家を流され、或は財產を失つて饑餓に瀕した。泣き叫ぶ聲が日夜人々の胸を衝いた。洵に慘澹たる光景が到る處でも見られた。

將軍賴家は、こんなことをも一向氣にかけず、毎日蹴鞠の練習に餘念がなかつた。彼は北條五郎時連、少將法眼歡淸、富部五郎、大輔房源性、比企彌四郎、肥多八郎等を相手として百日の鞠を始めてゐた。彼はかなり上達してゐたが、尙ほ其の奧儀を究めようと思ひ、斯道の大家を一名、北面の武士の中から下向させていたゞきたいと、仙洞(後鳥羽上皇)へ奏上した。そこで勅命に依つて、當時名人の譽高かつた、紀內所行景が蹴鞠指導のため、九月七日鎌倉へ下つて

來た。頼家は非常に悦んで、

「前庭の籬の菊玉杯に浮ぶ。永く萬年を契るべし。」

といつて、自ら白銀造の太刀を行景に與へた。頼家は毎日政務を打ち棄てて、蹴鞠にばかり熱中し、只管上達することにのみに意を用ひてゐた。

九月二十二日の夜、江馬太郎泰時は幼な友達の中野五郎能成の訪問を受けた。二人は四方山の話に耽つて、思はず時の過ぎるのも打忘れてゐた。自然話は將軍の近狀にも及んだ。

「時に能成、聞けば將軍家は近頃蹴鞠にきつい御執心との噂だが、それは本當かい？」

「本當だとも。京から行景といふ師匠が來てからは、まるで滅茶だ。將軍家には全く困つたもんだ。鞠でなくちや、夜も日も明けんのだから。」

「いや、あれは幽玄な藝だから、賞翫なさるのは仕方がないとしてもだ。今年のやうな年にはね。引き續き二度もあの暴風雨ぢや、人民の困窮するのは當り前だ。大飢饉の此の年に、あんな優長な遊び事をなさるとは、さて〳〵情ないことだ。こんな時節だから、少しはお愼しみあつて然るべきだ。政治に意を用ひられ、理世安民の御惠を御心にかけなさるなら、此の上ない結



構なことだのに、そんな御志は露ほどもなく、おまけに京都から師匠を呼ぶとは、物の費えも少くないことではあるし、人民の歎きを顧みず、恣な御振舞には全く呆れてしまふよ。能成、貴公は御近習を勸めてゐるんだから、御機嫌を伺つて諷諫するのが當然だよ。」

「さういはれると恐縮してしまふ。早速申し上げて見よう。」

能成は自責の念に打たれながら、北條家を退出した。

其の後、十日ばかりしてからのことであつた。藪清法眼といふ者が密かに泰時を訪れた。法眼は

「貴方が去る二十二日、中野五郎能成に話された事を、能成が具に言上いたしました。處が多分いひ違ひでもしたのでせう。將軍家の御機嫌が誠に惡く、『祖父(時政)や父(義時)をさしおいて若輩の身でありながら、吾に諷諫を奉るとは奇怪千萬。上を輕んじ吾を侮る不所存者奴が。』と仰せられた。だから、太郎殿は暫く御所勞と稱して、在國なされたが宜しからうと存じます。御氣色の惡いのもさう長くはありますまい。一月もたてば大丈夫でせうから。」

と親切顔にいつた。すると泰時は

「某は全く諷諫を奉つた覺えがないのです。唯愚意の及ぶところを、些か近習の仁に相談したばかりです。此のために處罰されるのでしたら、決して逃げ隱れはいたしません。立派に御裁きを受けませう。併し、火急の用事がありますから、明朝は必ず伊豆の北條へ出かけます。だが、貴殿の御話で思ひついたのではないのですぞ。」

といつて、旅の雜具や、簑笠までも見せたので、法眼は返す言葉もなく、すご〳〵と歸つて行つた。

翌日、泰時は急いで鄉里北條へ下向した。此處は去年も洪水のために、田畠の損害が甚だしく、春以來農民は食糧に困難を感じ、耕作する方法も立たず、種を蒔き苗を植ゑる力がない。そこで鄉民等は連署狀を出して、米を五十石借りて今年の秋返納する約束をしたが、先月の風雨でそれどころの騷ぎではない。飢餓に瀕したものも少くはなく、誠に悲慘な狀態に陷つてゐた。それで、「借り申した米穀を返上するのは、如何して〳〵思ひもよらぬことだ。年貢が納められないから、此の分では代官のために、ひどく叱られるに違ひない。兎も角、妻子を連れて他所へ逐電して當座の難儀を遁れなくては仕方があるまい」と農民達がいつてゐると聞いて、泰時



が態〻伊豆へ下つたのであつた。

連署した人々を呼び集めた泰時は、其の目の前で證文を燒き棄てゝしまつた。

「皆の者、定めし難澁いたしてゐることであらう。泰時不憫に思ふぞよ。先年そち等に借した米は、今後豐年が續いても、決して返納するには及ばぬ。皆そち等にくれたのぢや。」

農民達は皆、一時自分の耳を疑つた。やがて彼等は歡喜の餘り、聲を立てゝ泣いた。泰時は其の上、酒や飯を出して饗應し、一人宛白米一斗づつ與へたので、一同手を合せて感涙に咽び、「此の殿の御子孫御繁昌し給へ」と異口同音に叫んで退出した。これが泰時の十八歳かの時のことであつた。

貞應三年の六月、父義時が卒去したので、京都の六波羅にゐた泰時は、宙を飛んで鎌倉に歸つた。如何に惡逆無道な義時とはいへ、彼にとつてはやはり唯一人の父親であつた。泰時は家督を繼いで執權職に上つた。彼は儉約を守り、仁慈の心に富み、公平な政を施したから、人民は皆北條氏に心服した。

陸奥守義時の死後間もない頃であつた。泰時には男女の兄弟が大勢あつたので、遺産分配の

要求があつた。二位の禪尼（頼朝の未亡人政子）は、此の事を泰時に申し渡してから、

「若し此の要求について意見があるならば、遠慮なく仔細を申しなさい。」

と彼の意見を聞いたのであつた。

泰時は、

「遺産分配の事は、一切貴女にお任かせいたします。決して異議は御座いません。」

と答へて、惜し氣もなく、よく肥えた收穫の多い莊園を悉く弟妹達に與へ、自分は石の多い地味の痩せた畠にするよりほか仕方のない地面を少し取り、又器財雜具も好いのは皆分配して、殘りのつまらない物などを少し自分の物とするに過ぎなかつた。そこで二位の尼は驚いて、

「それでは、總領のお前の分が洵に少い。全く物の數でもないぢやないか。これは一體如何したのだ。」

と尋ねたのであつた。此の時彼は、

「關東の執權を承る上は、さのみ慾深く望む必要はありません。唯只舍弟どもが不憫ですから、いたはつてやらうと思ふばかりで御座います。」



とて惜しむ色がなかつた。二位の尼は泰時の慈悲深い心に感じて、老眼に涙を一杯湛へた。

彼は頼朝以來の慣例に基づき、幕府の法令を定めようと日頃から考へてゐた。そこで、貞永元年五月、三善玄蕃允康連に法令の起草を命じ、法橋圓全をしてこれを淨書せしめた。

同年七月、政治に私なきことを表して、評定衆十一人が起請文に連署した。泰時も弟相模守時房も共にこれに判形を据ゑ、今日より以後、訴訟事件には是非堅く此の法を守つて裁斷すべきことを定めた。御成敗式目五十一ヶ條は斯くして制定された。これは後世永く武家法制の規準となつたもので、世に貞永式目と稱してゐる。

記錄所の門に鐘を釣つて、訴訟人に撞かせ、鐘が鳴れば、人を出して訴訟人を引見し、直に訴へを聞いて書き記し、毎月十日と二十日、晦日の三日を決斷の日と定めた。而して其の日には、頭人（奉行）、評定衆等を集め、式目に據つて事の理非曲直を裁決した。彼は又常々畏敬してゐた京都栂尾の明惠上人を訪れて、政治の要諦を問うたことがある。上人は「治亂の本は人の慾である。あなたが若し慾を少くして政を執られたなら、天下を治めるのに少しも困ることはありますまい。」と敎へ、又「あなた自ら心を正しうしなさい。形が眞直で影が曲り、政が正しう

て國が亂れる筈がありません。」とつけ加へたので、泰時は實にもと感じ、其の言を服膺して忘れなかつた。だから士民は皆其の仁政の惠に浴して大いに悅び、仁治三年六月彼が六十二歳を以て卒した時は、皆父母を失うたやうに悲しんだと傳へられてゐる。

事滋き世の習こそ物しけれ
花の散りなん春もしられず

（北條九代記、東鑑等に據る）



# 楠木正成

文永、弘安兩度の蒙古襲來は、間接に北條氏滅亡の一大遠因となつた。此の未曾有の大事變に際し、幕府の費した軍費は頗る巨額に達し、尙ほ其の後も元の再擧を慮つて沿海の防備を續けたので、其の財政は極度にまで困難に陷つた。隨つて戰功に對する恩賞や、社寺の祈禱に報ひるべき論功の財源捻出のため、勢ひ民衆の負擔を重くしなければならなかつた。併し、民衆の負擔力には限度があるから、論功行賞に不平を抱き、不滿を感ずる者が少くなかつた。尙ほ其の上、最も注意を要するは、此の國難に依つて、我が國民が、眞に其の國民性の自覺を促されたことである。藤原氏の擅權以來、皇室との間には、不知不識の間に障壁が築かれてゐた。然るに、曠古の國難に方つて、上は御一人より下は田夫野人に至るまで、眞に擧國一致して外敵に當り、國民は其の眠つてゐた國家觀念を呼び醒まされたのである。加ふるに、承久の變に皇軍に屬して王事に勤めた人々の子孫は、北條氏の迫害を受けること久しく、殊に元寇以來の幕府

の横暴振を見るにつけ、積年の怨恨が洵に骨髓に徹するものがあつた。故に斯る人々は、只管、密かに討幕の機の熟するを待つてゐた。

九國隕滅可レ憐、是關東政道之緩怠也、衆口囂々、但可レ祕云々（世續記、文永十一年十月の條）

などの如きは、元寇以來の新思潮と、其の祕める聲との反響に外ならない。

當時の執權北條高時は、暗愚な僧主で、政道の紊亂は甚だしく、內管領長崎高資は權を擅にして、私腹を肥やすに急であつたので、人心は漸く北條氏を離れ、諸所に幕命を奉じない者が出るやうになつた。大覺寺統の正脈を繼がせ給ふて、皇權恢復に叡慮の深かつた後醍醐天皇は、日野資朝、同俊基等の新進有爲の公卿と、地方にある義勇の志士とに依つて、一部新思潮の暗流に乘じて、正中年間、密かに討幕の計畫を運らし給ふたが、不幸にも、事中途にて露れて水泡に歸してしまつた。其の後も、種々の方法に依つて、北條氏征討の密計を、著々進捗せしめられてゐたが、表面は頗る平靜な態度を裝ふてゐ給ふた。

元弘元年八月二十四日、今夜、六波羅の幕兵が、禁廷に來襲するであらうとの飛報を密かに奏上した人があつたので、俄然、比叡山へ行幸の內議を變更して、夜に紛れて奈良に潛幸し給



ふこととなつた。併し、南都の僧兵も餘り當てにはならないので、要害堅固な笠置山に還幸あらせられ、こゝに行宮をしつらへ、討幕の錦旗を山風に靡かせ給ふた。

然るに、賴みとし給ふた山門も陷り、主上笠置山潛幸の事は、間もなく幕兵の探知するところとなり、兩六波羅の探題は、近畿地方の軍勢を驅り催して、今にも行宮に押し寄せようとする形勢が見えた。こゝに於て、笠置の行宮に於かせられても、四方に密使を遣して、勤王の志士を招き給ふた。大和、河內、伊賀、伊勢等の諸國の志士、義民等は急を聞いて馳けつたが、中にも最初から賴み思されたのは、河內の豪族楠木兵衞正成であつた。彼は渺たる一土豪に過ぎなかつたけれども、父祖以來、多年蓄積した其の潛勢力と、其の智謀雄略とは、東武幾代の覇者にとつても、洵に侮り難い實力を有してゐるのであつた。

楠木家の祖先は、遠く橘諸兄に出てゐると傳へられ、河內に土著してからは、既に久しい歲月を閱してゐた。傳說に依れば、正成の兩親は、かなりの老年になつても子供がないので、每日淋しい日を送つてゐた。だん〳〵老衰して、若い時代のやうな心の豐かさを失つて來ると、誰しも痛切に骨肉の愛を思ふものである。此の善良な鄕士夫妻も、秋の冷氣が身に泌みるにつ

れ、後繼者のない悲哀をしみ〴〵と感ずるのであつた。そこで、夫妻は、此の上は唯だ、日日信仰を傾けてゐる多聞天の靈威に賴る外はないと決心した。二人は毎日缺さず禮拜して、熱心な祈願を怠らなかつた。其の靈驗に依つてか、程なく楠木家には、めでたい徵候が顯れ、一年あまりして、家庭には賑かな一人の家族が殖えたのであつた。夫妻の欣びは、全く何物にも譬へ難かつた。此の幼兒をば、靈驗に因んで多聞丸と名づけ、掌中の珠として愛しみ、限りない愛情を注いで、其の成長を待ちあぐむのであつた。

多聞丸は生れつき物覺えがよく、洵に聰明な而も慈悲の心の深い少年であつた。彼がまだ少年時代のことであつた。河內の國に百姓一揆が蜂起して、其の勢が非常に强く、容易に鎭定しさうにもなかつた。彼は唯だ一人、暴れ狂ひ騷ぎ廻つてゐる農民達の所へ出かけて行つて、理非を說いて人々を宥め、且つ慈愛の籠つた取扱をして、さしもの騷亂を忽ちの間に鎭めてしまつた。これから彼の信望は愈〻加はり、河內の國では、彼のためには水火をも辭せない人々があちらにもこちらにも出來て來た。だから、後醍醐天皇が彼を股肱と賴み思されたのも、決して偶然ではない。邊土の一土豪、天下の一布衣の身を以て、斯くまで聖上の知遇を忝うした彼



は優渥な勅諚に感泣して、必ず朝敵を討滅して叡慮を安んじ奉るべく、若し楠氏の一族にして、一人たりとも生き殘つてゐる限りは、決して宸襟を惱まし給ふには及びませんと雄々しくも奉答したのであつた。そして、戰略の御下問に答へて、

東夷近日の大逆、只天の譴を招き候上は、衰亂の弊に乘じて天誅を致されんに、何の仔細か候ふべき。但天下草創の功は、武略と知謀との二にて候。若し勢を合せて戰はゞ、六十餘州の兵を集めて、武藏相模の兩國に對すとも、勝つことを得難し。若し謀を以て爭はゞ、東夷の武力只だ利を摧き堅を破る內を出でず。是欺くに易くして怖るゝに足らざる所なり。合戰の習にて候へば、一旦の勝負をば必ずしも御覽ぜらるべからず、正成一人まだ生きて有りと聞召され候はゞ、聖運遂に開かるべしと思召され候へ云々。（太平記）

然るに、まだ其の時機が到來しなかつたのであらうか、行宮は僅か一兩日間で陷り、天皇は萬里小路藤房等二三の近臣を從へて、正成の居城赤坂を指して逃れ給ふた。一天萬乘の君として、いたはしくも輿をも召されず、假にも未だ習はせ給はぬ御步行であつたから、一足には休み二足にはお立止りなるのであつた。とある木蔭に立ち寄らせられた時、露がはら〳〵と袞龍

の御袖にかゝつたのを御覽ぜられて、」

さしてゆく笠置の山を出でしより
あめが下には隱家もなし

と詠まれたので、藤房ははぶり落ちる涙を押へて、」

いかにせん頼む蔭とて立ちよれば
なほ袖ぬらす松の下露

と御返歌申し、遂に聲を放つて泣いた。併し、たうとう賊兵に探し出され給ひ、高時は畏くも主上を隱岐の離れ島に遷し奉つた。これより先きに、幕府は新主、光嚴院を擁立してゐた。ここに於て、六波羅の軍勢は勝に乘じて、赤坂城の下へ殺到した。其の勢は四萬餘騎と號し、雲霞



の如き大軍は此の孤城を十重二十重に包圍した。正成は智謀を傾けて、此の目に餘る敵の大軍を惱まして、損害を與へたことは誠に夥しいものであつた。併し、到底永く敵對するだけの備がなかつたから、焚死の體を裝ふて敵を欺き、一旦退去して其の後一年餘りも、巧に潛み匿れてゐた。

斯くて高時は、承久の役と同じやうに落ち着くものと多寡をくゝつてゐたが、もはや時勢は移り變つて、人心は北條氏を離れてゐたから、勤王の將士は續々として、諸處に義兵を起した。元弘二年の暮、護良親王は令旨を下して義兵を募り、吉野に據つて兵を擧げ給ひ、正成は千早に籠つて、一時勢甚だ強く、紀伊の豪族湯淺定佛を降して義軍に加へ、河内、和泉、攝津の三國の賊徒を掃蕩した。殊に天王寺の決戰に於て京敵を破り、剩へこれを淀河まで追躡して多大の損害を與へ、其の勢大いに揚つた。

幕府の驚駭は一方ではなかつた。そこで、關東の精鋭五萬騎を遣して、吉野及び千早、赤坂の諸城を攻擊せしめた。官軍は善戰して、賊軍を惱ましたことが度々ではあつたが、赤坂城は早く陷り、次いで吉野の本營も賊の重圍に陷つたので、村上義光は宮の御身代となつて討死し、

親王は辛うじて高野の方へ落ち延び給ふた。千早城では、正成は一代の智謀を運らして防戰したので、賊は容易に近づくことが出來なかつた。和歌山平原の義軍も、敵の壓迫を受けて活動力を失ひ、其のうちに赤坂、吉野へ向つた賊軍も千早攻擊に馳せ加はり、三軍は勝に乘じて孤軍援なき此の城を稻葦竹麻と取り圍んだ。正成は、かねてより充分に準備してあつたから、少しも苦しまず、奮戰力鬪して東軍を屢〻擊破した。後には却つて寄せ手の方の兵糧が乏しくなり、遂には堪へかねて歸國する者も多くなつた。これに勵まされて、勤王の軍が諸處に相續いで興起した。播磨の豪族赤松則村は摩耶山に據り、土居通增、得能通綱、忽那重明、祝安親等は伊豫に義兵を擧げて、其の勢甚だ盛んであつた。

元弘三年閏二月、天皇は竊かに行宮を脫出し給ふて、伯耆に渡らせ給ひ、其の地の豪族名和長年一族の護衞の下に、船上山智積寺に行在所を遷し給ふた。次いで、千種忠顯は則村と協力して、長驅六波羅を攻めた。高時は六波羅の急を聞いて、急ぎ關東の將士を催して西上の途に上らせた。足利高氏も其の中に加つてゐたが、心を翻して官軍に屬し、五月七日拂曉、卒然として西山より內野に掩ひ至り、七隊の馬首を部署し、東天に高く嘶かせて、一擧六波羅を衝いた。



洛南にあつた官軍も亦、齊しく義旗の曉風に飜して躍進し、遂にこれを陷れ、京都を恢復した。當時、肥後の菊池武時は獨力九州探題を攻めて、不幸にして戰死を遂げた。

新田義貞も綸旨及び護良親王の令旨を奉じて、五月八日上州生品社頭に義兵を擧げ、勝に乘じて三道より鎌倉を攻め、二十二日遂に北條氏を滅した。

天皇は六波羅の陷落を聞し召し、船上山の行在所を發して還幸あらせられた。其の途上詔を以て光嚴院を退けられた。此の時はもはや千早の圍は解けて、賊軍が四散してゐたので、正成は兵を率ゐて車駕を兵庫に迎へ奉り、光榮ある御先導を仰せつけられた。

斯くして、所謂建武中興の業が成り、勳功のあつた公卿、武士の功を論じ、それ〴〵恩賞があつた。正成は殊勳第一ではあつたが、僅かに攝津、河內の國守に任ぜられるに過ぎなかつた。當時のやうな階級觀の嚴しい時代に於ては、門閥出身以外の者は常に惠まれることが少なかつた。高氏は門閥出身であつたため、此の度も恩賞第一に置かれ、特に天皇の諱をさへ一字賜つた。正成は斯る不公平な朝廷の處置に對しても、更に恨むところなく益〻忠勤を勵んだ。賞罰の不公平と共に、內奏、請託の弊害が頻りに起り、民衆は久しく重稅に苦しんでゐるにも拘ら

す、朝廷では新たに大内裏造營の費用をさへ課せられて、民心は益ゝ新政を離れて、もとの武家政治を慕ふに至つた。

建武二年七月、北條高時の子時行が信濃に兵を起して、急に鎌倉を攻め、所謂中先代の亂を起すに及び、尊氏は時行討伐を名として關東に下り、時行を破つて鎌倉に入つて自ら征夷大將軍と稱し、新田義貞を除く事に名を藉りて遂に謀叛するに至つた。尊氏は義貞の軍を箱根竹の下の一戰に破り、大兵を率ゐて、後を追ふて西上した。赤松則村もかねて恩賞に不滿を抱いてゐたので、翌延元元年正月尊氏と策應して京師に攻め上つた。官軍は守を失ひ、京都は兵亂の巷となり、天皇は神器を奉じて叡山に蒙塵し給ふた。その間に鎭守府將軍北畠顯家は義良親王を奉じて、尊氏の後を追うて上洛し、諸將は力を協せて尊氏の軍を糺河原等に破つて、京都を恢復した。此の時も正成は其の智謀を以て非常な戰功があつた。有名な楠木の泣男の話は此の戰の時である。尊氏兄弟は海路九州に奔つて菊池武敏を多々良濱に破り、勢に乘じて大軍を催して海陸兩道から並び進んで東上して來た。播磨白旗城を圍んでゐた義貞は、兵庫に退いて急を朝廷に奏した。朝廷は正成に命じて義貞を援けしめられた。正成の思慮ある軍略も、參議藤原清



忠等の反對に依つて却けられた。正成は死を期し、攝津の櫻井驛で嫡子正行にこま〳〵と教訓を遺して、鄕里河內に歸らせてから兵庫へ下つた。事が餘りに急であつたため、正成は義貞と連合防戰の作戰計畫を熟議する暇がなかつた。

和田岬に陣してゐた義貞の軍は、敗れて戰央ばにして退却したため、正成の軍は腹背に敵を受け、會下山下南方の平野に於て一大混戰を演じ、賊將直義を將に獲ようとしたが、藥師寺某のために阻まれて遂に果さなかつた。雲霞のやうな大軍に對し、僅々數百の手兵を以て血戰を試みた此の時の壯烈さは、全く驚歎すべきものがあつた。正成は士卒を叱咤し、「節に仗り、義に死し、國に報ずるは此の時だ」と聲を勵まして叫んだ。士卒は激越して獅子奮迅の勢を以て敵軍を縱橫に突破した。味方は漸次殘り少となつて、遂には僅かに十數騎となつてしまつた。正成は弟正季と共に、今はこれまでだと覺悟して、湊川のとある民家に這入つた。

正成座上に居つて舍弟の正季に向つて、抑ゝ最後の一念に依つて、善惡の生を引くと云へり。九界の間に、何れが御邊の願なると問ひければ、正季から〳〵と打笑つて、七生まで只人間に生れて、朝敵を滅さばやとこそ存候へと、申しければ、正成よにも快げなる氣色にて

罪業深き惡念なれども、我も個樣に思ふなり、いざさらば、同じく生を替へて此本懷を達せんと、契つて兄弟ともに刺違へて、同枕に伏せにけり。（太平記）

此の壯烈な最期には、敵も味方も感激しないものはなく、敵方の人のものした『梅松論』にすらも、「最後の振舞符合しければ、誠に賢才武略の勇士とは、かやうの者をや申すべきとて、敵も味方も惜まぬ人ぞなかりけり」と稱讃してゐる位である。曩に備後の鞆の津で楠氏襲來の風聲に恐慌した尊氏や、さては兵庫蓮池堤で危くも追ひ詰められた直義すら、猶ほ且つ其の死を愛惜するの情を禁ずることが出來なかつたのは、如何に大偉人の殉國の力が强かつたかは、よく想像せられるのである。



# 織田信長

應仁の兵亂以後、室町幕府の威權は全く地に墜ち、社會の秩序は根柢から破壞し盡された。世は所謂下剋上の勢で、形式や名分は、實力の前には哀れ無殘にも踏み躙られてしまつた。勝ち誇つた强者の脚下からは、敗殘者の傷ましい斷末魔の悲鳴が立ち昇る。斯くして純裸體的な權力思想が、社會の各階級の腦裏を支配するに至つた。

其の頃はまだ、分業が充分に行はれてゐない時代であつたから、農工商に從事してゐる者も時には刀槍を提げて屍山血河の間に出入し、少しく人に勝れた才能さへあれば、又死を恐れぬ冒險の志さへあれば、一國一城の主ともなり得る可能性はあつたのである。機會は到る處に轉がつてゐるのであるから、首尾よくこれを攫みさへすれば、功名富貴は必ずしも得難くはなかつた。この顯著な一例として、美濃の齋藤秀龍を擧げることが出來る。彼は素と山城の國は山崎の油賣の子であつた。京都へ出てからも、彼は孜々として家業を勵んでゐたが、如何も思は

しくない。そこで彼は一先づ田舍落ちをして、運試しをしようと考へ、父と妻とを伴ふて美濃へ來、遂に主家なる守護の土岐氏を亡ぼして一國を我が物とするに至つた。

無智と貪慾との塊であつた大地主——武力で民衆を脅迫して、出來るだけ搾取することが彼等の仕事の凡てであつた。此のやうな卑しい領主群の中に、珍らしくも神道主義の一豪族が豐饒な尾張平野の上に住んでゐた。それは卽ち織田氏で、代々斯波氏の守護代を勤めてゐた。織田氏の祖先は、以前越前で神官をしてゐたと傳へられてゐるだけに、一族の人々は敬神忠君の念が篤かつた。殊に彈正忠信秀は勤王の志深く、天文十二年二月皇居修繕の費用として四千貫を獻納して、當時式微の極に陷つてゐた朝廷に平素の微志を致したのであつた。それ等の日の大小名共は、如何して隣國を掠め、自己の所領を殖やすべきかに腐心してゐて、朝廷の事などを考へるものは極めて稀であつた。

朝廷では信秀の志を多として、女房奉書、古今集などを賜はつた。信秀は恩賜の品々を拜領して、「家門の面目これに過ぐるものは御座いません。首尾よく濃州が手に入りましたなら、また重ねて御修理を致します。」と誓つた。又彼が敬神の念に富んでゐたことは、伊勢の大神宮の



外宮を造營したことに依つても窺はれる。

この信秀の子が偉才信長であつた。彼は天文三年那古野の城中で生れ、功名を吉法師と呼んだ。十三歳で元服した彼は三郎信長と稱し、林佐渡守、平手中務丞、青山與三右衞門、內藤勝介等が傅役となつた。平手中務丞は非常に謹嚴な人で、趣味も解してゐたし、又立派な見識をも持つてゐたから、幼君の敎育にはひどく責任を感じて、全力を竭すことを吝まなかつた。けれどもその效果は容易に擧りさうにもなかつた。

少年時代の信長は、市民から「大うつけ」と呼ばれるほどの變り者であつた。街を通る時にも人目も憚らず大口を開けて柿や瓜をかぢり、又往來に立ちはだかりながら平氣で餅を頰張つてゐた。いつでも人に倚り懸り、または人の肩に縋らなければ歩かなかつた。かうした大うつけ者を傅育する責任を帶びた平手政秀は、夜も殆ど眠ることが出來ず、唯一人心を千々に碎くばかりであつた。十六七歳頃までは、よく馬に乘り廻した。風の朝も雨の夕も、彼の乘馬姿を見受けぬ日とてはなかつた。少し水が溫るむと、彼は河中に飛び込んで水練を盛に稽古した。

或日のことである。家士が竹槍で試合をしてゐるのを見て、「兎角鎗といふものは短うてはい

かん。」といつて、特に三間柄のものや、三間半のものを造らせてそれを用ひさせた。

弓術は市川大介に、鐵砲は橋本一巴に、兵法は平田三信を師として熱心に學んだ。

彼は又常に、「ゆかたびら」の袖を外し、半袴を穿き、腰には燧袋だの瓢簞だのをごた〳〵とぶら下げる癖があつた。髪は茶筌に結つて、紅糸萠黄糸で卷き立て、朱鞘の太刀を佩いて大道狹しと濶歩した。

輦乘の時や鷹野の時に、彼の變ちきりんな服裝やきよとんとした姿を眺めた市民達は、那古野城の運命に就いて悲觀せずにはゐられなかつた。その頃の尾張は、周圍を强敵に依つて包圍せられてゐる形であつた。背後には、海道一の强豪今川義元が虎視眈々として機を覗つてゐるし、前門には、老膾な齋藤道三が瓜牙を磨いてゐた。

平手政秀は心痛の餘り、齋藤道三と和睦をして、その女をば織田家に迎へたいとの旨を申込んだ。話はスラ〳〵と運んで、大うつけの信長にも愛らしい花嫁が出來た。天文十八年父信秀が死んで、萬松寺に燒香があつた時、信長は茶筌頭に袴も著けず、太刀脇差を佩き、佛前に出て抹香を掴んではパラ〳〵と投げつけた。それに反して弟の信行は折目正しく、肩衣に袴を穿



いて禮儀正しく燒香をすませたので、一座の人々の聲望は自然と大うつけ者から、その弟にと移つてしまつた。ところがそこに丁度居合せた筑紫の客侍が、「あれこそ誠の國を持つ人だ」といつたと語り傳へられてゐる。

父信秀の死時、信長は家督を嗣いで自ら上總介と稱し、日夜武藝の鍛錬に努めたが、少しも政治上のことは顧みなかつた。これが忠直な政秀にとつては、いつも心痛の種となつてゐた。政秀は屢〻諫言を上つて、百方力を盡したが、更に改まる色が見えなかつた。そこで政秀は、死を以て主家の萬全を圖るに如かずと考へて、悲壯にも遂に一通の諫言書を遺して自盡してしまつた。その諫言書には、五箇條の心得書が載つてゐる。五箇條とは、正義、無慾、明察、禮讓、大膽で、政秀の指導が如何に道德的であつたかがよく窺はれる。

流石の信長も、こゝに至つては大に慚愧せずにはゐられなかつた。彼は自責の念に犇々と鞭たれた。其の後、彼は行動を改めたばかりでなく、恩師の追善のために一寺を建立した。其の寺は政秀寺といつて、今も尙は名古屋の市中に殘つてゐる。

信長の天才は、恰も囊中に隱された錐が自ら頭脫するやうに、次第々々に民衆の認めるとこ

ゐとなつて來た。元來織田氏は數家に分れてゐたので、信長の家は割合に低い地位にあつたのである。それで、信秀以來の信望を以てしてすらも、自分の全族黨に號令して、尾州一圓を手に入れることは、かなり困難なやうに見えた。

信長には異母の兄弟が多かつた。だから、勢ひ同胞の間に於ても、醜い爭鬪が繰り返された。殊に我が國のやうに家長を重んずる家族制度の國では、家督相續の爭が屢々あつた。さらでだに權力本位の時代思潮は、人々の心を極度にまで荒ませてゐたのである。目から鼻へ拔けるほど怜悧な信長は、大うつけ者を裝ふて自己を晦ましして身の安全を計り、自己の完成に鋭意努めてゐたのであつた。

父祖以來多年の懸案であつた美濃經略の實現後は、武士の冥加には一度は京師に旌を樹て、遍く天下に號令して覇業を全うしたいといふ大きな功名心が、いつも彼の青春の夢を刺戟してゐた。信長はこんな時代に於ては、徒に逡巡する必要もなく、又自己を抑制しなければならぬ義理もないと考へた。因循姑息のうちに偷安を事とするのは、自ら自己の存在を否定するのも同樣である。退嬰主義は、此の當時に於ては死其の物を意味してゐた。彼は全我的努力を以て



自己の信念を斷行するのが、とりもなほさず光榮に向ふ一路であることを確信してゐた。

彼は苦心の結果、遂に同族の內紛を鎭定して、尾張一國を略ゞ完全に自己の支配下に置くことが出來た。四隣の强敵中、彼の最も憚るところは駿河の今川氏と美濃の齋藤氏とである。彼はその雄大なる西上の企圖を實行するには、先づ後顧の憂を絕ち、然る後、前途を沮む難關を突破しなければならなかつた。

五月雨降りしきる永祿三年五月十八日、鷲津、丸根の砦からは、每日櫛の齒を引くやうに注進が到着した。駿遠參三ケ國の大兵來襲!! 今川義元自ら陣頭に立つて、海道をひた押しに押して來た。信長は相も變らず、世間話をして笑ひ興じてゐた。軍評定などは、一向開かれさうにもなかつた。國內の不安は愈ゞ募るばかりであつた。周圍の宿將達は、悲歎の中に信長の狂愚を憐れむ風さへ見えて來た。

夜はしん〳〵と更け渡つた。信長はうつとりして能に見惚れてゐた。彼は立ち上つて『敦盛』を舞つた。優やかに舞つてゐる彼の姿は、如何にも藹たけてゐた。

「人間五十年、下天のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり。一度生を得て、滅せぬもののあるべ

きか」

と謡ひも異らぬに、彼は疊を蹴つて矢庭に馬背に飛び乘つた。吾に續けとばかり一聲高く叫んで鞭を揚げて熱田の社に電驅した。夜を籠めて祈願を凝らしながら、彼は將卒の驅けつけるのを待ち受けた。

明くれば十九日、ほの〴〵と白らむ頃、再び汗馬に鞭つて丹下、善照寺の砦に出た。急命を聞いて駈せつけた軍勢は僅に三千、今川勢の三萬五千の大軍に比べては物の數にも足らぬ小勢であつた。篠つく豪雨を冒して、田樂狹間にある敵の本營を急襲した信長のこの時の姿は、實に壯烈限りのないもので、洵に鬼神を欺く慨があつた。敵將義元の首級を擧げた信長は、意氣揚々として、歡呼の聲を浴びながら清洲の居城に凱旋した。後門の虎を一擧にして倒した彼は、愈〻美濃の經營に心を潜め、三河の松平元康（後に德川家康）と和して東方の敵に備へたのであつた。

齋藤家の內訌に乘じて、永祿八年八月兵を率ゐて不意に稻妻山を攻め、これを陷れてしまつた。こゝに於て父祖以來の懸案たる尾張の統一は既に成り、美濃も亦彼の版圖の內に入つた。



東方のことは、これを松平元康に一任したものの、信長は尙ほ腹背に勁敵を控へ、夜も枕を高うして眠ることが出來なかつた。美濃と接壤してゐる信州の地は、既に武田氏の所領に歸して居り、關ヶ原を過ぐれば、直ちに近江の淺井氏と境を接してゐた。然も二氏は中部地方の有力者で、これらと抗爭することは不利でもあり、また現在の彼にとつては不可能のことであつた。こゝに於て慧眼な信長は、一つの策略卽ちマキアベリイ式の外交政策を案出した。兩氏と婚を通じてこれを籠絡し、聯盟の交を結ぶことは、此の場合適當な方策であつたやうである。この妥協的な聯合は、信長自身としては、遠大な目的に到達するためには、洵に止むを得ないことであつたらう。多年の爭亂を戡定して、皇室の御稜威を興隆し、統制ある善政を施して、民衆を塗炭の苦患から救ひ出さうといふ彼の素志を達するため、一路京都を指して進軍するについての用意であつた。

その時、彼の名は遠く京都にも聞え、朝廷からは、畏くも立入宗繼を勅使として遣はされ、次の如き優渥なる綸旨を賜はつた。

今度國々屬二本意一由。武勇之長上。天道感應。古今無双之名將。彌可レ被レ乘レ勝之條。爲二勿論一。就中兩國御料所且被レ出二御目錄一之條。嚴重に被二申付一者。可レ爲二神妙一旨。綸命如レ此。悉レ之以レ狀。

永祿十年十一月九日　　右中辨晴豐

織田尾張守殿

（立入文書）

信長は勅諚を拜して、大いに感激し、「予は唯だ尾張一國の領主に過ぎないのに、かうした優渥な御諚を賜はり、日本全國平定の重任を下し給ふた。これからは禁裡樣の御威光で一刻も早く諸國の凶徒を退治して、叡慮を靜め奉りたい。」といつたと傳へられてゐる。

そこで先づ伊勢を從へ、近江に入つて六角氏を降した。翌年前將軍足利義輝の弟義昭が來て信長に賴んだので、信長は歡んで厚遇し、十月これを奉じて入京した。この時將軍義榮は既に薨じてゐたので、義昭は將軍に任ぜられた。これより三好、松永の徒を或は降し或は滅して近畿地方を平定した。彼は急に皇居を新築し奉らうと考へて、古制や舊儀やらを調べて三年の後



には、立派に竣工した。又御料を奉つて朝儀を再び興し、諸國に離散してゐた公卿も京に歸つて來たので、都下も稍ゝ昔に復した。彼は先づ伊勢の名族北畠氏を滅し、北に向つて越前の朝倉義景と近江の淺井長政との聯合軍を近江の姉川に擊破し、ついでこれと謀を通じてゐた比叡山の僧兵を懲らした。こゝに於て信長の威名が益ゝあがるやうになつたので、將軍義昭は自分の地位に不安を感じ、庇護を受けた恩義をも忘れて密かに信長を除かうと企てたが、天正元年陰謀が露れて却て信長に逐はれ、毛利氏をたよつて備後の鞆の津に遁れた。室町幕府はかくして果敢なくも全く滅んでしまつたのである。

この年信長は更に淺井、朝倉の二氏を亡し、又一向一揆と戰つて大阪を手中に收めた。これよりさき信長は近江の安土に宏大な居城を築いて根據をこゝに定めた。

長篠の戰後、武田氏の衰運に乘じて家康と共に大軍を催して甲斐に進擊し、遂にこれを天目山に討盡してしまつた。

信長はこゝで秀吉の中國征討を援けようと思つて、子信忠と共に天正十年五月手兵僅に數百を率ゐて入京し、本能寺に宿つた。信長に對してかねてから怨を懷いてゐた惟任日向守光秀は

「あめがした知る」は此の時ぞと、俄に攻め寄せた。信長は奮戰力鬪したが衆寡敵せず、遂に火を放つて自殺した。籠臣森蘭丸以下近侍の者もみな亂軍のうちに仆れた。時に年齒僅に四十九。海内一統の大業を起し、もはや大半は出來上つてゐたのに、斯く中途で非命の死を遂げたことは、實に惜しむべきことであつた。

光秀の叛逆の動機に就いては、普通には主從間の性格の相違に歸し、信長が峻嚴で殘忍であつたことが主なる要素となつてゐるといはれてゐる。併し、それよりも澎湃たる時代思潮――機會を掴むことにのみ焦慮してゐた當時の人々の鬪心が、光秀の心を強く刺戟したのが、より根本的なものではなからうかと私は考へる。（信長記等に據る）



# 豐臣秀吉

日吉丸は此の頃痛切に自分の將來といふことを考へ始めてゐた。父の木下彌右衞門の死後、彼は母に連れられて、同村の筑阿彌の許で養はれてゐたのである。筑阿彌はもと織田信秀の足輕を勤めてゐたが、或時の合戰で脚部に銃創を蒙つたため、奉公を續けることが出來なくなつたので、鄕里に引き込んでゐたのだ。筑阿彌は優しい人ではあつたが、弟や妹が生れてからは、兎角日吉丸は疎外されるやうな傾がないではなかつた。彼は毎日の仕事に倦怠を感じてゐた。小川で鯰や鮠を掬つたり、鮒を釣つてゐる自分自身が、情ないやう氣がしてならなかつた。十六にもなつて、まだ親の脛を齧ぢるのは意氣地のないことだと思つた。戰國時代の常として、チャンスさへ確り握れば立身出世はさまで困難ではないことも知つてゐた。彼はたうとう決心をした。一つ他國へ出て運試しをして見るのは、男子として最も痛快なことに違ひないと思つた。

そこで彼は、父が死んだ時遺し與へられた永樂錢壹貫文を資本として、何とか運命の開拓を

しようと考へ、此の錢を少し分け携へて清洲の町に出た。こゝで彼は、貧乏人が木綿布子を縫ふ時に用ひる大きな針を仕入れた。その針を道々賣つて、先づ鳴海へ行き、金に換へて食べ物を買ひ、或は草鞋などを買つて旅裝を調へた。それからはこんなやうにして、針を旅費としてあてどもない放浪の旅に上つた。宿りを重ねて、遂に遠州の遠松の町はづれ引馬川の邊にまで辿り着き、白い木綿の垢づいた着物を着て、そこらを彷徨してゐた。

此の頃、濱松の城主は飯尾豐前守といつて、今川氏の幕下の將であつた。丁度此の時、久能の城主松下嘉兵衛之綱といふ人が、飯尾豐前守を訪問するために濱松へやつて來た。往來端でうろついてゐる日吉丸の一風變つた容貌をちらつと見て、

「どうも異つた顏の奴ぢや、猿かと思へば人のやうであるし、人かと見れば猿によく似てゐる。何處の國から來た者か、又、名は何といふか。物共、聞いて參れ。」

と從者に命じた。

日吉丸は平氣な樣子で、

「私は尾張の國の者ですが、武家に奉公するのが望みで此處までやつて來たのです。私の名ですか。日吉丸と申します。」

と答へた。

嘉兵衛はその復命を聞いて、又問はせたのであつた。

「日吉丸とやら、そちは予に仕へる氣はないかのう。」

「有難う御座います。是非唯今からでもお願ひいたします。」

そこで簡單に主從の約束が結ばれ、嘉兵衛は日吉丸を供に加へて濱松城に這入つて一部始終を豐前守に物語つた。豐前守の家族、殊に幼い娘などは、日吉丸の顏を見て皆クス〳〵笑つた。家臣等一同の者も笑ひ興じて、暫しは笑ひ聲が止まなかつた。中に滑稽な奴がゐて、冗談に毬(いが)の附いた栗を拋り出した。日吉丸は、これは好物といはんばかりの顏をして、口で器用にそれを剝いてうまさうに喰べた。そのロもとといつたら、まるで猿公そつくりであつた。人々の笑聲は、又もやドッとばかりにどよめいた。

こんな風に、彼は頗る快活で機敏であつたから、忽ち四方八方に持て囃され、古い小袖だとか、或は絹や紬などの衣裳を惠んでくれる者があつた。湯に入れて袴などを著せると、其の風

采もなか〳〵清らかになつて、始の時とは似ても似つかぬ位になり、洵に愛すべく親しむべき天晴れ一個の好青年となつた。嘉兵衛は久能の城に歸つてから、初めは彼を草履取などと一緒に置いてゐたが、あまりよく間に合ふので、直ぐに引き上げて手許に使つて見ると、性質が頗る怜悧でおまけに物事が大層正確で、彼のすることなすこと凡てが氣に入つてしまつた。やがて納戸役を仰付けて、會計だとか物品出納等の責任ある地位にさへ登用した。さうすると元からゐた家來等が嫉んで、故意に物品を隱して彼を盜人だと讒言をさへするに至つた。併し主君の愛は變らなかつた。嘉兵衛は、日吉丸が遠國の者で全くの一本立ちで、傍輩の者から憎しみを受けてゐるのを憐んで、遂に事情を話して永の暇を賜ひ、永樂錢三十疋を與へて故郷へ歸つたがよからうと諭した。松下家に仕へてゐたのは約三年、彼は十八歳の年再び懐しい郷國尾張へ歸つた。

（附記）『太閤記』には、此の時松下嘉兵衛が胴丸の具足を買つて來いといつて、金を與へて尾張へ遣したところ、其の金を著服してたうとう還らず、それで身裝を調へて信長に仕へたとなつてゐるが、『秀吉公素生記』には、



『太閤生れ付堅く理智儀にして左様の心に非ず。又行衛もなき幼猿に嘉兵衛黄金五兩預くべき義に非ず。又具足を調へ來れと其世猥に言ふべき理にも非ず。猶信ぜず云々。』

とあるに據つた。

天文二十二年、信長は美濃の齋藤道三の女と結婚した。其の年日吉丸は濱松から清洲に歸り、小人頭の一若といふ男の家を訪ねた。一若は彼と同郷の中村の出身で、親の代からの知り合ひであつた。一若は日吉丸を見て吃驚りしてしまつた。

「お前さん、如何したんだ。此の三年といふものは、何處で如何してゐたのかい。お前さんが行衛知れずになつてから、お母さんの心配は一通りや二通りではなかつたぞ。毎日毎夜泣きの涙で暮らしてゐられたわ。さあ、早く家へ行つてお母さんに顔を見せて來な。」とせきたてるのであつた。

彼は久し振で故郷へ歸つて、母に不孝の罪を詫びた。母は彼の成人した姿を見て、口も利けない位に喜んだのであつた。

それから彼は一若を頼んで、織田家に仕へて先づ草履取となつた。雪の日、主君信長の草履

を懐中して温めたのは、世に知られてゐる話である。彼は誠實と機敏とを以て奉公したから、暫くの間にずん〳〵出世して小人頭にまで登つた。こゝで彼は名を藤吉郎と改めた。

信長が早朝鷹狩に出る時、いつも第一番に駈けつけて、「藤吉郎これにあり」と答へたのは彼であつた。又清洲の城壁の崩れたのを、割普請をして期日中に仕上げた有名な話などは、人口に膾炙してゐる逸話である。かういふやうにして、藤吉郎の信用は愈〻昂まり、信長の信任は日一日と加はつて來た。

信長が濃州堂の洞に出陣することとなつたので、彼は騎馬で從軍すべきよう命ぜられた。彼は馬を伯父の又右衛門に借りようとしたが、又右衛門は相手にしてはくれなかつた。そこでわざわざ海東郡まで行つて、姉聟の彌助の持つてゐる駄馬を借りて乘つた。鞍はあつても、鐙が半分しかないといふ始末。而もあるのは、朽ち壞れた左の金鐙であつた。右の鐙には繩を吊して代用とした。其の大將振のすさまじいことは、全く目に見えるやうである。貸主の彌助は無理とは萬々承知してはゐたが、かうなつては是非もなく、自ら馬丁となつて隨つた。

斯くして藤吉郎は、堂の洞で首尾よく坪内十郎右衛門といふ者を討ち取つて、先づ初陣の功



を立てた。城主坪内某は、本丸に追ひ詰められて勢窮し、罪を謝して降服することとなり、人質を請ふて來た。信長は彼を質に送るとて、

「これ、藤吉、そちの命は貰つたぞ。萬一の場合には、そち諸共に攻め殺すかも知れぬぞよ。」

「殿様、私の一命はとつくにお捧げしてあるのです。御用がありましたら、何時でも自由にして下さい。それで本望で御座ります。」

とはつきりと答へたのであつた。

「うむ、そちの心底見えたぞ。もうよい、一先づ陣屋へ歸つて休息するがよからう。」

彼の潔い決心に、信長は全く打たれてしまつた。初め信長は、藤吉郎諸共坪内を殺さうかとも思つたのであつたが、此の言葉を聞いて其の儘城兵の降服を許し、和議を講ずることとなつたから、藤吉郎はやがて無事に歸ることが出來た。彼は拔群の功を以て、新知七千石を美濃の國で與へられた。精々五貫か十貫の雜兵が、一躍して七千石の殿様となつた。だから家來や郎黨が急には間に合はない。年頃清洲で商賣をしてゐた伯母聟の七郎右衛門の許へは、彼が身分の低い時分から常に出入して親の如くに敬つてゐた間柄であつたから、さしづめ此の人を呼び

寄せて家老とし、自分の家祿の十分の一卽ち七百石を給した。後年杉原伯耆守といふのは此の人である。又馬を貸してくれた彌助には五百石を宛行ふた。この彌助は後には立身して淺野長政と稱するに至つた。

戰へは必ず捷ち、使を命ぜらるれば必ずよく果す。これは益〻發達開展する彼の天禀の奇才に依ることは勿論ではあるが、一は事毎に全力を擧げ用ひ、最善を盡す彼の處世主義の效果であつた。

かくして所謂鰻登りに累進して、元龜元年三十五歲の時、近江愛知川で三萬石を領し、天正三年には信長に請うて姓を羽柴と改め、筑前守に敍せられて江洲長濱城に居り、食封二十二石と稱せらるゝに至つた。これが彼の四十歲の時で、草履取として信長に仕へてからこゝに至るまで僅かに二十有三年であつた。

寸を得て寸を進み、尺を獲て尺を進む所謂秩序的進步の方策は、獨り家康が得意としてゐたところであるばかりでなく、秀吉も亦得意としたところである。彼は初めは主を擇ぶ遑がなく、先づ手近の信長に仕へたが、漸く厚い信任を受けるやうになつてからは、主君の性格を知悉してゐたから、細心の注意を拂つて身を全うする策をとつた。

天正七年信長の命を承けて中國征服の途に上り、播磨、備前を平げ、北に轉じて因幡、伯耆を洵へた。越えて十年更に進んで備中に入り、高松城を水攻にして毛利氏の大軍と相對した。時に信長は連りに四方を經略して、同年三月天目山の一戰に武田勝頼を亡ぼし、後顧の憂を絕つて、西、毛利氏を討たんとして夏五月京師に入つた。こゝに於て本能寺の變起つて局面は展開せられることとなつた。變報を手にした秀吉は、これを自分一人の胸に收めて、城主淸水長左衞門長治を切腹させて城を取り、毛利輝元と急に和を結んだ。その翌日軍を旋し、電驅して山城の山崎に奮戰して大いに光秀の軍を破り、忽ちにして之を滅ぼして亡君の修羅の妄執を晴らした。桔梗の旗印の京都に飜つてゐたのは僅かに十一日であつた。此の間の彼の活動には、一世の智略、一世の精力と一世の決斷とが集注せられてゐた。此の不眠不休の活動は、彼をして覇業を全うせしめた最大要素とはなつたのである。

織田氏の繼嗣問題から、かねて彼に快くなかつた織田氏の宿將柴田勝家、瀧川一益等は信長の遺子三七信孝を擁して兵を擧げた。天正十一年彼は先づ一益を伊勢に攻めた。この時勝家は

越前にゐたが、大軍を率ゐて近江に侵入して來たから、彼は急に軍を旋して大いにこれを賤嶽に破り、長驅して越前北ノ莊に於て遂に勝家を殲滅した。やがて信孝は自殺し、一益も降つた。これからは、織田氏の部將で秀吉に對抗するものは一人もゐなくなつた。

大阪は北に淀川を控へ、西は海に臨み、交通の便利は極めよい要害の地であつたから、翌年諸將に課して大阪城の築造に從事せしめた。此の大規模の土木工事が落成した時、彼は愉悅の情禁ずる能はず

生玉の城の石垣積みあげて
高いいさほは雲の上まで

と詠んだと傳へられてゐる。

その頃信雄と秀吉との間にも不和を生じ、信雄は德川家康の援を求めた。家康は快諾し、兵を率ゐて尾張の小牧に陣した。其の後長久手で、秀吉の別軍は家康のため大敗し、流石の秀吉もその機敏さに驚いて先づ信雄と和し、ついで家康を籠絡して自家の勢力範圍內に入れた。かくて海內一統の大業は自から秀吉の手に歸してしまつた。



其の後長曾我部元親を討つて四國を平げ、上杉景勝と和して北國を定めた。天正十五年大擧して九州に入つて島津義久を降し、同十八年二十五萬の大軍を催して小田原城を圍み、四箇月にして北條氏直を滅ぼしてしまつた。此の戰役中に奧羽の伊達政宗以下の諸侯も來り服したので、天下また彼に抗するものなく、應仁の亂以來百二十餘年にして始めて國內の統一は完成せられた。

この間に秀吉の官位はだん〳〵進み、天正十三年關白となり、ついで後陽成天の卽位せらるるや、太政大臣に任ぜられ、豐臣の姓を賜はつた。彼は聖恩の厚きに感泣し、大いに皇居を修め、仙洞御所を新築して供御を增し、公卿の祿を豐にして舊來の威儀典禮を興すことに努めた。聚樂第に天皇、上皇の臨幸を乞ひ奉り、信雄、家康以下の諸侯二十餘人に、皇室を尊び關白の命に背かぬことを誓はせた。

正親町上皇は御感のあまり、御歌を賜はつた。

よろづ代にまた八百よろづ重ねても

なほ限りなき時はこの時

秀吉は御製を拜し、喜に堪へずして御返歌を奉つた。

言の葉や濱の眞砂は盡くるとも
かぎりあらじな君がよはひは

かく秀吉は上皇室を尊び、下諸將を統べて海内の秩序を正すと共に、又頗る意を民政に用ひ檢地を斷行して田地の制度を整へ、稅法を定め、其の他交通、產業、社會、經濟の諸政策を確立して、眞の平和を齎らさうとした。

彼の政治理想は、平和を保障して生產力を增加し、富力の增進と快樂の享受とを追求することであつた。彼は表面から見れば、如何にも好戰的の人のやうに思はれてゐるが、それは單に目的に達する手段に過ぎなかつたのである。彼は生の享樂を、人類の共同目的としてゐたと思



はれる程に歡樂を大事にしてゐた。生產の增加も富力の增進も、要するにこの追求する快樂を確實に捉へるためであつた。聚樂第の行幸は公卿の歡喜、醍醐の花見は武家の快樂、北野の大茶の湯は官民合同の怡悅であつた。

彼は又早くから國威を海外に輝かさうとする志があつて、海内統一後は、更に明を伐たうと企て、先づ朝鮮に使を遣して嚮導を命じた。朝鮮王は明を恐れてこれに應じなかつたので、先づ朝鮮を討たうとし、上奏して養子秀次に關白職を讓り、自らは太閤と稱して出征の計畫をした。文祿元年海内の勢を擧げて、大いに諸軍を肥前の名護屋に集め、自ら往つて之を指揮した。宇喜多秀家を總帥とした陸軍は先づ釜山に上陸し、加藤淸正、小西行長を先鋒として深く內鮮に入り、海軍は沿海を攻め上つた。そのうちに小早川隆景、立花宗茂は碧蹄館に於て、李如松の率ゐる明の援軍の大部隊を迎へ擊つて大いに破つたりしたので、明、鮮は和を求めて來た。慶長元年條約交換に際し、彼等の僞計が暴露したので、秀吉は激怒してその國書を擲ち、卽時明使を追放して再び征討の令を發した。

かくて翌年正月小早川秀秋を總指揮官として、再び朝鮮へ進擊したが、今度は敵軍の要害が

整つてゐたので、我が軍も功名を立てる機會が少く、その活動は半島南部に限られてゐた。清正と淺野幸長とが蔚山に籠城して、遂に明の大軍を破つて、明兵の膽を寒からしめたのは此の時のことである。然るに翌年八月秀吉は病んで薨じた。年六十三であつた。遺命して在外の軍を引き上げさせた。前後七年に渉つた外征も、政治上何等得る所なくして玆に自然消滅に歸してしまつた。その辭世に

露とおち露と消えにし我が身かな
難波のことも夢のまた夢

彼は大陸に遠征を企てたばかりでなく、フィリピンや臺灣へも入貢を促した。臺灣は當時高山國と稱し、統一がなかつたから、返答がなかつた。西班牙の呂宋太守は驚いて使を遣したが、その頃彼は力を朝鮮の役に用ひてゐたので、たゞ書面の往復に歳月を送つてゐる中に彼の薨去となり、遂に立消えとなつてしまつたのであつた。



秀吉の大陸政策は、斯くの如く失敗に歸し、且つ豐臣氏の社稷維持の上にも一大打擊を蒙つたとはいへ、間接に國民の士氣を鼓舞し、少くとも軍事上に於ては外國に優越してゐるといふ自信を與へ、以て永久に國民の對外發展力を培養した功は少くない。又物質上に於ても、當時出征の諸將は多く彼の國の優秀な職人等を伴つて歸朝し、種々の工業を起したため、產業上に稗益するところ頗る顯著なものがあつた。陶磁器の如きは其の最たるもので、肥前の有田燒、薩摩の薩摩燒、出雲の樂山燒等は此の時の歸化鮮人に源を發し、若くは彼等に依つて革新改良せられ、我が陶磁器業に一新生面を開いた。又木製版も此の時に傳來し、所謂文祿版の古文孝經が出來たのである。其の他築城術等にも亦參考となつたところが少くなかつた。

世界の人々から、戰爭のための戰爭と見做されてゐる朝鮮役に於て、吾々は其の背後に美はしい赤十字思想の具體化、愛敵思想の現實化されたものを見る。愈ゞ出兵行動が開かれる前、秀吉は出征軍に對して共通の命令を發して、物資の徵發が有償的であらねばならぬこと、宿舍は有償と無償との二つに區別せねばならぬこと、及び民衆に對して亂暴狼藉を働き、又は追放を命ずるは非人道的であることなどを論じた。この命令は內國人に對して發せられたものであ

るけれども、それらの日に於ては誠に進歩したもので、これを近世の文明國民の戰時狀態に比較しても、決してひけをとらぬほどの人道的精神に充ち滿ちたものであつた。また出征軍の戰地に於て遵守すべき規律を二種發表した。一は敵國民衆に對するもの、他は味方に對するもので、共に出征軍の秋毫も犯さざる嚴肅さを想見せしむるに足るものがあつた。

小西行長が僧玄蘇を介して、朝鮮王に致さしめた書翰には、戰爭の目的やら、朝鮮に對する態度やらを說明して、日本は國が富み民が豐かであるから、土地を奪つたり、財物を掠めたりする必要はない。唯明國と戰ふのに路を借りるまでゞある。だから反抗して戰ふものは殺すが、降服するものは許すことにしてゐるといふ旨が記されてあつた。人命の喪失や物質の掠奪が、決して主要な目的ではなかつたことがこれでもわかる。其の他加藤清正が、會寧府で捕へた朝鮮の二王子に對する優遇等は、彼等が後日許されて京城に歸る時、その陪官と共に感謝狀まで差し出したのでも窺はれるではないか。軍律は非常に嚴しくて、それに違背した將卒に對する刑罰が頗る重かつた。遠征軍が公正な人道に背かぬ立派な態度で終始したことは、近世の赤十字思想の萠芽として注目に値することと思ふ。（太閤記・秀吉公素生記等に據る）



# 德川家康

岡崎の城主松平廣忠は、生れつき剛直な武士氣質の人であつた。彼は幼い嫡子の竹千代が、織田方の軍勢のために虜とされてからは、毎日氣がむしやくしやして堪らなかつた。武士の手前、刀にかけても吾子を取り戻したかつたが、人質となつてゐる竹千代の身の上を考へると、流石にその猛しい心も弛むのであつた。近頃來た便りに依つて、竹千代が名古屋の萬松寺に預けられてゐることを知つた。六つといへば、いたいけ盛りの年恰好であるのに、毎日敵地でみじめな生活を送つてゐるらしいことを想像すると、彼は淋しいやら、腹立たしいやら、全く譯の分らぬ悲痛な感じに包まれるのであつた。

一方竹千代は、天氣の好い日などは、終日戶外で遊び戲れるので、疲勞のため直ぐ熟睡してしまつて、夢などは少しも見なかつた。雨の降る氣持の惡い日には、きつと兩親や故鄕の夢を見るのであつた。竹千代は夢枕に立つた父母の姿を見て、シク〳〵泣き出したことも時折はあ

つた。

或日のことである。熱田の神主の某といふ者が、隣國から來てゐる幼い人質の憂愁を慰めようと思つて伺候した。其の男は黒鶫といふ、よくいろんな鳥の鳴き聲を眞似る小鳥を獻上した。近侍等は、これは珍らしいといつて、其の鳥に色々くだらない發音などを敎へて笑ひ興じてゐた。暫く默つてこれを見てゐた竹千代は靜に神主に話しかけた。

「これ〳〵、斯る珍らしい小鳥を奉つたのは奇特の至りぢや。そちの志は忝く思ふぞよ。併し、唯今は些か思ふところあるに依つて、これは一先づそちに返すことといたす。」

神主は暫く呆氣にとられてゐたが、竹千代の眞意をはかりかねて、止むを得ずその鳥を持つてスゴ〳〵と歸らねばならなかつた。

其の後、竹千代は近侍の者に向つて、

「お前達はあの鳥を何と思ふか。自分の聲が惡いから、他の鳥の音を眞似ねるとは、はてさて笑止な奴ぢや。彼奴自らの無能をおほふとするのであらう。凡そ諸の鳥は皆な自然の聲を以てゐるものぢや。されば『黄鳥は杜鵑の語を學ばず、又雲雀は鶴の聲を擬せず。』と古人も說かれてゐるわ。おのがじし本音を以て人に賞せられる人も、亦此の通り。生れつき巧者で萬事に能あるものは必ず遠大の器量のない者ぢや。斯く表面のみを飾つて眞の能なきものは、たとへ鳥獸とはいへ、大將の翫びには備ふまじきものぢや。」



と如何にも滔々に陳べ立てたので、これを開いた者は皆感心して、將來如何なる賢明な君とならせらるゝであらうと、只管其の前途を祝福したといふことである。後で聞いて見るに、黒鶫といふものは、果して本音のない鳥であつたといふことである。（故老諸談、道齋聞書に據る）

竹千代は其の後赦されて暫く鄕里に歸ることが出來たが、間もなく今度は駿州の今川氏の許へ人質として送られた。

駿府地方では、端午の節句に子供が兩方に分れて、石合戰をして遊ぶ習慣があつた。この地方の方言では、これを「いむぢうち」といふのである。それは石打といふ言葉の訛で、當時は戰國の代であるから、勢ひ殺伐な爭鬪的な風が、子供等の純な腦裏にも染み込んだ結果らしい。

竹千代は此の時十歲位であつた。彼は近侍の者の肩車に乘つて、阿部河原へ見物に出かけた。子供等はこゝをせんどと激しく戰つてゐた。小石が雨のやうに降る。痛さうに顰め面をしなが

ら石を投げ合つてゐる。一方の人數は凡そ三百人位で、他方は其の半分にも滿たない小勢であつた。見物の中には、大勢の方へ行つて聲援をする者が多かつた。處が竹千代は小人數の方へ行かうといひ出したので、家來の者が變に思つて、其の譯を尋ねた。

すると、彼は如何にもませたもののいひやうをして、その理由を說明した「それといふのは小勢であれば、自然一致團結することが容易で、皆一生懸命であるから敵を怖れる心もなく、又隊伍も洵によく整ふものだから、戰鬪力が充實して非常に强い。だから勝利は必ず小人數のものだ。」だが家來の者は、どうも合點が行かなかつたらしい。「若君はそんなことを仰しやいますが、私はどうも信じられません。」と飽くまでいひ張るのであつた。間もなく合戰は猛烈さを加へたが、大勢の方の側は、やがて一溜りもなく敗走し、その方へ見物に行つてゐた人々も、人なだれに押しすくめられて、皆命からゞ〳〵逃げ去つたと。（故老諸談、太平夜談抄に據る）

それから一兩年して後、卽ち天文二十年の正月元旦、彼は新春の御慶を申し上げるために、今川義元の御前に伺候した。今川氏の家臣達が大勢衣紋を正して控へてゐるところへ、彼は悠然として恐れる色もなく歩み出た。列席の人の中には、誰の子であらうかと怪しんで、囁き合



つてゐる者もあつた。中には知つたか振りして、岡崎の前の城主松平淸康の孫だといつた者があつたけれども、誰一人として信ずる者はなかつた。すると竹千代は御前を立ちツカ〳〵と椽先へ出て、平氣で放尿し始めた。一座の者は、餘りの傍若無人の振舞に茫然としてゐるばかりであつた。彼は泰然自若として、少しも羞ぢ怖れるやうな樣子もなく、悠々として小便を終へて座に復した。一同の者は流石は淸康の孫だと、皆驚歎したといふことである。（紀年錄に據る）

或日大祥寺といふ禪刹へ參詣に行つた竹千代は、その寺の境內に鷄が二十羽あまり飼はれてゐるのを見た。可愛い聲をあげながら、鳥は一心に餌をあさつてゐる。彼は不圖、何か心に浮んだと見えて、

「これ住職、あれなる鷄一羽、予に分けてはくれまいか。」

住職はニコ〳〵して、

「御氣に召したら皆でも差し上げませう。菜園を荒らして困つてゐるので御座りますが、何分雛つ子の時から育てて居りますので、人にやつて潰されてしまふのも可哀想だと思つて、その儘にしてゐる譯で御座ります。」

竹千代は思はず聲を立てて笑ひ出し、

「住職、そちは玉子を食べることを知らぬのか。」

といつた。そして後に、彼が駿河の國を領有した時、彼はその住職をば、殊勝な者だといつて其の寺へ寺領を寄附したといふことである。（君臣言行錄に據る）

鳥居伊賀守忠吉は清康、廣忠の二代に仕へ、家康が駿河にゐた時、今川義元の計らひで松平次郎右衛門重吉と共に岡崎に止まつて、賦税の事を司ることとなつた。それで悴の彦右衛門元忠を幼君の側に置いて、遊び相手としたのであつた。此の時竹千代は十歳で、彦右衛門は十三歳であつた。他國で淋しい日を送つてゐる竹千代は、好い友達が出來たので大層悦び、二人は朝から晩まで終日親しく語り合つたり、或は遊び戯れてゐた。

其の頃のことであつた。竹千代は、百舌鳥を飼ひ立てて鷹のやうに据えよと、彦右衛門に命じたのであつた。處が、据え方がよくないといつて竹千代はプン〳〵怒つて、たうとう彦右衛門を椽側から突き落してしまつた。御側に居合せた者共が、忠吉が忠誠を盡す餘り、自分の愛子まで御奉公させてゐるのを、こんな手荒な事をなさるとは、誠に情無いことだ、殊に大將たるべき人は、寛仁大度でなくてはならないと諫めた。忠吉は後に此の事を傳へ聞いて、普通一般の平凡な主君であつたら、假令御幼少でも、自分に御氣づかひなさるのであらうに、少しもそんな御懸念もなく、御心の儘に自由に私の悴をも處分なさるとは、其生れつきが濶く大きいことは、實に尊いことである。此の儘ずつと御成人なされば、將來如何なる名將、賢主となられるであらう。自分は齡既に傾いて、餘命はもはや幾何もない。だから御成人を見屆けることは困難である。彦右衛門、御前は末永く御仕へ申し上げて、諸事萬端決して疎かには思つてはいけないといつて、却つて自分の子の許へは嚴しく申し送つたといふことである。（鳥居家譜に據る）



因に慶長五年石田治部三成が、上杉黄門景勝と相謀つて、東西より兵を擧げて家康を挾擊しようとした際、鳥居彦右衛門元忠は伏見の城に留守居して居たが、毛利、浮田等の大軍を引き受けて孤城を固守し、勇戰奮鬪して遂に名譽ある最期を遂げた。

弘治二年正月、十五歳で駿河の國で元服し、元康と稱した。其の頃、織田信長が盛に鄕里の三河の諸城を侵掠するといふ報道があつたから、彼は今川義元に向つて、某は齡も已に十五に達して居るが、まだ本國にある祖先の墳墓を拜したことがない。願はくは暫く暇を賜つて故鄕

に歸り、亡き親の法會をも營み、且つ家臣の者共とも對面したいと乞ふたので、義元も彼の孝心深いのに感じ、即座に其の願を聽許した。彼は大層喜んで、急いで歸鄉し、父祖の追善供養などを盛大に執り行つた。それだから、家臣等も擧つて悅び、感激のために一同涙に暮れたのであつた。（岩淵夜話別集に據る）

岡崎に還つてからのことであつた。或日元康は鷹野に出かけた。丁度其の時は五月の初めで早苗をとる人が大勢苗代で立ち働いてゐた。水田の中からは、賑はしい田植歌が聞えて來、畦には子供等が騷ぎ廻つてゐた。御家人の近藤某は大勢の百姓の中に交つて早苗を挿してゐた。彼は主君の姿をちらと見たので、わざと泥で顏をよごして、わらないようにした。そして彼は伏し目勝に、脇目も振らず器用に苗を植ゑてゐた。元康は目敏く彼の姿を認めて、

「あれなる百姓體の男をこれへ呼べ。近藤によく似てゐるわ。」

と命じたのであつた。近藤は君命默し難く、顏を洗ひ、田の畔に掛けて置いた腰の物を差し、澁帷子の破れたのを著、繩を襷にかけておづ〳〵と這ひ出した樣は、目も當てられぬ位悲慘なものであつた。その時、



「近藤、そちは感心な男ぢやのう。予が所領甚だ乏しきにより、そち等を不便とは思ふものの、さて如何ともせんすべもなく、そち等聊の給分にては武備の嗜もならず、斯く耕作をせしむるとは、元康穴あらば入りたき心地いたすわ。唯今は如何に焦るとも、せんないことにより、何事も時勢と諦めてくりやれ。今のうちは、上も下も如何に佗しく、卑しいわざなりとも勤めて世を渡るのが肝要ぢや。憂患に生れて安樂に死すといふ諺もあることなれば、末長くこの心を忘まいぞ。まして農は國の寶なりと古人も說いてゐられるにより、聊も恥づるに及ばぬ。將來益〻努め勵んで貰ひたいものぢや。」

といつた元康の聲は、涙でうるんでゐた。近藤はいふまでもなく、扈從してゐた供の人々は、誰も彼も感涙に咽んだといふことである。（岩淵夜話別集に據る）

今川義元は西上の志を懷いて、駿遠參の諸國を經營すること二十年、今や大擧して宿敵を討ち、多年の素志を達しようとして、永祿元年國境の諸所方々に新しく砦を築いた。そして殊に要衝の地に當る大高の城には、鵜殿長助長持を置いて警備を嚴にしてゐた。織田の方でも、これに備へるため、丹下、善照寺、中島、鷲津及び丸根に兵を屯させて、防備おさ〳〵怠りがなかつ

た。其の外に寺部、擧母、廣瀬の三城をも築いて、大高への糧道を絶つたから、城中は糧食缺乏して日に日に危機に瀕して行つた。義元は如何にもして城中へ食糧を送り込まうと思つて、重臣達を集めて評議を凝したが、一同は毎日唯徒に溜息をするばかりで、誰一人として此の救援作業を引き受ける者がなかつた。時に元康は纔かに十八歳ではあつたが、甲斐々々しくも進んで引き受け、其の年の四月九日の夜半頃岡崎を進發したのであつた。松平左馬介親俊、酒井與四郎正親、石川與七郎數正等先鋒を承り、大高、丸根、鷲津等の諸城を越えて、遙に隔つた寺部の城へ攻擊を開始した。元康は自ら精兵八百ばかりに、輜重千二百駄を用意して、大高城の手前の方二十餘町ばかりの所に控へて機を窺つてゐた。先陣は既に寺部城に押し寄せ、木戸を破つて城に火を放ち、その光に乘じて颯つと引き上げ、また梅坪を襲擊して同樣に戰ひ、二三の丸まで亂入し、盛に銃を發射したので、殷々轟々たる響はあたりを震憾した。丸根、鷲津等の城兵は、大高を放棄して、皆寺部、梅坪の援兵に打つて出たので、諸城とも守兵が少くなつたと聞者が歸つて來て報告をしたから、大高を救ふは此の時だと、元康自ら陣頭に立つて、急いで兵を進め、難なく兵糧を城中に送り込むことが出來た。元康は策戰圖に當つたとばかりに、早



速兵を集中して悠々と引き上げた。鷲津、丸根の城兵等が歸つて來た頃には、敵兵の姿は見えず、一同欺計にかゝつたと非常に殘念がつた。（武邊聞書に據る）

永祿三年五月、今川義元は其の本營を信長のために奇襲せられ、終に田樂狹間の露と消えて、海道の形勢は逆轉するに至つた。慧眼な元康は、義元の嫡子氏眞が凡庸、到底事を共にするに足らざるを察し、大勢の推移を熟考して織田氏と結んだ。彼は信長に恩を賣つて、後顧の憂なからしめ、其の雄志を遂行せしむべく援助することを吝まなかつた。

元龜三年武田信玄と三方ケ原に戰つて敗れたが、機宜を誤ることなく、よく本來の面目を維持した。後信長と聯合して武田勝頼を長篠に破り、前年の雪辱をしたのであつた。

天正十年信長が不慮の死を遂げた際、彼は泉州堺に滯在中であつたが、光秀の魔手を纔かに免れて、漸く濱松に歸ることが出來た。

翌々年彼は信長の遺子信雄のために義兵を擧げ、秀吉と小牧に對戰して、遂に長久手に於て秀吉の別働隊なる池田勝入齋、森武藏守等の一軍を殲滅し、對等の禮を以て秀吉と和を講じ、將來の提携を約した。

太閤秀吉が薨じてからは、石田三成等の文治派と福島正則一派の武斷派との軋轢抗爭が益〻甚だしくなつた。溫厚の長者前田利家の在世中は、よく禍亂を未然に防ぐことが出來たが、慶長四年加賀大納言の病んで薨ずるに及び、家康の威望は自ら群雄を壓して隆々たるものがあつた。こゝに至つて遂に骰子は投げられた。上杉景勝の名參謀たる直江山城守兼續と謀し合せた石田三成は、幼主秀頼の名に依つて諸侯を促して家康を伐たんとした。同年九月十五日の關ヶ原の決戰は、誠に家康の運命の定まるところであり、且つ天下分け目の激戰であつた。偉大な政治的手腕の所有者たる彼は、今や運命の寵兒となり得た。熟柿は終に口中に落ちた。天下の事凡て、彼が意の儘となることとなつた。唯殘るは、豐家の遺薛のみである。

慶長八年征夷大將軍を拜し、右大臣に任ぜられ、源氏の長者、淳和、奬學兩院の別當を兼ね、且つ牛車參內、隨身兵仗を聽さるゝに至つた。彼の多年の宿志はこゝに達成せられた。時に齡六十二歲であつた。江戸幕府は、實に此の時創められたのである。後彼は將軍職を嫡子秀忠に讓り、駿府に隱退して閑雲野鶴を友とせるものの如くであつた。併し彼、大御所の胸裡には、大阪掃滅の祕策が靜に運らされてゐたのである。豐太閤の遺子秀頼は當時攝河泉の三國を領す



る一諸侯に過ぎない程、實力に於て貧弱であつた。その上、德川氏に對する政策に一定の主義なく、方針なく、徒に偸安姑息を事として、時代の潮に押し流さるゝ狀態にあつた。機を見るに敏なる家康は、慶長、元和の冬夏兩度の陣で、完全に豐臣家に止めを刺してしまつた。こゝに於て日本六十餘州如何なる邊土と雖も、德川氏の節度を受けねばならないようになつた。

幕府創設の初めに方つて、彼が最も苦心したのは、諸侯の配置であつた。三百諸侯を親藩、譜代、外樣の三種に分つて、互に相牽制せしめて、其の勢力均衡の上に立つて群雄を統御することに努めた。又公家法度、武家法度等を制定して封建制度の基礎を固めたのであつた。彼の帷幄に參じた者に、本多政信及び政純、僧天海等の智謀家がゐた。彼はまた文化事業にも大いに留意し、藤原惺窩や林羅山を用ひて文敎の奬勵に腐心したから、これより以後次第に學術の興隆を見るに至つた。

重荷を負ひながら一生を耐へ忍んだ家康は、豐家滅亡の翌年卽ち元和二年四月、七十五歲の高齡を以て駿府で薨じた。

# 中江藤樹

與右衛門は十一歳にしては、餘程ませた方であつた。『天子より以て庶人に至るまで、一に是れ皆身を修むるを以て本と爲す。』と、二三度繰り返して朗讀してゐた彼は、何か知らせき立てられるやうな、切羽詰つた衝動に驅られてゐた。遊び盛りの少年に似氣なく、毎日一人奥座敷に籠つて青表紙の書物を讀んでゐるうちに、彼は知らず識らず、所謂道とか德とかいふやうなことを考へさせられてゐたのである。近頃讀んでゐる大學は、どの章句を見ても、實踐的な示唆に富んでゐるやうに感ぜられ、殊に今しがた誦した一節は、最も端的に道の實行方法を述べてゐるので、彼はこゝで始めて、暗闇の中に光明を見出したやうな氣がしてならなかつた。彼は道德的感激に身を震はせながら、聖人の說いた道のために一生を捧げようと、此の時堅く心に決したのであつた。

彼は不幸にも、幼い時に父を失つたので、伊豫の大洲侯なる加藤家に仕へてゐた祖父の手許



に引き取られてゐた。彼の母は、故郷を離れ、海を渡つて、他國に移ることを好まなかつたので、夫や先祖の墳墓を守つて近江の高島郡に一人淋しく暮らしてゐた。

彼の祖父は、一藩に並びなき博學の人であつた。だから彼は物心つき初める頃から、漢籍の素讀を日課として學んでゐたのであつた。深い慈愛の念を以て孫の教養に努めてゐた祖父も、彼が十六歳の春を迎へた時、假初の患ひがもとゝなつて、遂に歸らぬ旅路に赴いたので、彼は嚴しい現世の荒波の中につき出されることゝなつた。弱年ではあつたが、學識の點に於ては、もはや既に相當に認められてゐたので、彼は此の年、祖父の後を襲ふて、君侯に經書を講ずることを命ぜられ、藩の教育のため日夜專心努力し、身を修めることが、即ち聖賢の道に入る第一歩であることを熱心に說き、益々自ら修養に努めて倦むところを知らなかつた。其後、彼は藤樹と號するやうになつた。

或夜彼は懸命になつて、明日藩主に進講すべき書物の下調べをしてゐた。いつの間にか、彼は疲勞のために、机の上に俯伏しになつて、ウトウトとしてゐた。突然、彼は彈じかれたやうに飛び起きた。鄕里に一人淋しく、彼の成人を待ち侘びてゐる母の姿が、假寢の夢の中に立つ

たのを見たと思つた。彼は、自責の念に苛まれて、胸が熱くなるのを覺えた。先年、祖父の跡を繼いだ時、任官の報告旁〻十幾年振で江州へ歸省したのであつた。そして歸る際、母に大洲へ一緒に來て下さるやう懇願したことが今マザ〳〵と思ひ出された。母はあの時、住み慣れた故郷を離れるのは、死其物と同じであるといつて泣いて、彼の任地へ來ることを如何しても承諾して下さらなかつたのが、寧ろ怨めしいやうな氣がした。

『木靜まらんと欲すれど、風止まず、子養はんと欲すれど、親在ささず。』（孔子家語）

彼は、二十年の今日迄の自分の態度に對して、空恐ろしさを感ぜずにはゐられなかつた。聖賢の道は、要するに方便に過ぎなかつたのだ。俸祿を食む一の手段に利用したに過ぎない。理論と行爲とを引き離して、別々に取扱つてゐたこれ迄の態度——それについては一種の辯解もないではなかつた。歸省以來數十度、便りのある毎に書くことを怠らなかつた彼の至誠に對する母の無理解が、今日まで彼を引き止めてゐたのであると强ひて考へようとしてゐた。しかし、それは我意だ。利己主義だ。自分の心の弱さを胡麻化さうとする破廉恥極まる辯解だ。彼は穴あらば這入りたいやうな心の激動を感じた。



其の夜はまんぢりともせず、夜の明けるのも待たず早登城をした彼は、繰り返し〳〵彼の衷情を訴へた。藤樹の才幹を愛してゐた大洲侯は、彼が歸郷後再び歸らないかも知れないと思つてか、或は又他家に仕へるであらうことを虞れてか、如何しても、彼の切なる願を聽き屆けては呉れなかつた。深く心に決するところのあつた彼は、其の日下城するや否や、家財道具を賣り拂つてしまつた。其の賣上金數十兩で諸所方々の負債を綺麗に拂ひ、又其の殘りの金額で米を買ひ込んで、俵のまゝ家の中に積み上げた。それは、今年分の俸祿を藩侯へ返す彼の几帳面な性格の現れであつたのである。彼は、二君に仕へないことを固く神明に誓つてから、其の夜、闇に紛れて城下を立ち出でて、遂に湖北の母の許を指して旅立つた。

藤井懶齋が『本朝孝子傳』に此の事を書いて、次のやうな贊を加へてゐる。

淡海吹起。陸王儒風。豈翅善身。誨人有忠。
爲母顯祿。旋鄉色愉。于嗟篤孝。性平學平。

江州高島郡の片田舍に歸つてからは、老母に對しては至孝、鄕黨に向つては常に眞の道を說いて、彼は更に富貴榮達を求めようとはしなかつた。彼は一介の村夫子として絕大至高の愉悅を感じてゐたのであつた。

其の後、或る暗い夜のことであつた。藤樹は、外出先で思はずも時を過したので、家路を一人急いでゐた。途すがら、彼は人里離れて淋しい山中の小徑を通らねばならなかつた。熊笹が小徑の兩側を埋め、杉の木林が一面に鬱蒼としてたちこんでゐた。日中でさへ、日の光が微かにしか洩れず、狼がいつぞや通りかゝつた近村の子供を害したとか、或は追剝が先年旅人を襲つて所持品をすつかり取り上げた上、斬り殺して谷間へ蹴落したとかいふ噂のある、寔に物騷な場所であつた。

藤樹は、自分の奉じてゐる陽明學の祖、王守仁先生のことを考へながら、提燈を片手に探り歩きをしてゐた。陽明先生は學者として偉大な人物であつたばかりでなく、又將軍としても、當時並びなき手腕を有し、文武兼ね備へた天晴れの名將であつたことなどを想ひ出してゐた。突如、怪しい物音と共た、熊笹を押しわけて數人の荒くれ男が飛び出して來た。



彼等は互に目くばせしながら、刀の柄に手をかけながらヂリ〳〵と詰め寄つて來た。藤樹は直覺的に、彼等の何者であるかを覺つた。彼の顏には一時、暗い影が漂つてゐたやうであつたが、直ぐ落ちついたいつもの態度に變つてゐた。

「やい、さんぴん、酒代を置いて行け。」

と頭とも覺しい、頰髭の長い獰猛な奴が喚き立てながら、刀の鯉口を寬げた。藤樹は無言の儘靜に懷中から財布を取り出した。財布は素早く引つたくられた。

頭が何か一寸合圖したと思ふ間に、賊は一齊に刀の鞘を拂つた。

「これつぱちぢや、商賣にやならねえよ。こちとらは一人ぢやねえんだ。さあ、裸になつて失せやがれ。」

「刀も何もかも置いて行きな。四の五のぬかしや、お陀佛さまだぞ。」

賊どもは益〻猛り立てゝ、今にも前後左右から一時に切り込みさうな有樣であつた。

「騷ぐな、姑く待て。貴樣等にくれていゝものか、如何か思案してからぢや。」

藤樹は目を瞑つて、ヂツと腕組をした儘、暫くの間は身動きもしなかつた。其の沈着な態度

や重々して言葉には、何となく尊いものが潜んでゐるやうに思はれた。

やがて、兩眼を見開いた彼は、犯し難い決意の色を顏に浮べながら、

「これや者共、武士たるものは、さう輕々しく何もかもくれてやる譯には行かぬわ。」

と語尾に力を入れて、一刀の柄に手をかけながら身構へた藤樹の姿には、勇猛果斷の氣が充ち滿ちて、以前とはまるで別人のやうに見えた。

「何をいつてやがるんだい。野郎、疊んぢまへ。」

一同罵りながら賊は足場を踏みしめて拔身を構へた。

藤樹は落ちつき拂つて、靜に叫んだ。

「武士たるものは、勝負を決する前に先づ名乘るが法ぢやわ。江州は高島郡の住人中江與右衞門とはわがことぢや。往來を劫す鼠賊ども、いでや、天に代つて成敗いたしてくれる。」

明晃々たる業物をギラリと拔き放ち、中段に構へた彼の姿には、實に古武士の如き俤があつた。中江與右衞門と聞いて、賊は矢庭に、一同刀を投げ出し、蛙のやうに地面につくばつてしまつた。



「先生、中江先生、何卒勘辨なすつておくんなせい。知らぬこととはいひながら、近江聖人の先生を……あゝ何といふ大それた、飛んでもないことをしでかしやした。先程からの無理無體、何卒お許しなすつておくんなせい。在所では三つ兒さへも敬ひ奉つてゐる先生樣を。」

賊は涙聲になつて、其の語尾がかすれてしまつた。

「お互に人間である以上、如何なる人も何時、如何なる過ちをしでかすかわからぬものぢや。孔夫子も『過ちては改むるに憚るところ勿れ』と敎へて下された。こゝぢや。わかつたかのう。」

「ぢや、先生、惡事の數々を盡してゐるわつちどもでも、改心すれや眞人間になれますんでせうか。」

「如何にも、その通りぢや。前非を悔いてこれから正業に勵んだならば、昔の罪は一切消え果ててしまひ、淸淨潔白な人間になれるのぢや。」

「あゝ有難てい。おい兄弟、聞いたか。われ〳〵みたいな惡人でも、心を入れ代へて堅氣な商賣につけば、並の人と同じことになれるとな。」

「兄哥、お前のいふ通りだ。今からは惡事に一切緣を絕つて、もとの商賣に精出さうぢやねえ

か、兄弟。」

彼等は互に顏見合せながら、感謝の涙にかき暮れてゐた。藤樹は隱かに言葉を挾んだ。

「一體、何事でも、正しいことを知りながら、これを行はぬのが一番惡いことぢや。お前方も、將來よつく氣をつけて、誠の道を踏み外さぬやうくれ〳〵も賴むぞ。心に迷ひの起つた、何時でもわしの家へ訪ねて來てくれ、決して惡いやうには取計らはぬぞよ。今後とも、身體を大切にして、折角商賣に勵んでくれい。」

藤樹の情理を盡した言葉に、彼等山賊どもは只管感激して、改心を誓つて遂に正業に復し、良民として皆一生を平和に送つたといふ。（先哲叢談に據る）

野に在つて淸貧に甘んじ、現世の榮譽を顧みず、唯只鄕黨のために聖敎を講じて知行一致を唱道し、母に事へては至孝、近江聖人の名一世に高かつたのも決して偶然ではなかつたのである。

備前侯池田新太郎光政に仕へて碩學の名海內に高かつた熊澤蕃山は、實に藤樹先生の門に學んだ人で、先生の學的理想を實際政治に施した人である。



# 德川光圀

水戸家の附家老中山備前守信吉は、或る重要な用件を帶びて、態々江戸へ出府し將軍家に御目通を乞ふた。その用件は水戸家にとつては、最も重大な問題——藩主賴房卿の繼嗣撰定に就いてであつた。賴房卿は子息が大勢あつたので、世繼の決定が誠に困難であつた。將軍家光は、萬事をこの老練な忠誠一徹の老臣に任せたのであつた。信吉は上意を蒙つて水府へ歸つた。信吉はかね〳〵聰明な三番目の長丸君に目をつけてゐた。長丸君は仔細があつて、藩士三木仁兵衛の家に生れ、寛永九年五歲の時、始めて城中へ引き取られたのであつた。

信吉が伺候すると、今年六歲になつたばかりの長丸君は、

「爺や、よく來たね。變ちきなものを着て。」

と活潑にいひながら、いきなり備前守の熨斗目を取つてしまつた。信吉は若君の亂暴なのに、些か當てがはづれたやうに思つた。御前を退つて自邸に歸つた信吉は、間もなく、長丸君の侍

臣望月庄左衞門の訪問を受けた。使者の口上は、

「此度下向大儀に思召され候。又此の石は御祕藏の品にて、常に御身を放たず御所持の物には候へども、備前守儀は格別の事と思召され候間、下し置かれ候由仰せられて、御懷中より小石、白赤二つ取り出させられ、庄左衞門へ御渡し遊ばされ候につき御拜領な下され。」

といふのであつた。備守前は感涙に咽びながら、翌日御禮言上に登城した。長丸君はいと應揚に、

「備前守、下向大儀に思ふぞよ。」

といつて、やがてする〳〵と信吉の膝下へ立ち寄つて、懷し氣にしげ〳〵と顏を穴の開くほど見詰めた。信吉は長丸君の先日來の態度を見て、末賴もしく感じ、江戸に上つてその旨復命したから、間もなく世嗣に定められ、翌寛永十一年始めて將軍に謁した。家光公の手づから文昌堂の靑銅製の像を賜はつて、大に面目を施した。（玄桐筆記に據る）

長丸君が七歳の時のことであつた。父賴房卿は彼の膽力を試さうと思つて、小石川の邸內の後樂園の側ら、櫻馬場といふ所に手討ちにした者を其の儘にして置いて、夜になつて其の首を



持つて來るよう幼い長丸君に命じた。其の櫻の馬場といふのは、御殿の西の方に當つてゐて、四町ばかり離れたところである。そこへ行くまでの道といふのは、誠に物騷なところで、木立が繁つてゐる上に、水が流れてゐて、晝でも女子供などは怖がつてなか〳〵寄りつかぬ場所であつた。

御前に侍つてゐる老女を始めとして、奥女中一同は此の話を聞いて、ブル〳〵震へながら、長丸君の樣子を窺つて、手に汗を握つてゐた。ところが長丸君は一同平氣な樣子で、父君に會釋して靜に座を立つた。すると賴房卿は、これを差して行くがよからうと、脇指を取つて長丸君にお授けになつた。

一禮して、脇指を素早く腰に佩いた長丸君は、唯一人御殿を立ち出たのであつた。四邊は靜まり返つて、氣味の惡いほど靜寂である。月のない此の夜の暗さは、全くのところ鼻をつまされてもわからない位である。地面に輕く擦れる草履の音が、微かに彼方へ消えて行く。道々手探りに歩いて、どうにか櫻の馬場に着くことが出來た。併しいくら探しても、なか〳〵尋ねる物が探し當てられなかつた。併し、腥い吐氣を催しさうな臭だけが鼻について仕方がなかつた。

あちこちを足先で探し歩きをしてゐると、突然ヌル〳〵した液體の中へ踏み込んでしまつた。愈〻こゝだなと思つた若君は、腰を屈めてそこらを探した。生首の口に手が當つた時は、流石にゾーツと背中に寒氣が通つた。併し、父君の言葉を思ひ出した若君は、キツとなつてその生首を持ち上げようとしたが、重たくて〳〵とても手に合ひさうもなかつた。それで、若君は髻を確く摑んで、引きずりながら歩いたが、重いので途中で二三ケ所休んでから御殿へ歸つた。

父君の御喜びは非常なもので、褒美として、その脇指を下されたのであつた。（桃源遺事に據る）

九歳の時、家光公の命に依つて江戸城で元服をすることとなり、將軍の諱を一字賜はつて光圀と稱し、從四位下左衛門督に敍任せられたのであつた。

父君は豫てより、若君が水泳がうまいといふことを、臣下の者から聞いてゐられたので、一度試してみようと思つてゐられた。若君十二歳の夏のことである。淺草川（隅田川）へ連れられて來た若君は、

「阿長、どうぢや、この川を泳ぎ越せるかのう？」



と父君から尋ねられた。

「父上、これしきものは、泳げないことは御座いますまい。兎に角、やつて見ませう。」

と長丸君は答へて意氣昂然。

「ぢや、泳いで見よ。父も共に行くわ。」

供の者の驚駭は一通りではなかつた。

「殿、勿體ないことで御座りまする。萬一のことが御座りましたなら、何といたしませう。此の議ばかりは、何卒お止り下さるやう、切にお願ひ申上げ奉る。」

と供頭を初め一同の者が蒼くなつて諫めたが、賴房卿は如何してもお聞き入れにならない。

「何も案ずることはないわ。わが子だもの、これしきの川を泳げないことはない筈ぢや。萬一溺れ死ぬるやうなことがあつても苦しうないわ。そのやうな無器用な者は、生きてゐても詮ないことぢやて。」

「左樣には御座りますれど、何分大切な御身分故。」

「えゝ、くどいわ。いふな者共。阿長、さあ早く這入れ。」

水煙を立てゝ大川へ飛び込んだ大小二人の姿を見た家臣達の心配は、益ゝ募るばかりであつた。

其の年は飢饉年であつたので、餓死した者の屍體が川上からボカ〳〵と幾つも流れて來た。身體にそれが突き當るものだから、推しのけると浪に搖られ搖られて又もや流れ寄つて、幾度となく突き當るのであつた。冷たくて而も臭くて穢ないといつたら、全く譬へやうがない位であつた。あんまりうるさいので、仕方なしにその死骸の下を潜つては泳ぎを續けるのであつた。川の半ば以上も泳ぎ越した時には、若君は疲勞のため如何にも苦しさうであつた。父君は水泳の達人であつたから、力をつけるため立泳をして腰から上を出し、

「阿長、もはや川は淺いぞ。これ見よ、我がせいが立つほどぢや。」

といつて後ろ退りに泳いで導かれた。漸くのことで岸へは着いたものの、若君は如何しても一人で上ることが出來なかつた。疲勞のため全身は綿の如く疲れてゐた。父君はその下帶の四結の所を持つて、小舟の中へドウツとばかりに投げ入れた。困憊のため正體もなく舟の中に打伏して、暫くは聲も立てることが出來なかつた。



父君の御感は洵に素晴らしいものであつた。

「これ、阿長、今日のそちの行は又格別ぢや。でかした〳〵。褒美としてそちに小鍛冶宗近の脇指をとらせるぞ。」

餘りの嬉しさに、若君は草臥をも打忘れて飛び起きて有難く頂戴した。此の頃の若君の惡戯が餘りに烈しかつたので、脇指は取り上げられてゐたので、今この嬉しさのために、無我無中になつて踊り上つたといふことである。（玄桐筆記に據る）

此の頃には、もはや大分歌などを習つてゐられたので、或る雪の朝、

降る雪がおしろいならば手にためて
おかうが顏にぬりたくぞある

と卽吟された。

光圀卿は青年時代素行が修まらないので、惡評が藩の內外に聞えてゐた。一人で夜中に外出

せられることが屢〻あつた。娼家の故實などを書いた書物類を澤山所藏してゐられたばかりでなく、三味線、淨瑠璃、さては謠曲、能、茶の湯などに深く興味を感じ、熱心に稽古を勵まれた。又茶屋酒の味をも知つてゐられるので、侍臣等は唯徒に氣を揉むばかりであつた。

能には殊に堪能であつた。それで自然能役者を近づけられることが屢〻あつた。老臣達にとつては、こんなことが洵に不名譽なことに思れてならなかつた。それでも、卿は一向平氣であつた。能役者連は伺候する毎に、難問を發せられるので、いつも卿の造詣の深いのには彼等も敬服せずにはゐられなかつた。

こんな工合に、卿は副將軍の嗣子としては餘りに平民的であつた。儀禮一點張の窮屈な形式の殼を脱して、本當に人生の趣を探らうとせられたところに、卿のやさしい一面がよく窺はれてゐるではないか。後年名君の名が天下に高かつたのも決して偶然ではないのである。

傅役の小野角右衞門は、これを非常に心配して、自分の責任のやうに感じ、毎日胸を痛めてゐたが、たうとう一通の諫言書を上つた。それには大體次のやうなことが書かれてあつた。

「若君の人に對する禮儀、恰も歌舞伎者の如くにて、水戸の世子とも見え申さず候。殊に好みて



三味線を彈かせらるゝこと等、誠に身分不相應のことと存ぜられ候。其の不行跡につきては、世上兎角の噂あれば、身を愼み、御兩親の御教訓に從ひ、御改悛あつて御孝養を盡さるべきは勿論のことに候。先般御鷹野の時、天鵞絨の襟をかけたる華美の服裝をせらるゝなど、權現樣の御孫にて渡らせらるゝ貴き身にて、草履取小者の如きいやしき冒似は寔に然るべからざることに御座候。又小身の者と御話せらるゝ由世評これあり、且つ常に諸弟其の他小童に對して、かけまはりの御亂行もあり、或は好色猥褻の談ありとのこと、まことに嘆かはしきことに候。若しこれ等のことども上聞に達し候はゞ、御身分にも關はるべきは必定のことに御座候。今後は宜しく言行を愼み、以て衆の敬重を受けらるゝやう務めらるゝこと肝要に候。」

これからは、全く生れ變つて別人のやうになり、行狀がすつかり改まつてしまつたと傳へられてゐる。（西山遺聞に據る）

二十七歳の時、卿は故關白左大臣近衞信尋公の姫君尋子を簾中として迎へた。夫人は洵にしとやかな溫良な方で、攝籙の家に生れた人だけに國文に造詣が深く、又和歌や漢詩にも精通してゐられた。伉儷相和して水府城内には常に和氣が充ち滿ちてゐた。ところが不幸にも、夫人

は輿入後僅かに四年で歸らぬ旅路に立たれたので、卿の悲歎は見るも傷ましく、これからはずつと獨身生活を續けられたのであつた。

賴房卿の薨ぜらるゝや、家督を繼ぎ、兄君(賴重)に再三懇請して其の子松千代(綱方)を養つて嗣子とせられた。然るに松千代君は夭折せられたので、今度は更に其の弟の綱條を貰ひ受けて嗣子となされた。このやうに兄弟に對して深く義理立をせられたのは、若い時史記の伯夷傳を讀んでから、一層痛切に感ぜられたのであるといはれてゐる。

藩主となつてからは、鋭意舊來の弊風を改め、儉約を行ひ、或は社寺を整理し、殖產興業を計つて、善政を領內に布くことに大いに腐心し、又社會事業をも企て、棄兒などを養育する設備を設けて國利民福を增進することに力を盡された。其の上、遠大な志を有してゐられたので、人を遣して蝦夷の邊境を探險せしめられたことも特筆に値することである。

當時、「犬將軍」綱吉は、柳澤吉保を寵用して、幕政は漸く紊れようとしてゐた。卿は常に皇室の式微を慨いて、幕府をして大政を奉還せしめる志があつたことは疑のないことであつた。併し聰明な卿は、容易に事の行はれ難いことを察して、隱忍自重して遂に外部に現はさなかつ



たが、藩內では主君が宗家に對して或る種の陰謀を企てゝゐられるといふ風說をさへ唱へるものがあつた。それで幕府の卿を嫌忌することは非常なもので、双方の間は動もすれば疏通を缺いて、幕府に對しては宛然一敵國の如き觀があつた。

元祿五年の六月、家臣佐々介三郎宗淳を湊川に遣して、河內、攝津及び和泉の三國の石を以て碑を建て、石を疊み垣を造つて、碑面には、『嗚呼忠臣楠子之墓』と自ら題せられた。

又、明の遺儒朱之瑜(舜水)が亂を避けて長崎に流寓してゐるのを招聘して師事し、道を問ふて大に禮遇を拂はれたのである。

次に、卿の畢生の大事業たる大日本史の編修は、十八歲の時からの計畫であつた。爾來史料を蒐集して、採擇すべきものは左右の人々に命じてこれを抄錄せしめられた。尋いで史局を駒込の別邸に置いて、安積澹泊、朱舜水などを撰んで其の編纂に從事せしめられたのであつた。この事業は明曆三年二月に始まつて、前後人を更へること數十百人、其の後二百數十年を經て近年漸く大成された。大日本史の體裁は全く史記に倣つたものであるが、其の編修の精神に於ては、かの春秋と一味相通ずるものがある。乃ち大義名分を明かにすることに力を注いで、尊皇賤

覇の意を寓したのであつた。又、『禮儀類典』を著して朝廷の古式を闡明にし、山陵を修築して勤王の義を大に顯彰せられるなど、後世の勤王論の先驅をなしてゐるのである。

元祿三年、六十三歳を以て家督を甥の綱條卿に讓り、水戸の郊外西山の幽居に退隱して、質素な生活を樂しまれた。其の後十年を經て遂に薨ぜられた。謚して義公と申上げる。

西山やいるさの月のはかなくも
しばし宿かる宿のしら露

薨去の報を聞いて、京都から哀悼の意を表した歌詩文を贈つて來た者が少くなかつたのは、前後に殆ど例のないことであつたといふことである。



# 山鹿素行

山鹿素行は元和八年、奥州會津の領主蒲生忠鄕の老臣町野家に、當時賓客の待遇を受けてゐた山鹿高道の子として生れた。(蒲生氏が沒落してからは、山鹿父子は江戸に出て、苦しい浪人生活を續けねばならなかつた。窮乏の生活の中からでも、高道は一子甚五左衞門を教育することを怠らなかつた。六歳の頃から師に就いて學問を始め、八歳頃までには四書五經、詩文等は大抵讀み覺えたのであつた。

そこで其の翌年、甚五左衞門は林羅山(道春)の門に入ることが出來た。羅山は大學頭として天下の儒學者を率ゐ、その勢威は誠に飛ぶ鳥をも落さんばかりであつた。彼は林家で、道春、永喜(道春の弟で東舟と號す)等の碩學の前で試問を受けたのであつた。その試問といふのは白文の『論語』を讀むことであつた。少しも淀むところなく、誠に流暢に讀み上げた少年の顏には歡びの色があり〳〵と現れてゐた。永喜先生は一時呆氣にとられてゐたが、やがて微笑みなが

ら「幼少な者でこんなにすら〳〵と讀めるとは感服の至りぢや。併し惜しいことには、そちは田舍學問をしてゐたと見えるのう。句讀點の工合の惡い處が少しあるわ。」

といつて、背後に坐つてゐる兄を振り返つて見た。道春老先生もにつことして、二三度鷹揚にうなづいて見せた。

それだから、師の教授振は他の弟子達に對する時と異つて誠に念入りなものであつた。甚五左衞門の學力は日々に進み、其の發達の素晴らしさは驚異の的となつてゐた。十一歲の春、歲旦の詩を初めて作つて師の批評を乞ふた。道春は一字改めた上、序文をさへ書いて、「幼少の者の述作特別に感心した」との旨を手紙に認めてこれに添へ、和韻をして返した。

其の年ことである。堀尾山城守の家老揖斐伊豆は、甚五左衞門の秀才振に目をつけて、或時自宅へ呼び寄せて書物を讀ませた。そして是非堀尾家へ仕官してもらひたい、三百石は下されるからと說いたが、父の高道は辭退して如何しても應じなかつた。

又、十四歲の頃、詩も文も共に達者に書いたので、傳奏飛鳥井大納言に召されて卽席で詩を作つて上つた處、大納言は非常に感歎して、和歌を詠んで和韻をして下された。烏丸大納言も



このことを聞かれて、卽座に章句を作つて下されたことがあつたので、彼は失禮とは思つたが、立ちどころに對をいたしてこれ又面目を施した。「何分若年のことではあり、殊に卽席でお相手などをしたのであるから、只今見ては笑話の種であるが、各々の御感淺からず、其の後も兩卿から懇情を以て遇せられ、折々謁して詩文の贈答をした。」と彼自身もいつてゐる。

十五歲の時、初めて衆人の前で『大學』を講じたが、人々は皆彼の學識に敬服したと。

其の翌年、大森信濃守、黑田信濃守の切なる希望に依つて孟子を講義し、又蒔田甫庵老人の懇請もだし難く『論語』をも講じ、翌年十七歲の春からは、兩方とも公開の席で講義するやうになつた。（配處殘筆に據る）

素行は儒學の研究と同時に兵學をも修め、又武藝にも力を用ひた。十五歲の頃から、當時の大兵學者尾畑勘兵衞景憲及び其の高弟北條安房守氏長に就いて甲州流の軍學を研究した。此の兩名家に就いて親しく其の教を受けて、彼素行はその儒學に於て卓越したやうに、兵學に於ても拔群の成績を示した。二十歲の時には門弟中の上席を占め、其の翌年彼は從來に例のない印可の副狀をさへ給せられた。その文は

「於レ文而感二其能勤一、於レ武而歎二其能修一、噫有二文章一者必有二武備一、古人云、我又云。」といふ讃嘆の辭に充ちたものであつた。

尙ほ、十七歳頃から、高野按察院光宥に就いて神道や和歌等を學び、其の後廣田坦齋の門に入つて忌部流の唯一神道をさへ修めた。彼は『源氏物語』や『伊勢物語』、さては『大和物語』等の物語類や、『枕草紙』、『萬葉集』、『百人一首』、『三部抄』及び『三代集』をも、二十歳位の時までに一通り修めた。『職原抄』などの有職故實の學の不明な箇所は、親しく菊亭大納言の教を受けた。

斯くして、素行の英才は夙に學者間に認められ、又諸侯より高祿を以て招かれたけれど、彼は尙ほ修養を積んでからといつて辭退し、專心經學及び兵學の研究に從事して、少しも倦むところを知らなかつた。其の後、將軍家光の懇望に依り、幕府へ仕へようとしたが、公方の他界に遭つて遂に果さなかつた。併し時は終に來た。彼は赤穗侯淺野內匠頭長友（長矩の父）の懇請默し難く、承應元年始めて廬を出でて仕へることとなつた。播磨の片田舍に下つた彼は、九年間熱心に學を講じた。赤穗藩は小藩ではあつたが、藩侯が學藝の奬勵に力を注いでゐたから、以



前からなか〳〵學問が盛であつた。そこへ今、天下の大兵學者にして而も經學に明るい少壯有爲の山鹿素行を迎へることが出來たので、一藩の文物は頓に興り、諸藩より羨望の眼を以て見られるに至つたのは當然である。併し素行は尙ほ遠大な志を懷いてゐたから、遂に辭して江戸に歸つて研鑽を怠らなかつた。諸大名を始め教を乞ふ者が、常に數千人に上り、門前市を爲すの盛觀を呈し、威勢隆々として、山鹿甚五左衞門素行の名は廣く天下に喧傳せられてゐた。

斯く素行の名聲が愈〻高まつて行きつゝある際、突如奇禍がその一身に降りそゝいで來た。好事魔多しとは實に此の事であらう。それといふのは、最近出した彼の著書の『聖教要錄』が當局の忌諱に觸れたからである。彼は當時の經學が、漸次聖賢の道を離れて、異端邪說に陷らんとしつゝあるのを大いに慨して、孔孟の本義を闡明にしようとした。一本調子な彼の性格は、何事に對しても妥協するを屑しとしなかつた。彼は元來林家の門に出でた人であるが、その學派の人々の態度に對して頗る慊焉たるものがあつた。であるから、彼はかなり端的に朱子學を攻擊した。不穩な著述をしたといふ理由の下に、彼は遠く赤穗へ流謫せられることとなつた。當時の事情より推察するに、彼が流竄の刑に處せられた眞因は單なる儒學說——官學に對する

反逆といふことだけではなかつたらしい。それといふのはかうである。由井正雪や丸橋忠彌一派の慶安の變後、幕府は極度の神經過敏に罹つてゐた。で、彼の兵學や輿望に對して一種の薄氣味惡さを感じてゐた幕府は、諸侯中彼に歸服するものが漸く多くなるのを見て、一層恐怖の念に囚はれ、名を經學の異同に藉りて、彼を貶謫したもののやうに思はれる。

彼は配所に於ても厚く遇せられた。藩主淺野長友を始め、一藩の人々の尊敬は前にも增して深かつた。斯く彼は、前には一國の賓師として九ケ年間、今又流竄の身として十星霜の久しきに亘つて赤穗に滯在してゐたから、彼の實行的な經學と、その精緻な兵學とは、必ずや一藩の子弟を訓化して、士風を大に鼓舞作興せしめたものがあつたに違ひない。大石良重（良雄の祖父）は兵學に於ては高弟の一人であり、內藏之助その人も當時は青年であつたから、素行の薰陶を親しく受け、罪赦されて東都に歸つた後も良雄は贄を執つて、六韜三略の奧儀をさへ授けられといふ。

彼の著書は、左の如くの多きに上つてゐる。

『聖教要錄』　三卷　　『山鹿語類』　四十三卷



『武教小學』一卷　　『武教全書』八卷
『武家事記』五十卷　　『中朝事實』二卷
『原源發機』二卷　　『配處殘筆』一卷
『謫居童問』三卷

彼の學は後に長州に傳はつて、近世の偉人吉田松陰を出すに至つた。松陰は頗る素行に私淑して、その家塾松下村塾では、常に『聖教要錄』や『中朝事實』等を講じてゐたといふことである。又最近では、軍人の龜鑑、武士道の典型と崇められてゐる大將乃木希典も亦、素行の熱烈な崇拜者で、『中朝事實』等を活版に附して、知人間に頒つたことだけでもよく窺はれるのである。このやうに、彼の學術が後世に感化を及ぼしたことは、寔に大なるものがあるのである。

# 松尾芭蕉

芭蕉の家系については、確かなことは殆どわからないが、其の先祖は平家の一門の平宗清から出てゐるといふ説がある。芭蕉の家は、代々、伊賀に住まつて、藤堂家に仕へてゐた。芭蕉は九歳の時から、上野の城主藤堂新七郎良精に仕へて、其の子主計良忠の小姓を勤めてゐた。主君良忠は文學の愛好者で、殊に俳諧に興味を感じ、號を蟬吟といつた。芭蕉は、朝夕、蟬吟の傍に扈從してゐる間に、文學上の感化を非常に受けたらしい。其の上彼自身が文學的な素質を持つてゐたから、だん〳〵成人するに連れ、二人は主從とはいへ、親しい心の友達として許されてゐた。蟬吟は、芭蕉が近頃めつきり句作に上達したのに驚きの目を瞠つた。芭蕉は、主君から始めて俳諧の手ほどきをして貰つたのである。

いぬとさるの世の中よかれ酉の年



の句は、明暦三年(丁酉)彼が十四歳の時の作だといはれてゐる。蟬吟は、京都の國學者北村季吟に師事してゐたから、芭蕉も一緒に句稿を整へて、季吟の批點を請うたこともたび〳〵あつた。

大阪や見ぬ世のゆめの五十年
そら高き霜のつるぎや橋の上

此の二句は蟬吟子の作である。芭蕉は物質的の庇護を受け、尚ほ其の上、心の糧を與へてくれる主君を、どれ程に德として、全身の敬愛を捧げてゐたかもよく想像される。此の恩遇深き主君は、不幸にも寛文六年四月、遽かに病んで早く世を去つた。其の敬愛の念が深かつただけに、其の主君が急に亡くなつたことに依つて受けた彼の哀傷の心が、如何に大きかつたかは、吾々の想像以上であつたかも知れない。彼は毎日悲歎の涙に暮れてゐた。其の遺骨を奉じて高野の山に登り、報恩院に納めて、懇ろに供養を營んだ彼は、歸國後も快々として樂しまなかつた。彼は

痛切に現世の無常を感じ、又主君の菩提を弔ふために遂に世を遁れた。彼は殉死をもしかねまじい決心であつたが、當時は殉死が嚴禁せられてゐたために、彼は此の遁世の路を撰んだのである。二君に仕へないといふことをいつて、切に暇を乞ふたけれども、許されさうにもなかつたから、其の年の秋、同僚の城孫大夫の門に短冊を貼つて、

雪とへだつ友かや雁の生わかれ

と一句殘して、故郷を遁れ出た。これが彼の二十三歳の時の事であつた。(奥の細道菅菰抄に據る)

併し郷里を脱奔した彼は、主君の冥福を祈るため佛門に入つたであらうか、否な彼は直に京都へ上つて東山の麓に居り、北村季吟に師事したのである。して見ると、彼の遁世の動機は主君のためばかりであつたとは思はれないのである。

思ふに、人の運命は、單に周圍の事情のためのみに左右せられるものではない。假令、さう見えることはあつても、實際の原因はもつと深い所にある。即ち自分の内に潜んでゐる性情が



一生の運命の鍵となつてゐるのである。芭蕉は生れつき、弱々しい體質を持つてゐた。而して物に感じ易く、物を思ひつめ易く、荒々しい事が嫌ひで、靜かに自分の魂を見つめてゐたいといふ風であつた。其の性情が、敬愛を捧げてゐた主君の死に對して、人一倍の感傷を覺えしめたであらう。又其の性情は、彼をして平生から、武人としての生活を厭はしいものと感ぜしめてゐたのではあるまいか。彼は心の芽の伸びるべきものが成長する年頃となつて、生來の藝術的の天禀が、武人としての堅苦しい乾からびた生活に叛逆を起さなかつたとは思はれない。主君蟬吟の死に依つて、芭蕉は非常に嚴肅なものを體驗した。心のうちにまだ眠つてゐたものが、これで目覺まさられたのである。蟬吟の死は彼にとつては、自分の死のやうに悲しかつた。それで彼は死に身になることが出來た。其の死に身の強さが、自分の環境に對する愛著や拘束を離れて、自分の信ずる道に精進せしめる決心をなさしめたのである。彼は、自分自身の魂の中に成長しつゝある藝術的生活に對する切なる憧憬に身を委ねたのである。若し蟬吟の死に遭はなかつたならば、彼はいつまでも因襲から解放されることがなかつたであらう。

彼は京都で季吟の指導を受けたばかりでなく、又大阪へ赴いて西山宗因の門に入つたとの說

もある。宗因は所謂談林風の創始者である。芭蕉が、談林派の影響を大いに受けたことは事實である。隨つて、斯る傳說を生じたのであらうが、果して宗因の敎へを受けたか如何かは疑はしい。芭蕉は在京中、釣月軒とか、泊船堂とか、宗房とかの號を用ひた。

『貝おほひ』は、彼の著として世に現れた最初のものであるが、其の中に載せられた三十番の句合は、當時の流行語や、小唄の中の言を句に結んだのに、判詞も輕口もどきで書いたものである。

此の中に出てゐる彼の句には

着ても見よ甚兵衛が羽折花ごろも
和歌のあと問ふや出雲の八重霞
時雨をやもどかしがりて松の雪

といふやうなのが見える。これは要するに文字の遊戲に過ぎない。これには何等深遠な思想もなければ、又透徹した觀照の世界もない。これを後に彼が創めた正風に比べると、實に天地霄壤の差がある。彼の心は餘りに佗しかつた。主君の死を動機として、世を遁れた彼の心は、單なる文字の遊戲に依つて紛らすには、餘りに寂しかつた。紛らすといふことは、畢竟自己欺瞞である。如何に紛らさうとしても、如何しても紛らし切れぬ寂しさが、いつも心の底に殘つてゐる。殊に彼のやうな藝術に精進しようとする人にとつては、斯る二重の生活を久しく續けることが堪へられなくなつて來た。此の遊戲的な態度を捨てて、眞實の心を以て人に對し、或は自然に對し、眞に自己の心の安住の地を求めようといふ心持になつたのは、洵に自然なことである。斯うした骨身を碎くやうな苦惱の後、落ちつき得た境地が卽ち『猿簑』以後に現れてゐるのである。彼の俳句には、彼の生活其の物がそつくり其の儘出てゐるものが多い。卽ち俳句といふ彼の藝術が、彼の自然禮讚の生活と、ぴつたりと合致して隙がない。これが句といふものの上で、いや日本の詩といふものの上で、芭蕉に依つて發見せられた尊い眞理である。



寛文十二年の九月、芭蕉は遙々江戸へ下つた。此の時彼は二十九歲の靑年であつた。これから八九年の間、彼はかなり生活難の苦しい味を嘗めた。彼が江戸に來た目的は、俳諧の門戸を

張つて衣食するつもりであつたらしい。彼が北村季吟の許に留つて勉强して居たのも、職業的な俳諧の宗匠に必要な、古典訓詁や、俳諧連句の格式等を研究して居たのであつた。江戸に來てからは、同門の杉山杉風や、小澤卜尺をたよつて暫く寄寓しながら、江戸の模樣を見てゐたが、無名の一青年宗房の許へ來て教を乞はうなどといふ物好きのある譯もなく、假令、彼自身が作家として如何に自信があるにしても、てんで名も知られてない彼が俳諧で食を得ることの出來ないのは明らかであつた。さうかといつて、彼はいつまでも杉風や卜尺の食客をしてゐるのも心苦しいので、彼は職を求めねばならなかつた。丁度其の頃、小石川の關口邊に水道工事が始まつてゐた。彼は卜尺の紹介で其處の役人となつたのが、延寶元年彼が三十歳の春のことであつた。上役に對して機嫌をとるやうな事をいつたり、同僚に對して愛嬌を振り撒くといふやうな事は、芭蕉には全然出來ない藝當であつた。彼は仕事をしてゐながらも、時々矢立を出して句を書きとめてゐることもあつた。斯うして彼は、俗吏となつて忙しい事務に携つてゐる間も、風雅の道を棄てなかつた。仕事の暇には、附近の龍隱庵といふ處へ出かけて、休息しながら早稻田界隈の田圃や茗荷畑などを眺めて、句作に耽つたことも屢々であつた。其の當時、



關口から早稻田へかけての景色は、江州の粟津に似てゐるところもあり、又江戸川に架けられた假橋が瀨多の長橋を偲ばせる趣があつた。それで芭蕉は、このあたりの風景を非常に愛してゐたと傳へられてゐる。

五月雨にかくれぬものや瀨多の橋

彼の性格や、體質や、趣味が如何しても、こんな勤め人としての仕事に堪へなかつたと見え、久しからずして彼は役を罷めることになつた。俸給生活は嫌だし、それかといつて、商賣を始めたり、或は職人となることも出來ないとすれば、やはり最初の目的通り、俳諧を以て衣食するより外に道はない。如何に貧困と戰はうとて、それが自分の好む道であれば、その中にいひ知れぬ滿足がある。而してそれを貫きさへすれば、餓死することもあるまい。さう心をきめて、彼は愈々俳諧の研究にすべてを捧げることにした。彼が自分の藝術に精進すればする程、生活の脅威は彼の身邊に迫つて來た。彼は諸所を轉々してゐた。さういふ風に市中を流浪してゐた

ことは、生活が不安定だつたからであらうと思はれる。

彼はたうとう、深川に落ちつくこととなつた。深川は當時、市外のこととて生活も餘程容易であつたし、其上、杉山杉風が六間堀にある別莊を師のために提供してくれたからである。別莊といへば立派なやうに聞えるが、實は僅かに六疊一間しかない小家であつた。そこならば家賃の心配もなく、米や味噌等の日用の生活必需品は、凡て弟子が貢いでくれることになつたのである。

芭蕉植ゑて先づにくむ荻の二葉かな

庭には數株の芭蕉を植ゑてあつたので、これから草庵を芭蕉庵と名づけ、自ら芭蕉と稱した。草庵は屋根が傷んで野分の雨が漏るので、盥を出して雨うけをしなければならなかつた。

芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな



彼の門弟の河合曾良は、芭蕉庵の近くに住んでゐて、朝夕、薪水の勞を扶けてゐた。

米買に雪の袋や投頭巾

或夜、雪の降りしきる中を、いつもの通り曾良は芭蕉庵を訪れた。懶い芭蕉は、爐に火の消えたのも其の儘になつてゐた。

君火をたけよき物見せん雪まろげ

貞享元年八月、四十の年、門人の千里を伴ふて旅に出た。久し振で、故郷の伊賀へ歸らうと思つたのである。此の時の紀行は

野ざらしを心に風のしむ身かな

の句によつて、『野ざらし紀行』といはれてゐる。又甲子の年であつたから、『甲子紀行』ともいつてゐる。此の時、富士川へかゝる途中、『馬上の吟』として

道の上の木槿は馬にくはれけり

の名句を詠んだ。

古池や蛙とび込む水の音

雲折々人をやすむる月見かな

馬をさへながむる雪のあしたかな

の三句は、貞享三年の春に出た『春の日』の中に出てゐる。

其の翌年の秋、彼は再び關西旅行の途に上つた。此の時の紀行を『笈の小文』といひ、伊良



古岬の路の、海から吹き上げて來る寒風に吹きすくめられて、

冬の日や馬上に氷る影法師

と、薄い日に照らされた自分の影法師をしみ〴〵と愍んだ。

元祿二年彌生の頃、曾良を伴つて、飄然奥羽行脚に旅立つた。其の旅行記なる『奥の細道』は古今の紀行文中、比肩すべきものがないといはれてゐる名文である。

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口をとらへて老をむかふるものは、日々旅にして旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやまず。海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蛛の古巣をはらひて、やゝ年も暮れ、春立つる霞の空に白川の關こえむと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取る物手につかず、股引の破れをつゞり、笠の緒付けかへて、三里に灸すうるより、松島の月まづ心にかゝりて住める方

は人に譲り云々。

夏草やつはものどもが夢の跡

平泉に於て、藤原氏三代の榮耀の跡が兵燹にかゝつて、今はたゞ草むらとなつてゐるのを見て、芭蕉は往時を追想し、涙を流して時の移るのも知らなかつた。

五月雨の降のこしてや光堂

蚤虱馬の尿する枕もと

五月雨をあつめて早し最上川

象潟や雨に西施がねふの花

荒海や佐渡によこたふ天の川

一つ家に遊女もねたり萩と月



加賀の小松では、

しほらしき名や小松ふく萩すゝき

むざんやな甲の下のきりぎりす

此の句は、同地の多田八幡に參詣して、齋藤別當實盛の兜を見た時の作である。

初時雨猿も小簑をほしげなり

の句が卷頭に出てゐるので「猿簑」と名づけられたものは、蕉門のみに限らず、故主蟬吟の句などもあり、又餘り名も聞えぬ人の佳い句も入れられてゐる。此の集は「花實兼備」と稱せられてゐるもので、技巧を競ふ弊もなく、さりとて餘りに枯淡に過ぎもせず、景と情との調和がよくとれた句が撰まれてゐる。

其の他、『炭俵』、『續猿蓑』等が續々出て、正風が天下を風靡する勢であつたが、元祿七年九月大阪で病み、其角、去來、丈草、支考等の門人にみとられながら、

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

の一句を殘して、遂に五十一年の人生の旅を終へた。

支考の傳へるところでは、門弟は三千に上り、其のうち俳諧を以て一家をなすだけの力のあるものは、凡そ三百人あつたといふことである。其角、嵐雪、杉風、去來、丈草、越人、北枝、野坡、支考、許六等が蕉門の十哲といふ。



# 新井白石

新井白石は科學的な頭腦を具へた史學者であると同時に、卓越した政治的才幹を持つた稀有の人傑であつた。彼は詩文に於ても、兵學に於ても、經書に於ても傑出してゐたが、殊に歴史、言語の方面や、制度、典故の學に深い造詣を有してゐた。唯それだけでも、彼は偉大な功績を顯はしたのであるが、尙ほ其の上、政治家として數年間、得意の地位を占めて、種々の改革に當つたのである。

勿論、彼の政治上に於ける經綸は、實際方面よりもより多く讀書の方面から生れたのであるから、德川幕府の保守的武斷政治と調和して行くには、かなりの距離がないでもなかつた。彼は實際的よりも寧ろ理想的であつた。武斷主義を脫して文治主義の遂行に凡ての努力を捧げてゐた。それがため、適切に役立たないものもないではなかつた。また餘りに制度や典章の美といふ上に重きを置き過ぎた傾さへもあつた。だが、儒者としては、彼ほどの實際的效果を政治の

上に現はし得たものは餘り多くはない。それに彼は、保守的武斷政治に伴ふ弊害の一部をも除き去つた。だから、單に彼を政治家として見ても、洵に卓越せる才能の所有者であつたのである。

白石は明暦三年二月十日江戸の柳原に生れた。彼の父與次衛門正濟は、上總久留里の城主土屋民部少輔利直に仕へて、目附役を勤め、君寵を受けてゐる硬直の士であつた。白石の幼名は與五郎といふのであつたが、主君利直はいつも彼を「火の兒」と呼んで、一方ならぬ鍾愛を注いでゐた。「火の兒」といふのは、彼が明暦の春の大火の直後に生れたからである。利直は、寵臣新井正濟の初めの男兒であるといふので、我が子の如く愛された。斯うして幸福な月日を送つてゐるうち、彼は六歳の春を迎へた。

或日盛岡の藩主南部信濃守利直の訪問を受けた土屋侯は、側らに遊んでゐる白石を指して、その天才的な聰明さを誇らしげに語られた。三歳の時、「天下一」の三字を書いて、先づ其の父母を驚かしたことや、其の翌年「太平記」評判の講席に出たことや、殊に近頃では詩を誦することなどを聞いた南部侯は、自分は子供がないから世嗣に申受けたいと切に望まれたが、土屋侯



は承諾しさうにもなかつた。それでは家臣にでもして、行く〳〵は千石の重臣として用ひたいからと、百方手を盡して所望せられたが、結局駄目であつた。傍らで此の話を聞いてゐた土屋家の家臣達は、不幸な子よ、十萬石の主となるか、或は千石取りとなれるものをと、彼の將來のために悲しんだのであつた。併し、此の時彼が南部侯の手許へ引き取られてゐたならば、後年彼が爲し遂げたあの偉業は到底見ることが出來なかつたであらう。げに人間萬事塞翁の馬である。

彼が九歳の秋、父母はもはや峻嚴な教育を施して、眞の武士とせねばならぬと思つて、一日に行草を三千字、一夜に一千字の習字を課した。夏のやうに日脚の長い季節は、如何にか日暮れ時までに、日課を終へることは出來たが、秋の末つ方からずつと冬の間は、椽側へ机を持ち出して書かねばならなかつた。又夜が更けて行くにつれて、睡魔のために思はず筆を取り落すこともあつた。これではいけないと、彼は桶二杯に冷水を汲み入れ、睡氣が襲つて來ると、一杯づつ頭から浴びて習字を續けたのであつた。だから上達が著しくて、翌年からは父の代筆をするようにさへなつた。

正濟は、彼が讀書に耽るのを苦々しく思つた。武士の子として餘り學問に熱中することは、